569-142
1200501517327
569
194
142

改造文庫

第二部　第百九十四篇

ひ　戀　山

宇野浩二著

改造社出版

104

納本

改造文庫
第二部　第四百九十篇

戀山

宇野浩二著

改造社出版

山戀ひ　目次

山戀ひ

前篇……七

後篇……八七

一と踊……一六三

心中……一八九

人心……二四三

山戀ひ（前篇）

569-142

北に遠ざかりて、
雪白き山あり。
――小島烏水著「日本アルプス」の中の言葉――

いつから私がそんなに山を戀するやうになつたか、私は知らない。考へて見ると、極く少年の頃から確にさういふ傾向はあつたとも思へるし、又別の考へ方に依ると、それは多分何處で何といふ山を見初めたのが元ではなかつたらうか、といふやうな記憶がないでもない。すると又ある友達が言ふには、それは君がもう三四年越しに、今の世には珍しいプラトン的な戀をしてゐる、そら何とかいふ名前の藝者だつたね、（さうさう、ゆめ子！）あの女の住んでゐる信濃といふ山國を懷しむ餘りに起つたところの氣持、つまり變態戀愛とでもいふものなんぢやないかね？――と、それも無理とは思へないのである。

だが、或秋の日、私が町で偶然友達と會つて、偶然旅行しようかといふ相談が起つて、そして二人でとあるカツフエに行つて、一枚の地圖の上に額を寄せながら、何處がいいだらうか、何處にしようかといろいろ迷つた末に、到頭信濃の國のその小さな溫泉町に極めた時、誰が、どうして、そこで私

がさういふ女を見ようと思つたであらう。

實際、その時私は山を見ようと思つたのである。「みすすかる信濃の國は日の本のくぬちのうちにいや高き國にしあれは峰聳え山重なりて久方の雲井に近くとふ鳥もつはさをたわみあらかねの巖ふみ行くけものすら走るをなみや谷川はくるめき流れ岸高くけつれるか如そはたちて渡るすへなみ路たえしところ多かる……」と勝海舟が歌にもある。私はさういふ未だ私などの見たこともない高い山々に圍まれた、藍色の水を湛えた山の湖のほとりにある、温泉の湧く町の景色を私の想像の畫に浮べながら、早速その晩の汽車に乘つて、友達と二人で出かけたのである。

しかし、實際は私の想像の畫とは可成り違つたものであつた。その山の湖の景色は未だ見なかつた時に想像した半分の魅力さへ持つてゐないやうに見えた。湖とその周圍の猫の額ほどの盆地（即ち諏訪の平）を取卷く山々は、例へば醜女のやうに、悉く低くて何の奇もないのである。アルプスの方は見えないのですか、八ヶ嶽も見えないやうですね、御嶽は見えないのですか？　と宿の番頭に聞くと、ええ、ここは廻りにすつかり山がありますので、外の山が見えないのです、と彼は何の惜しげもなく答へた。

さういふ譯で、その旅では、目に見える景色から言ふと、想像して來た興味がずつと割引せられた形があつたが、その代りに、それを償うて餘りある、思ひがけない天惠の魅力が私たちに與へられ

たのであつた。といふのは、丁度私たちが東京を立つ日までの、その一週間ほどの間といふものは、所謂殘暑の氣候で、而もそれが眞夏の時にも一度もなかつたやうな暑さがつづいたのであつた。君、どういふ譯だらう、僕は暑さには相當に強い方であるが、この暑さにはあやまるね、仕事も何も手につかないぢやないか、何處か涼しい所へ旅行しようか、――そして私は友達と旅に出たのであつた。私たちを乘せた汽車が飯田町の停車場を出たのは夜の十一時であつた。諸君も知らるる如く、それは我國でも第三流の鐵道線のことであるから、客車とはいふものの荷物車の姉さん位にしか當らない窮屈な車の中は、殊にさういふ嚴しい殘暑の頃のことで、晝の暑さの殘りの上に、トンネルを幾つも幾つもくぐるので、自然の暑さと煤烟と、人いきれとで、私たちは忽ち旅に出たことを後悔し合つたほど苦しまされねばならなかつた。だから、私たちはどうしてもそこに行かなければならないといふ譯もなかつたので、幾度も、うとうとと半分眠つては、暑さの爲に目を醒まして、互に不快さうな顏を見合はしながら、もういつその事この邊で下りてしまはうか、と言ひ合つた位だつた。そして私たちは汽車が一つの驛に着く毎に、その僅かな停車時間を、替り合つてプラットフオオムに息拔きに下りた。ところが、汽車の中の暑苦しさに引きかへて、驛々のプラットフオオムの空氣の冷たさは、風を引きぼしないかと心配になる程であるのを發見した。汽車は甲斐の國を東南から西北へと横切る爲に走つてゐるので、どのプラットフオオムに下りても、黑々とした夜の山が間近に聳えてゐて、天には

天の河が煙るやうに流れて見える晴れた晩だつた。初めのうち、私たちは、汽車の中は何だか、流石に夜が更けると、外は隨分ひやひやして涼しいね、多少は山國へ來たせゐだらうか、然し又夜が明けて日が出たら暑くなるんだらうねなどと話し合つた。

汽車が甲府を通る時も未だ夜が明けなかつた。汽車の中の暑さに可成り閉口し切つてゐた私たちは、もう殆どそこで下りるつもりをしてゐた。ところが、そこでは案外大勢の外の客たちが下りてしまつたので、後の汽車の箱の中は、各々の客がみんな腰掛の上で横になつても十分なほどに空いてしまつた。で、私たちは更に我慢して、乘りつづけることにしたのである。

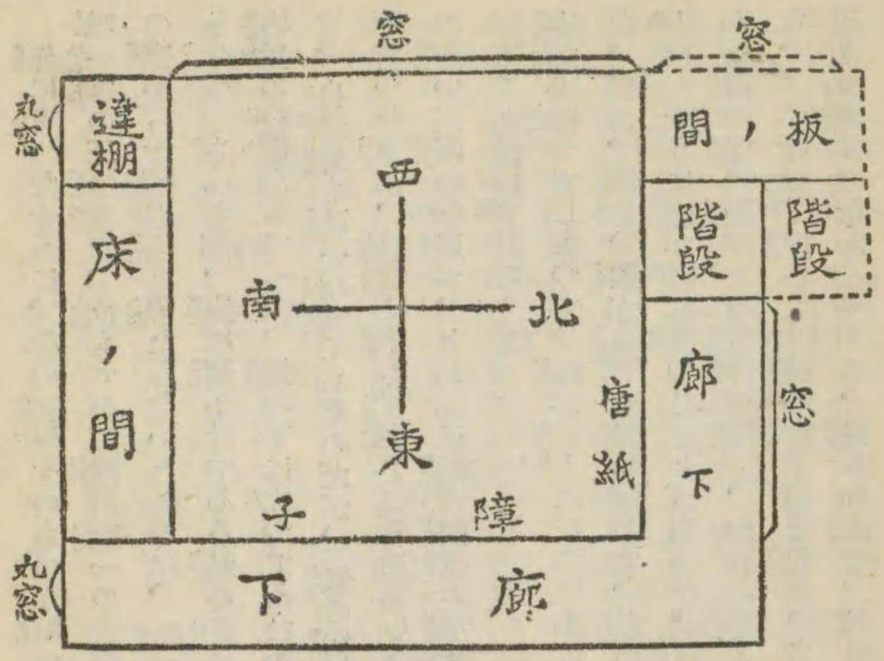
私たちは昨夜からの疲れで、それから一二時間の間うとうとと眠り入つたと見えた。その間に夜が明け放れたのであるが、ふとぞくぞくするやうな膚寒さを覺えたので、私は目を醒まして、君、非常に涼しいね、と傍に寢てゐる友達に向つて言ふと、彼は目を醒ましてゐたと見えて、即座に、涼しいどころか僕は少し寒いよ、と言つて腰掛の上に起きなほつた。その時丁度汽車が止まつたので、もうどの邊だらう、と半分獨言ちながら、窓の外を覗くと、「ふじみ」と認めた白い立札の傍に、海拔三千百三十五尺と書いた棒標が立つてゐた。君、もう信州に這入つたんだよ、ここは海拔三千百三十五尺ださうだよ、と私が何といふ事なく、一種名狀し難い身震ひするやうな感動を覺えながら、友達に報告すると、成る程、流石に山國だね、これは確に山國の寒さだよ、東京とは隨分溫度が違ふね、と

彼は着物の襟を搔き合はせながら言つた。

それは、天然の時候にも、丁度曆の上でのやうに、例へば柱曆で昨日まで冬であつたのが、一枚めくるとその日から立春と認められてあつたり、或ひは何月何日に夏が終つて、その翌日の何月何日から秋が立つと言つた風に、はつきりと或日を境にして二つの季節の分れる時がある。恐らく私たちが東京を乘り出して、甲斐を横切つて信濃に向つた夜、偶然にさういふ日が來たのであらうか。つまりその夜を境にして、この天地に夏と秋との交替があつたのに違ひない。だが、僅か一晩の汽車に依つて、夏の東京から秋の諏訪に來ようとは眞逆に想像がつかないものだから、私たちはその一夜明けた膚寒の氣候は、悉く山國のせゐにして考へたのである。折から、昨夜汽車の窓から見た星空に引きかへて、低い山々に取卷かれ、低い灰色の雲に閉ぢられて、その山の湖の沈鬱極まる表情を湛えてゐた。寒いね、何處へ行かう、何といふ宿屋がいいんだらう、實際冬見たいだね、などと話し合ひながら、暫くの間ぼんやりと汽車を下りた驛の前の廣場に佇んでゐた私たちは、淋々と吹く風に膚に寒さを覺えた程である。即ち山や湖の景色は、想像した半分の魅力をも持たなかつたけれども、それを閉ぢ込めてゐる秋冷の氣か、山國の氣か、兎に角思ひも及ばなかつた氣候が私を感動させるに十分であつた。だから、自然、その初めに一見して失望させられた景色さへも、終には、私にどうしても忘れられない印象を與へたのである。

そして、私は二週間ばかりその地に滯在してゐたのである。その二週間の日の大方は、しとしとと降る秋の雨に閉ぢ込められた。私と一緒に來た友達は、急に東京に用事が出來た爲に、一週間ゐて私より先に歸つて行つたので、私は一人になつて、毎日々々窓にもたれて、霧のやうな雨の間を、湯の煙が悠々と灰色の空に向つて立ち上つてゐるところの、目の下の溫泉町や、その向うの鉛色の湖や、ともすると雨の爲に隔てられて見えなくなるところの、間近の山々を眺めて暮した。

私の宿屋は町の東部に當る高臺の、その又山に沿うた側に立つてゐた。而も私の占めてゐた部屋はその家の唯一部屋切りない三階の八疊の間であつた。それは不思議な部屋で、といふのは、その西側の、町の湖水とを見晴らす窓は、高さは略五尺で、幅はその側面全部であるから、正に二間もある、恐らく近代劇の舞臺面であつても、餘りに不自然だといふ理由で採用せられないに違ひないやうな、尤大なものであつた。神樣は私をして、その山の湯の町と、山の湖の景色と、周圍の山々の眺めを樂しませる爲に、その見えない手で私をそんな不思議な窓を持つ部屋に導かれたのに違ひないのである。南側は一間半が床の間で、殘りの半間に違ひ棚などが造り附けられてあつたが、その棚の上にも亦比較的大きな丸窓が附いてゐた。さて東側は一ぱいに四枚の障子が嵌まつてゐて、その外は緣側になつてゐたが、(それはどういふ心持の人が建てた家なのであらうか?)その緣側の南の突當りの半間の壁にも亦大きな丸窓が附いてゐた。そして、最後に北側であるが、そこの西寄りの一間は壁に



なつてゐて、後の一間は二枚の唐紙に依つて外の廊下に通じてゐた。ところがその廊下の北側にも亦一間と半間との四角な、硝子障子の嵌まつた窓が附いてゐるのである。便宜の爲に、今その部屋と窓との關係を圖にして示すと、

上圖のやうになるのであるが、更に先の說明に附け足して置きたいのは、(上の圖參照)この部屋から下の二階に下りる爲に、唐紙を開けて外の廊下から階段を西向いて下りると、それは五六段で盡きてそこに一間と半間の板の間があつて、その西側にも亦一つの四角な硝子窓があることである。卽ちそこは私の部屋である三階と、二階との中間の高さにある位置で、その板の間から三階へと半對の方向に向つて、階段を五六段下りたところに、二階の廊下がある譯なのである。

先に言つたやうに、その宿屋そのものが町の一番高見にあつた、そしてその宿屋の中でその部屋は唯一棟の三階建で、而もその三階の唯一のもので、從つて最も高い位置にあつた。現にその部屋の西の窓から十間以上と隔たらないところに、町の消防の火の見櫓が立つてゐたが、その尖に吊つてある半鐘でさへもが、窓に腰かけてゐる私の目より高い位置にはなかつた。何故と言つて、それは私の宿屋の位置から言へば、崖の下に立つてゐたからである。而もその火の見櫓のある所が町での高臺で、自然最も高い場所であるのだが、私の宿屋はその直傍から始まつてゐる裏山の、中腹にあつたと言つた方が、諸君に早く了解されるであらう。然し、それ等の如何なる事よりも、その不思議な窓の多い三階の部屋が、どんなに私の將來の生活に重要な交渉を持つやうになつたか、神樣の外に誰が知ることが出來たらう？

友達が歸つてしまつて、私が一人になつてからの一週間の大部分も、大抵の日は雨に暮れて雨に明けた。だが、或日、雲が悉く影を消して、私の部屋の何處の窓から天を仰いでも、見渡す限り、染め上げたやうに空が晴れ渡つたことがあつた。私は朝起きると早速西の窓を一ぱいに開いて眺め、それから南の違ひ棚の上の丸窓を開き、同じ廊下の方の丸窓から覗き、東側の廊下の欄干にもたれて立ち、さては廊下傳ひに北側の硝子窓を覗き、さうしてぐるぐると、まるで部屋の中に閉ぢこめられてゐる囚人でもあるやうに、窓から窓と、外の景色を眺めて廻つた。先にも言つたやうに、その邊か

らはその國の高い山々は、その町の周圍にある近くの低い山々に遮られて、一つも見えなかつた。だが、それ等の近くの山々さへ、これまでは雨に隔てられて、或ひは全く見えなかつたり、或ひはぼッと烟つて見えたり、悉く隨分遠くにあるやうに見えたものであるが、その日は恰もそれ等の山々が秋晴と共に化粧して、改めて私のそれぞれの窓に挨拶に來たかと思はれる程、丁度女の襟足のやうに、草や木や森やで飾つた山の膚を、青空の中にくつきりと浮き立たせながら、出來るだけ近くに迫つて見えるのに私は驚いた。

南の丸窓から半町と離れないところには、土地の神であるところの、明神の杉の森が、幾日かの雨に洗はれた後の、すがすがしい綠色で、青空の中にこんもりと繁り立つてゐた。ここからは、あの森があるので見えませんが、あの森の向うの邊に、湖を圍んでゐる山が一と所切れたところがあります、その切れたところにぽつちりと嵌め込んだやうに富士山が覗いて見えるのであります、と心なき宿の番頭も、この久し振りの秋晴れに、心が愉快になつたやうな言ひ方で、私の傍に立つて、一つの丸窓から私の顏と並べて外を見ながら言ふのである。この山は、と彼は東側の廊下の欄干にもたれて、私たちの立つてゐるところが既にその山の一部であるところの、段々畑になつて東の方に聳えてゐる山や、その山の重なつて少し右寄りに見える、滿山を常磐木らしい木で蔽はれた山や、その山とかの山との間に、一寸頭を覗かしてゐる丸い恰好の山やを指さして、この邊のはみな低い山ですが、

その二つ三つ向うに隱れてゐる奥の方では、それでも五六千尺はある山もあります、もつともこの邊が既に海拔三千尺といふ所ですから……へ？　八ヶ嶽ですか、さうです、八ヶ嶽は丁度この山の向うの見當になるのですが、ここからは見えません、けれども、八ヶ嶽なら、停車場のプラットフオオムに行きますと、その頭の方がすつかり見えます。……

彼は又北の窓に立つて私に言つた。――ここから目の下に見えるのは、ざつとこの町の三分の二でせうか。彼方にも此方にも、さうですな、ざつと二百本はありませうか、立つて居ります赤い煙突は、みな製糸工場の煙突です。彼方にも此方にも、普通の家で屋根に石の置いてありますのは、この地方の名物になつて居ります位で、諏訪の名物、嬶天下にさぼしに、屋根の石と申します。この向ふの、山の麓の邊は一かたまりの大きな森がありますでせう、あの邊には殊に澤山さぼしが居ります、さぼしといふのは淫賣婦のことでございます。その上の、丸い形をした、大きな山がお見えになりませう、あの向うに和田峠といふ峠がありまして、昔の中仙道の峠の一つで、あそこを越して、上田とか、小諸とかへ通じるのであります。……

しかし、何と言つても、西の窓の眺望が最も私を喜ばした。そこからは鹽尻峠も見えるのである。あの峠の下の邊に、湖が一段と細く見えて光つてゐる邊から、遠江に流れる天龍川が始まつてゐるのであります、と番頭は説明するのである。湖の西を限つてゐる一列の山脈は、見たところさ

う高くはなささうであるが、木曾はあの山の向うの方であらうと聞くと、その山の向ふにある山又山が想像されて、幾ら見てゐても、幾ら見てゐても、私に飽きない景色であつた。

ふと、私はその湖の西に屏風のやうに立つてゐるところの、一列の、這うてゐるやうな低い山脈の空に、同じやうな不等邊四角形をなした、二座の山の頂きが覗いてゐるのを發見した。明らかにそれ等は湖水の傍の山のつづきでないのみならず、その山脈と彼の山々とでは、私の見てゐる所から湖水の山への距離よりも、その三倍以上も離れてゐると見えるのみならず、高さに於いても恐らく五倍は違ふと思はれるのみならず、難かしく言へば、多分その成立も、地質も、悉く選を異にするもののやうに思はれた。そして、それ等の二座の山自身も、私の方から見て、並んで立つてゐるやうに見えるものの、然し可成りの距離を隔ててゐるのに違ひないのである。が、二つが二つとも、その湖水の山の後から現してゐる部分は、多分肩から上といふよりは、人の姿で譬へて言ふと、眉か目かの邊から上を、一寸覗かしてゐると言つた方が適當であらうか。が、更に注目すべき事は、それは私の部屋の六つの窓から見えるどの山でもが、未だみな草色か、青黑色か、綠色か、或ひは幾分黃色かをもつて彩られてゐるのに引きかへて、その二座の、その頂きの不等邊四角形の姿を覗かしてゐる山だけは、最早や銀色の雪を被つてゐることであつた。それは、山に素人である私にも、確に一萬尺前後の山に違ひないと思はれた。で、早速、宿の番頭にそれを指さして聞いて見たところが、

さあ、と彼は何か極り悪さうに、わざと首を傾げる恰好をして、何といふ山ですか、確に高い山のやうですが、存じません、多分日本アルプスの續きでせうか、と言つたばかりであつた。あの邊は木曾でせう、と私は左手に見える高山の方をさして、では、木曾の御嶽ででもないんですか、と重ねて聞くと、さあ、さうであるかも知れませんな、と彼はもう一度首をひねつて、しかし、御嶽はここからは見えないやうに聞いて居りますが……と言つた。君は何處か他所の國から來てゐるのですか、と私が聞くと、いいえ、私はこの町の生れの者でございます、と彼は答へた。

私は、この生れ國の、而も生れてからそこに住みつづけてゐながら、己の町から朝夕見えるところの、そんなにも顯著な山の名を知らない男に對して、一種の憤りさへ感じた。が、一人になつてからも、私は一時間も二時間も、その西の窓の敷居に腰をかけたままで、やつぱり動かずに、湖水と、湖水の西を限る山々と、その山の向ふに見える雪を被つた二座の山を見てゐると、そんな憤りの氣持などは忽ち消えてしまつて、心が次第に澄んで來るのを覺えるのである、私は例へば長い間他國をさ迷うてゐた旅人が、久し振りで、計らず古里を望んだ時のやうな、何とも名狀し難い懷しさが胸に込み上げて來るのを感じた。

が、實は私は都會生れで、當時三十歳で、而も生れてから一ヶ月以上都會を離れて住んだことのないものであつた。而もその最近の五六年間の私の生活といふものは、眞に「餓」と壁一重隣同士の住

居をしてゐたと言つても、何の嘘ではないやうなそれであつた。けれども、どんな慘めな生活をしてゐても、そしてそれが私のやうに都會生れの者でなくても、人生の二十歳三十歳といふ謂はば壯年時代にあつては、人は都會とか、即ち人事とか、情事とか、金錢の事とか、さういふ事の外に興味を持たぬものである。そして私も亦その一人であつた。そして恐らく私と同年輩の諸君も、私と同じ思ひであるに違ひない、たとひ場末の、どんな陋屋の屋根裏ででも、三度の食事を二度に儉約しても、都會で樂み、都會で苦み、都會で働き、都會で報いられたい、自然とか、山とか、野とか、田舍とか、そんなものは悉く鬼に喰はれてしまへ！……

だが、山とは何といふ不思議なものであらう。生れ故郷に山や田舍やを持つ人ならば兎も角、今言つた私のやうに都會の塵の中に生れてそこに育つて來たものさへ、そして恐らく、これは私だけの特別の例ではないだらうと思ふ、どうして山といふものがそんなに魅力をもつて現れるのであらうか。實際、秋か冬かの晴れた日、東京の山の手の町を歩いてゐる時、突然家と家とに挾まれた町の彼方の地平の上に、秩父や日光や或ひは富士や箱根やの紫色の山影を眺めて、はッとして足の歩みを緩めない人は少ないだらう。この心持は私が近頃讀んだ或歐羅巴の學者の說に依ると、私たちの先祖の、原始の人たちが山に親んだ心が、代々の子孫に潛在意識となつて傳はつたものであるとのことである、として見れば、私がその宿屋の西の窓から、湖水の向ふに見える雪の山を望んで、久しく別れてゐた

古里を見た時の懷しさに似てゐると言つたのは、諸君を欺く言葉ではないのである。そして、その後知つたことであるが、その時私が見た山は確に一萬尺前後の山だつたので、して見ると、私が生れて、そんな高い山を見たのは、富士山の外には、初めてだつたのである。

その時、山と、そして初めて、ゆめ子といふ當歳の子を持つてゐる、その町の藝者を私は見たのである。

それから二ヶ月ほど後、今度は私一人で、朝の八時に飯田町を乘り出したのである。この二ヶ月は私に、かの山と彼女とを戀ふる心を酒のやうに醱酵させた。實はこの前の時彼女を見た度數は三四度以上ではなかつた、而もそれは時間に延べて十時間以上ではなかつた。而も彼女は至つて無口で、それに、私だつて決してそんなにお喋りといふ方ではないので、だから、その間彼女と私とが交した言葉は、恐らく蓄音機に仕込んだとて、二枚以上の盤を要しない程に違ひなかつた。

彼女は色が黑くて、前髪と島田とがいつも傾加減になる程に、髪に癖があつて、しやくれ顏で、そして赤ン坊さへ持つてゐる、等、等、とその缺點の方を擧げるなら、多分その美點の三倍も數多くあるのである。けれども、私は小學教師のやうなことを言ふが、人はその見える形がどんなに惡く造ら

れてゐようとも、その內なる心の現はれてゐない顏や形といふものはないのである。痞せて、背が高くて、いつも俯向いてゐる彼女の顏形の全體の印象は、一口に言ふと、私に浪曼的に見えた、そしてそれ等の全體の浪曼的なのを裏切る唯一つの點は、彼女の口元に違ひなかつた。（神よ、彼女を、そして私を憐れみ給へ！）

その後だんだんに私が知つたことであるが、彼女は、私が生れてから今日までに知つた總ての男や女やの中で、恐らく今の夜で女の腹から生れた人間の中で、彼女ほど他人の噂と、併せて自己の吹聽をしない人を、私はまだ見た事がない。彼女は沈默、それは詩人の最後の形であるところの沈默、そのもののやうに私には見えたのである。それに就いて、人は斯う言ふだらう。——それは私が私のやうな氣質をもつて、彼女に戀した爲に、戀人の目の故さういふに風に見えるのであらうと。或ひは五分通りはさうかも知れない。だが、私の考へでは、由來戀といふものは、戀の眼目はその對象にあるではなくて、その人自身にあるのだから、それでよいのではないか。

だから、私はその二度目の旅に依つて、決して彼女をどうかしようと計畫したのではないことは、神樣も照覽されるところであらう。抱へ藝者ではなく、藝者屋の娘である彼女をどうして身受けしようか、どういふ男との子であるか、いつそその生れた赤ン坊ぐるみ貰ふ相談をしようかとか、それどころか、せめて彼女ともう少し密接な關係を持つやうにでもならうとか、さういふ考へは毛頭持つて

ゐなかつたのである。唯彼女を見たかつたのである。彼女とそして山を！　だからこそ、私は朝の八時の汽車を選んだのであつた。その時、私は、あの幾つとなく通らねばならぬところの小佛や笹子の長いトンネルの、煤烟で蒸される樣な苦しさも、それ等の峠の向ふにある國を思へば、寧ろ喜びであつた。

果して、笹子のトンネルを通り拔けたところで、汽車の中にこもつてゐる、殆んど並んで腰かけてゐる隣の人々の顏さへ辨まへられない程の濃い、息苦しい煤烟を追ひ出すために、人々と共に爭つて窓を開いた私の目の前に、然し容易に消え去つてしまはない白い煙の絕え間に、そしてそれが次第に晴れて行く中に、見渡す限り秋らしく高々と澄み切つた空の下に、池の底でもさらへたやうな形をして、廣々と、甲府の盆地が廣がつてゐるのが見渡されたのである。そしてその盆地をめぐる南の山々の後から、富士山がいつもながらの恰好をして、肩から上を現してゐた。ところが、ふと、そこから目を轉じて西の方、多分私の目指す信濃との國境とも思はれる方の山々を眺めた時、私は再び口の中で驚喜の聲を揚げた。それは諏訪の宿屋の三階から、湖水の西の山の後に眺めた二座の高山の印象に似てゐた。

それは文字通り、甲斐の國の屛風のやうに見えるところの、所謂甲斐ヶ根の山脈に違ひない。その時私はまだそれ等の山の名前を知らなかつたが、私の先づ目についたのは、それ等の高い屛風狀の

山脈の上に、一際高く、雪を被つた三座の山が、南から北へと次第に高さを增して、並んで聳えてゐる景色であつた。それはその一ヶ月程前に、私が銀座の繪草紙屋から買つて來て、下宿の茶色の壁にピンで張り付けて樂しんでゐたところの、歐洲アルプス山の景色に似てゐるのに私は一層興味を引かれた。その寫眞の中では、右の方からユングフラウ、メンヒ、それからアイガアと三座の山が、丁度その時私の目の前にある甲斐の山の景色のやうに、並んで見えるのである。ここでユングフラウに相當するのは何といふ山か、アイガアに匹敵するのは何といふ山か。物徂徠の峽中紀行に、「農鳥、農牛、鳳凰、地藏、駒岳次第に遞列す、其二農の土に嚴然たる者之を白嶺と謂ふ、之を望めば稜々乎として畏るべし、窮髮の嶺冬時毎に先づ雪ふる、其皎々乎として草木之を翳虧する有る莫がを以てか、」とあるのがこの光景ではないか。そんなら、あの山は農鳥か、農牛か、鳳凰か、地藏か、駒岳か――後で知つたのであるが、この三座の山は南から順に、農鳥山、間の岳、北岳といふ名で知られてゐる。北岳卽ち甲斐ヶ根で、この山こそ、富士山を除いては、日本本州第一の高山なのであつた。

私はそれから富士見に至る迄の三四時間といふもの、客車の昇降口の臺の上に始終出て行つては、その左右の扉を開けて外の景色を眺めたので、二三度も車掌に注意された位だつた。汽車が甲府を過ぎて、日野春あたりにさし掛つた時、私の左の窓に現れた景色は再び私を有頂天にまで驚かした。それは――私の汽車の走つてゐる線路の左手は、可成り急な角度を以て目の眩むやうな大きな溪谷をな

してゐた。反對に言ふと、つまり私の汽車は大溪谷を仕切つてゐるところの、迚も人工では思ひも及ばないやうな天然の土手の上を走つてゐる譯で、その土手の傾斜の盡きたところ、卽ち大溪谷の最も底を、一條の急流が流れてゐるのが、汽車の窓から見下ろされるのである、地圖に記するところに依ると、それは釜無川である。ところが、汽車の走つてゐるその私たちの場所から、釜無川へは、可成り急な傾斜ではあると言ふものの、その間には畑もあり、所々には小さな村落もあり、所詮、大なる天然の土手の側面といふに過ぎないが、それが釜無川で切られて、さてその向う岸はといふと、それはもう傾斜でもなければ、大なる土手でもない、正に直立した、と言つても殆ど誇張ではないところの、崖といふか、切立てといふか、兎に角嶮岨極まる山が棒を立てたやうに、或ひは屏風を立てたやうに聳り立つてゐるのである。私たちの走つてゐる汽車の位置が既に、先に言つたやうに、可成り高い所であるが、その谷底の釜無川は海拔百尺とは高くないだらうと思はれる、低い所からその彼岸の山は、そこから露出しに、棒のやうに一萬尺の高さに聳えてゐるのである、それは正に甲斐駒ヶ岳なのである。

甲斐駒ヶ岳は九千七百八十何尺の山である。汽車の窓から見ると、駒ヶ岳の後左手に、それより高くはあつても、決して低くないところの山々の頂きが、二つも三つも覗いて見える。多分それは鳳凰地藏、奥千丈などといふ山々であらうか。その他、私の目の前に、その山を先頭にして、夕日を背にし

て黑々と、奥へ、奥へと南につづいてゐる山々は日本一の白峰山脈に違ひないのである。だが、その時私の目は、時々他の方に目移りしながらも、絶えずその全山を私たちの目の前に露出してゐるところの、驚くべき駒ヶ岳にかへつて來るのであつた。駒ヶ岳は恰も舞臺に出てゐる團十郎のやうに見えた。外の諸々の山は悉く彼の影に消されて、ひとり彼だけが、駒ヶ岳だけが觀客の目を引付けるのであらうか。が、何は兎もあれ、駒ヶ岳は外の山よりも私たちの最も間近に、その怪異な姿を丸出しにして突立つてゐることも事實であつた。彼女はその麓を釜無川に洗はれながら、一萬尺近いその異樣な境を根元から私たちに露出して、その最早肩から上を雪を被つたいびつになつた頂きは、恰も隣國信濃の國を山々の頂きを越えて覗き込んでゐるかとも見えるのである。

丁度時刻は夕方で、彼女の麓の釜無川の此方の岸の、彼方此方にぽつんぽつんと撒き散らされてゐる家々からは、薄紫色の烟を立てゝゐるものもある。そして、あたりが段々暗くなつて行く中に釜無川だけは、餘程の急流と見えて、うねうねと白墨の跡のやうに一筋白く眺められる。だから、駒ヶ岳の大部分は、その他の山々と共に、私たちから見るところは入日の反對の側にあるので、最早夕方らしい暗い影に染められてゐた。然し、その雪を被つた頂きは、山々の上に突出てゐる爲に、夕日を眞横に受けて、或所は眞赤に見え、或所は眞紫に見え、或所は眞青に見える。目を轉じて左手の過ぎ去つた方を振返ると、駿河との境の屏風山脈の一列が眺められたが、それ等が入日を斜めに受け

て、悉く淡い紫色に聳えてゐる中に、それ等の山臺にして、富士山が輝くやうな黄色に染め出されてゐた。

その日の暮に、私は僅十日餘りしかの馴染ではないが、それが最早第二の古里であるやうな氣のする町に着いて、私の最も愛する例の宿屋の三階の部屋の客となつたのであつた。日はもうすつかり暮れた後で、私はその部屋に通されると、着物もあらためない前に、早速西側の大きな窓に立つて、暗い外を眺めたが、遠い湖水も、湖水をかぎる山の屏風も、星空の下に唯黑々と透かして見えるだけであつた。だが、直目の下の町は、東京の町と比べると、その火の數は五分の一にも十分の一にも當らないが、然し周圍がそんな眞暗な中だけに、彼方此方に螢のやうな火影が點々と瞬いてゐるのが、それが私に泣きたい程人懷しい心持を覺えさせた。それにそれ等の火影の數の割合に、多分その私の宿屋のある近くに溫泉の共同浴場があつたり、色町があつたりするからだらうか、人の行きかふ氣色や、何とも分らぬ色々の雜音や、そして彼方此方に絃歌の聲やが、隨分大勢の人々の込み合つてゐる賑かな場所のやうに思はれた。藝者ゆめ子はどうしてゐるだらう、と私は思ひ出さない譯に行かないのである。

さうして、私は今度はその町に二ヶ月近く滯在してしまつたのである。その間、私はなるべく自分で自分を制して、ゆめ子とは二日に一度位づつ會ふことにしようと思つた。幾ら藝者稼業をしてゐるものとは言ひながら、朝からとか、そんなに早くから彼女を呼ぶことはどんなものか、と私は躊躇するのである。たとへばそれがただの抱へ妓の身分の者であるとしても、朝寢も必要だらうし、冬はぶらぶらと怠ける時間も入るだらうし、髮を結つたり、湯に這入つたりする暇もなければならぬだらう、まして一軒の藝者屋の、屢々留守にする養母に代つて、一家を取締らねばならぬ彼女は、隨分忙しいだらう、と私は遠慮するのである。まして、當歳の赤ン坊を抱へてゐる身とすれば、夕方に一度子に乳を含ませて、次には子が目を醒ます十二時前には、彼女が歸つてゐる方が便利であらう、と私は推察するのである。だが、さうは思ひながら、彼女を呼ばぬ晩は、私は本を讀んだり、物を書いたりする自分の仕事がどうにも手につき兼ねて、幾度立上つて、私の部屋の東西南北に附いてゐる、六箇の窓を順々に覗いて廻つたか知れない。すると、曇つた晩も、晴れた夜も、黑々とした山や湖は、それぞれの窓の外に、同じ表情をして私に眺められるのである。さて又、今夜は昨夜辛抱した代りに、彼女を呼ぶ番だと思ふ日は、晝飯を食ひ終つた頃から、私はそはそはして落着かぬ思ひをしなければならなかつた、すると、私は又立上つて、六箇の窓を順々に覗いて廻るのが常であつた。それが最早寒さも次第に嚴しくなる頃であつたから、私は窓を覗いて、身體が寒くなる

と、溫泉の風呂場に飛び込んだ、そして風呂を出ると又窓を覗いた。その頃は大抵毎日空が高く晴れてゐるので、西の窓から見える湖水を限る屏風山脈の彼方には例の二座の高山が始終姿を現してゐた。私はその時は不完全ながら、信濃の國の地圖を用意してゐたので、それの方角と自分の部屋の方角とを合はして机の上に置いては、その山の見える方向を色々と研究して見た結果、どうやらその向つて左手に見えるより高い方の山は、正に木曾の御獄山であると信じられ出した。右手に見える今一つの山は、と次いで色々と調べて見たら、位置が少し違ふやうであるが、同じ木曾の駒ケ岳に當るやうに思はれ出した。そして私はいつともなくその二座の山を御獄山と木曾駒ケ岳であると思ひ込むやうになつた。その御獄山と駒ケ岳の頂きは、私がこの前見た時と同じく、私の窓から見える範圍は、悉く雪を被つてゐるのに變りはないが、それが一日一日と氷のやうに冴えた色に見えて來るのである。まるで、それは普通の土や岩やの山ではなく、氷で出來た山のやうに、而もその氷の頂きが、誰かがそれを何かで毎晩々々人の知らぬ間に磨きをかけてゐるかと思へる程、一日は一日と氷よりも青く、刃より物凄く冴えた色に澄んで來るのである。

或日、一人の未知の青年が私を尋ねて來た。青年と言つても、私より二三歳しか年下でない、二十七八の、鼻の下に髭などを貯へた男であつた。彼は私がこれ迄に書いた時々雜誌などに發表してゐた小説を讀んでゐた者らしく、その小説の作者が同じ町の宿屋に來て滯在してゐるといふことを聞いて

會ひに來たのである。宿の女中が最初、斯ういふ方がお目にかかりたいと言つて、お出でになりました、と持つて來た名刺を見ると、それには肩書も所番地も何もなくて、唯、西向觀山といふ妙な姓名が認めてあつた。

「あなたの名前は何と讀むんです、變つた名前ですね？」と私が聞くと、

「はい、にしむかひと言ふんですが……」と彼は房々した髪の毛を、手入れもしないで無雜作に分けてある頭を恥かしさうに抑へながら言つた。

觀山といふのは多分雅號だらうと思つたが、私は名前に就いてはそれ以上聞かなかつた。その外に私が聞いて見たり、彼が話したりしたところに依ると、彼は甲府の生れで、印判を刻む職業とするもので、現に甲府で彼の父は今でも印判屋を營んでゐる、彼も三四年前まではこの町で同じ業をしてゐたのであるが、一向繁昌しないばかりか、自分一人を養ふことすら覺束なくなつたので、その後半年ばかり電氣會社の養成所のやうなところに這入つて、今ではその町の變電所に勤めてゐるとのことであつた。

部屋の眞中には、その國の習慣で、四角な大きな炬燵が切つてあつて、私はいつもの通りそれの東側に座を占めて、その中に足と手を入れて坐つてゐた。例の西側の尨大な窓には四枚の障子が嵌つてゐて、その四枚共に可成り大型の硝子が仕込まれてあつた。だから、私の坐つてゐるところは、炬

燵にあたりながら、外の景色が見晴らせるのである。そこへ女中の案内で西向觀山が這入つて來たので、私は彼に私と向ひ合つた西側の座に坐ることを勸めると、彼は遠慮して決してその方へは行かうとしないで、北側の而も炬燵から四五寸離れたところに、行儀よく坐つたままなのである。そして彼は前に言つたやうな、一通り自分に就いての話をしたり、それから私の小說に就いて尋ねたり、或ひは自分の仕事の話をしたりしたのあつた。彼の仕事に就いて、と言つても、それは彼が現在勤めてゐる電氣會社のことではなく、彼の子供の時分からの仕事であるところの、そして今でも暇さへあるとやつてゐると言ふところの、私などには餘りよく分らない、印判に關したことであつた。だが、私が感心したことは、彼がその印判に就いて話す時は、例へば私にして言ふと、文學とか藝術とかの話をする場合のやうに、何か有難いものとか、何か心を喜ばせるものとかの話をする時の眞劍さと、喜ばしさとが見えることであつた。だが、どちらかと言ふと彼は眉毛が思ひ切つて太くて、鼻の寸が少し短くて、全體の印象は人に謂はば頓狂な感じを抱かせた。

「まあ、そこぢや話をしてゐても、僕の方で落着きませんから、兎に角もつと傍に寄つて、形だけでも炬燵の中に足なり手なり入れませんか。ね、どうか、どうか。そこぢや、お茶を入れても手が延びませんから。」などと私が幾度も幾度も彼に炬燵の傍に近づくことを勸めると、やつと、來てから一時間以上も經つた時分に、

「では、御免蒙ります。」と彼は丁寧に頭を下げて、炬燵の北側の座にゐざり寄つて來た。その時、ふと西側の窓の障子の硝子越しに、それはもう、町ではまだそれ程ではなかつたが、近くの山といふ山は、どんな低い山でも大方雪に見舞はれてゐた時分のことだつたので、彼はそこから見える可成り廣い景色に驚いたらしく、「ほう！」と口の中で小さな叫び聲を上げて、「成る程、ここは思つたよりも高いですな。」と私に向つて言ひながら、「一寸失禮します、」と坐らうとして又立上つて、窓の傍に進んで行つた。で、私も彼につゞいて立つて行つた。

それは幾度も言ふ通り眞西に向いてゐる大きな窓のことだから、毎日午後になると西日が部屋の中に一ぱい射し込んで來るのである。だから、夏の日の爲に、その窓の外にはその左側の柱に仕掛けてある一本の綱を卷いたり延ばしたりすることに依つて、日を遮る爲に屋根型の日覆が下りるやうになつてゐる。私は冬のどんな寒い時でも、部屋の中に日光の射し込むのが嫌ひな性分なので、先程から、太陽の位置に從つて少しづつその日覆を下ろしてゐたのであるが、今、客の觀山と一緒にその窓から外の景色を見る爲に、柱に取附けてある綱を卷き上げた。すると、くるくるといふ滑車の音と共に、日覆が屋根の軒に卷き込まれて、見る見る、町と、湖水と、湖水の西を限る屏風山脈と、そしてその後に氷のやうな鋭さを以て突つ立つてゐる二座の高山の姿とが、青空の下に、きらきらと目を射るやうな眩しさを帶びて現れた。

「やつ、御獄山が見えますね！」とその時、思ひがけなく、斯う觀山が叫んだ。
「やつぱりあれは木曾の御獄山でしたか！」と私も思はず嬉しさうに叫んだ。「あの左手の方がさうでせう、そして、そしてあの右手の山は駒ケ嶽ですか？」
「いえ、あれは乘鞍だといふ話です。」と觀山はその太い眉毛の下で、雪の眩しさに目をちらちらさせながら言つた。それを見てゐる彼の樣子が、如何にもいそいそと嬉しさうに見えるので、
「あなたも山が好きですか？」と私が聞くと、
「ええ、私は大好きです。私は、先生、妙な性分で、どんなに腹の立つた時でも、氣のむしやくしやした時でも、山を見てゐるとすつかり忘れてしまふのです。」
「成る程、あなたの名前は觀山といふんでしたね？」と私が氣が附いて斯ういふと、
「いや、どうも。」と彼は恥かしさうに頭を掻いた。
「僕も山を見るのが三度の飯よりも好きなんですよ、」と私も眩しいので、目をちらちらさせながら、「それにしても此邊の人はひどいですね。あそこに見える山が御獄だといふことさへ知らないんですよ。もつともそれはここの番頭だけかも知りませんがね。だから、僕は自分でそれを地圖と首つ引で發見したんですよ。しかし、それをあなたの口で確めてもらつたので、又一倍嬉しい氣かします、」
「先生もそんなに山がお好きなんですか？」と觀山も嬉しさうに言つた。「そんなら、この後の山に、

さうです、二十町ばかり上るんですが、そこに發電所がありまして、私の友達が詰めて居ります。何なら、一度そこへ御案内しませう。そこからですと、あの山が、もつと、ずつと肩の邊から見えますから、」
「さうですか、それは是非一度連れて行つて下さい、」と私は言つた。
やがて、私たちは元の炬燵の傍に戻つて來て、色々と雜談を交したが、何かの話が切れた時、
「先生は音樂の方には餘り興味はお持ちになりませんか？」と觀山は何を思つてか、こんなことを聞いた。
「音樂つて、つまりヴイオリンとか、琴とか、歌とかいふ、その音樂のことですか？」と私は聞き直して、「いえ、僕は自分では何にも出來ませんが、好きは大變好きです。あなたはお好きなんですか？」
「私はどういふ譯ですか、こんな道樂事のやうなものばかりが好きで、殊に音樂と來たら、それこそ三度の飯よりも好きでして、」と觀山は何か恥かしいことでもあるやうに言つた。「私はよく人に、お前の好きなものに碌なものがない、文學とか、畫とか、判を彫ることとか、可笑しなものばかり好きな男だな、と笑はれるんでございます。その通りなんですが、私は自分で時々考へて見ますのに、しかしその好き方が一々違ふんです。まづ第一番に印判といふやつですが、これはどうも親譲りのもの

で、さあ、決して嫌ひといふんぢやないんですが、何と申しますか、幼い時からの許嫁かと、惡く言ふと腐れ縁の女房とか、さう言つたやうな好きで、今ではどちらかと言ふと、私はどうかして嫌ひになつてやらうと思つてゐる位なんです。」

「だつて、今でも時々やつてると言ふぢやありませんか？」と私が聞くと、

「ええ、それと言ふのがやつぱり好きなんですね。」と彼はさうするのが多分持前の癖と見えて、頭を搔きながら、恥かしさうな恰好をして、「それに會社の月給だけぢややり切れないものですから、つい內職をするやうな事になりまし。へえ、どうも。……それに比べますと、文學の方がずつと好きですが、これはどうも幾ら好きでも、自分なぞがどんなに力んでも手を出すことが出來ませんし、唯手當り次第に讀んで喜んでゐるといふ位で、それも貧乏人ですから、さう思ふやうに本が買へませんし、まあ謂はば岡惚れのやうなものでせうか……」

「岡惚れはふるつてますね、」と私は次第にこの訪問客の言ふことに興味を持ち出して、「ぢやあ、山の方は一體どう言ふんです？」

「これもやつぱり岡惚れの類でございますね、」と彼はまだ時々馴れた言葉の間に、變に丁寧な言葉を挾みながら、「先生もやつぱりさうなんでございませう。私はどうもそれ程山が好きな癖に、無精者の上に足が丈夫でないものですから、それに斯うしてゐますと暇もないものですから、本當に何の

何と言はれる程の高い山に登つたことはないのです。登るのは一日おき位に、先にお話しましたこの裏の山の發電所に遊びに行きます位で、だから、唯もう眺めて暮すといふだけなんでございます。そして私どもは先生方と違ひまして、自分の國かこの信州位の外に、別に旅行したことがありませんから、よその山はちつとも知らなんです。……」

「ぢやあ、音樂は自分で大いにやれるといふ譯なんですね？」と私は聞いた。「どんなものをやるんです、樂器の方ですか、うたふ方ですか？」

「いや、やれるといふ程でもございませんが、」と彼は例に依つて恥かしさうな表情をしながら、「それに聲を出す方は、御覽の通り私は鼻の寸法が短いものですから、耳はさう惡くないつもりなんですが、その爲にどうも調子がうまく取れないんです。ええ、確に鼻の寸法が短いからに違ひありません。それやまあどうにか斯うにかごまかす位のことは出來ますが……。その代り樂器の方は色んなものを少しづつ皆手を出して見ました。三味線もやりましたし、琴も二三年年期を入れましたし、ええヴイオリンも、尺八もみんなほんの少しづつですけど……」

だが、その夕方、ゆめ子を招いて、三人で晩飯を食つてから、私が、「西向君、何か一つ彈いて聞かしてくれませんか、うたはなくてもいいですよ。唄は何ならゆめ子君にうたつて貰はうぢやありませんか？」と幾度も幾度も催促したが、彼はゆめ子が來てから柄になく固くなつてしまつて、

「いえ、駄目です、駄目です。」と言ふばかりで、三味線の方に振り向きさへしなかつた。然し、これは考へて見るのに、ゆめ子が來てから、彼が固くなる前に私が固くなつたのかも知れなかつた、そしてそれが彼に傳染したのかも知れないのである。――ゆめ子自身も亦、いつものやうに、俯向いて坐つてゐたが、私が西向に、何か彈いてくれ、彼女にうたつて貰はうぢやないか、と言ふ度に、彼が一度も三味線さへ取上げないのに、彼女は聞えない程の聲で、「私、何も出來ませんもの……」と生娘のやうに恥かしさうに言ひ言ひした。

やがて、西向は歸り支度をして、

「では先生、どうです、明後日あたり山に登つて御覽になりませんか？」と言つた。

「ええ、僕はいつでも結構ですが、あなた、社の方の御都合はいいんですか？」と私が聞くと、

「社は一日交替ですから、明後日は又休みの番になるんです。」と彼は言つた。「今日はこちらでお邪魔をしてしまひまして、到頭山の方へ行きませんでしたから、向ふでは待つてるだらうと思ひます。」

「山の上に女の人でもゐるんですか？」

「いいえ、男です。」と彼は頭を搔きながら言つた。

その約束した日の、晝の十二時を少し過ぎた時分に、西向觀山は間違ひなく私を山に誘ひに來た。空は冬のさういふ高原地方によくある、からりと響くやうな晴天であつたが、前の前の日の彼が歸つ

て行つた晩に少し雪が降つたので、

「どうでせう、あの雪で、山の道は？」と私が心配して聞くと、

「發電所から上は、とても獵師や郵便屋の外は通れませんが、そこ迄は少し位の雪は降つても降らなくても大して違ひはありません。」と觀山は言つた。その癖、見ると、彼はその邊の土地の人の用ひるらしい、多分雪靴とでも行ふものを穿いてゐた。

「そんな靴を穿かなければ行けないんぢやないですか？」

「いえ、普通の靴で十分です、私がお引受します。」と彼は言つた。

私の宿屋の前を一寸した坂道を下りて往來に出て、そこを右へ行くと、料理屋とか、藝者屋とか、さては町に一軒しかない寫眞屋とか、小間物屋とかの並んでゐる、稍賑かな道筋を一町ばかり行つたところで、道が二つに分れてゐる。左手の道は今迄の町つづきで、そしてその分れ目のところから坂になつて下り道になつてゐたが、右手の方は二三軒行くと家がなくなつてしまつて、左手の方のが如何にも町中のそれらしく、石疊などが敷いてあつて、急な代りに短いのに反して、これは一寸見には氣の附かぬ程のだらだら登りになつてゐた。即ち山へつづいてゐるのである。

その道の分れる所の左側に、ゆめ子の家があるのを、私はその五六日前に聞いてゐたので、何處だらうと氣を附けて見て行くと、坂道の始まる一番上の位置に、だから土臺を石垣で積まれた一軒の古

ぼけた家の門の軒燈に『夢の家』と書かれてあるのを見付けたので、はつとして、無意識に、竝んで歩いてゐる西向の袖を引張つて、

「君、あの家が、」と一寸頤で方角を示して、「あれが昨日の藝者の家ですよ。」と言ふと、

「ええ、夢の家でせう。」と相手は十年も前から知つてゐることのやうに言つた。それは當然のことで、彼はこの町の住人だから、知つてゐる筈に違ひなかつた。

私は少し赤くなつて、彼が私のそんなあわてた行動を何と思つてゐるだらう、それに又、もしやあの家の何處かから、偶然ゆめ子が私のそんなはしたない行動を見てゐはしないか、と氣が廻つて、思はず足を早めて前途に向つて歩き出した。もうその邊から、道は何日となく積もつて消えない雪に蔽はれて、その雪が、別に固まつて氷になつてゐる譯でもなく、と言つて溶けもせず、雪の姿のままで、謂ふ通り、白布を張つたやうに眞白であつた。そして一町、二町、三町、と進むに從つて次第に傾斜は急になつて行つた。

私は都會に隨分大雪の降つた景色を知つてゐる。だが、屋根に五寸以上も積もつて、一度降つたその大雪の殘りが、庭の隅や、或ひは、町の日の當らない凹地に、三週間も消えずにゐるやうな場合の時でも、その雪の降つた朝町に出ると、成る程、人の通らない積もつてゐる所は一尺近くも雪があつても、私たちの歩く道は泥に混じつた唯の泥濘になつてゐるのが普通である。そして、見渡すと、町

の彼方にも此方にも雪の積もつてゐる白い部分とそれのない黑い部分、即ち人家の、それを掃き落された屋根とか、塀とか、廣告塔とか、煙突とかが、丁度白と黑とで畫かれた版畫のやうな景色を呈するのを知つてゐる。だが、ここでは同じ雪景色でも、すつかり違つてゐた。私たちの歩いてゐる道は先にも言つたやうに、そこはそんな山路ではあるが、上の村から下の村へ毎日學校通ひの子供や、その外色々な人が通る爲に、まるで町の中の道のやうに、何人もの人の足跡に踏み固められて、時には車の轍さへはつきりと、印せられてゐるのであるが、しかし土の色は何處に尋ねる影もなく、唯一面に砂糖の路を歩いてゐるやうに眞白であつた。見上げる山も、傍の谷も、その横を過ぎて行く崖も、悉く砂糖を被つてゐるやうに眞白であつた。私は登るに從つて、足の疲れと離れて來た町の懷しさに、十歩登つては振り返り、一寸した曲り角に出ては後を向き、眺望のよささうな臺地に來ては立止まつて振り返つた。私たちの歩いてゐる路は恰も山と山との間の、谷間に沿うた崖の上に通じてゐるので、その谷の底が盡きた所の平地にある、諏訪の町を見失ふことはなかつた、況して湖水も、そして湖水の周圍の山々も。そしてそれ等の景色も亦、都會の郊外の雪景色とは大分趣きを異にしてゐた。例へばそこでは大雪の降つた朝でも、それは謂ほば色の黑い女が白粉をつけたやうな趣きがあるのに反して、ここのは全く地から白い女の肌にも譬へられようか。だから、ここのは白と黑との模樣畫ではなくて、悉く眞白であつた、さうでなければ白に近い灰色であつた。だから、空はそんな

にからりと鳴るやうな青空であるにも拘らず、下界の景色だけは、都會の丁度雪のしんしんと降つてゐる最中のやうな色合ひに見えるのである。町に林のやうに立つてゐる、百本の煙突も灰色である。湖水の、もはや凍る少し前の水の色もやはり灰色である。そしてその湖水の彼方を限る山は、盆栽の雪の山よりももつと白い雪を被つて、青空の下で白いといふには餘りに白く光つた色に輝いて見えるのである。が、一瞬間にして、忽ち私の目を奪つたのは、例の湖水の山の向側の二座の高山の姿であつた。おお、西向觀山は嘘を吐かなかつたのである。彼の言ふ如く、それ等の山は、私の宿屋の三階の部屋から見るとは、殆ど二倍も、惜しげもなくその姿を、一歩づつ登れば上るほど現し始めたのであつた。もつとも、考へて見ると、それは無理なことではないので、初めて私がそれを宿屋の部屋から觀察した如く、それ等の山を隱してゐる湖水の縁の山脈と、私の宿屋との距離よりも、それ等の山と湖水の山脈との距離の方が、五倍も或ひはもつと距離があつた譯なので、だから、少しづつ高い所へ登れば登るほど、それ等の山は湖水の山脈の後からによきにによきと姿を現す譯なのである。だが、まさかそれ程とは私は想像だもしなかつたのであるが、一歩登つて振返り、二歩登つて振返り、終にはさういふ足元の危い雪路にも拘らず、私は子供がよくするやうに後向きになつて、だから背後の方に足を運ばせながらも、その壯大とも、崇高とも、何とも形容の出來ない見事な山の景色から目を放つことが出來なかつた。だから、路がその大觀を遮る方角に曲つてしまふと、又それが

見える曲り角に登る迄、私は走り出した位であつた。終にはその二座の山は、最早例の氷に磨きをかけたやうな頂だけどころか、或ひは肩の上からばかりでなく、雪を被らない、謂はば腹の邊から上までを、湖水の山脈の上に現はし出した。そればかりでなく、その湖水のふちの山脈と、その二座の山との間の十里か、二十里か、兎に角それ等の距離を感じさせるだけの空氣をも、見る人に感じさせるやうにさへなつた。

「あれが御嶽山ですか、あれが木曾の御嶽ですか！」と私はその方を見ながら、何度斯う獨言を叫んだか知れない。

「そしてあれが乘鞍ですか、乘鞍ですか！」

「ええ。」と西向はそれに答へて、「あの乘鞍の右の方に、これから、今はもう一寸我々のやうな者には行けないところですが、その發電所のあるところから、又二十町ほど登つた和田峠へ行く途中の所まで來ますと、穗高から、鎗などといふ日本アルプスの山々が一列に見えるんですが……。」

「今はどうしてもそこ迄行けませんか？」と私は聞いた。

「さうですね。誰かしつかりした案内者でもあつて、その上に、それこそこの邊の土地の人のしてゐるやうな、ああ云ふ雪袴を穿いて、雪靴を穿いて、十分な用意をして行きませんと……」

「どうしても行けませんかね？」と私は嘆息しながら言つた。

「さあ、もう直です。この角を曲つて、もう一曲つたところです。」とやがて西向は言つた。「發電所の舍宅の方なら、炬燵に當りながらこの景色がずつと見晴らせますし、又機械のある所ですと、機械のせゐで幾分溫かですし、そこには爐が切つてありますから、早く行つて溫まりませう。」

やがて私たちが黑い、貧弱な棒が二本立つてゐる外に、柵も何もない發電所の門を這入つて行くと、時候のいい時にはそこは畑か何かに使はれてゐるに違ひない、だだつ廣い平地の向ふの、その建物の中から一人の小さい男が現れて、その途中まで私たちを迎へに出て來てくれた。

「先生、これは私の友達の堀戸君です。」と西向はその男を私に紹介した。

「お名前は兼々承つて居りました、よくお出で下さいました、」と堀戸は、年は幾つ位か知らないが、變に年寄り染みて見えたり、又どうかするとまるで子供らしく見えたりする顏の持主で、「どうぞ兎に角此方へ、一先づ、」と私たちを發電所の方へ案內して行つた。

そこは私などには可成り薄氣味惡い音をたてて、間斷なくごろごろと廻つてゐる機械が建物の中の半分を占めてゐた。「盛んなものですね。」と私が言ふと、「いえ、これで今は丁度この邊の製糸工場が休みなものですから、機械は半分しか動いてゐないのです。」と西向が說明してゐる間、堀戸はその小さい身體を働かせて、爐の火をしらべたり、茶を汲んで出してくれたりした。

「それに、來る途々で御覽になりましたやうに、」と西向が說明して言ふには、「あんな風に、冬に

なりますと、この邊の山の中は川の水でも大部分凍つてしまひますし、瀑になつて落ちてゐるものでも、天然のままにしておきますと、水は少なくなりますし、果はやつぱり凍つてしまひますし、なかなかその方の手當だけでも大變なんでございます。しかし、どうしても冬は動力がそんな譯で弱くなりますので、先生の宿屋の電燈なんかでも、あんな風に暗いのは止むを得ませんのです。」

私は彼のさういふ說明を半分いい加減に聞き流しながら、先程から木曾の御嶽山は何處に見えるか知ら、と思つて、硝子窓の彼方此方を通して、外の景色を透かして見たが、一向それらしいものが見えないので、「御嶽は何處です？」と我慢がし切れなくなつて聞くと、「いいえ、ここからは見えません。」と西向は答へた。「あちらの舍宅の方へ行きませんと、」それから、彼は堀戸に向つて、「君、先生はあの御嶽山の見える景色が大變氣に入られたんだが、どうだ、中尾君に賴んで此處を見てもらつてから、向うの方へ行つて坐ることにしようぢやないか？」と言つた。

「うむ、僕もそのつもりでゐるんだ。」と堀戸は答へて、その建物と鍵の手になつて建つてゐる、日本建の家の方へ出かけて行つた。

間もなく、堀戸の同僚である中尾といふ、彼等と同年輩位な、色の靑白い靑年が出て來て、私たちに挨拶してから、「堀戸君は今あちらを片附けてゐますから、一寸暫くお待ち下さい。」と言つて、私たちと一緒に、爐の傍の椅子の一つに腰を下ろした。

「濟みません、折角、御休番のところを無理に賴んで。」と西向はそこで中尾に言つた。

「いえ、どうせ遊んでゐるんですから。」と中尾が言つた。

やがて、私と西向とは堀戸に案内されて、その日本建の、舍宅の方へ出かけて行つた。それは二軒長屋の一軒で、片方の家は今は誰もゐないと見えて、戸閉めになつてゐた。三疊と六疊の緣なしの疊を敷いた、がらんとした粗末な部屋で、その六疊の方に炬燵が切つてあつて、それに被せてある穢い蒲團の上に、白い布切をかけて、その上にお茶の盆などを載せて、そこに私たちは迎へられたのである。堀戸は小柄な身體の持主だけあつて、湯を沸したり茶を入れたりする用事を、芝居の女形の役者のやうなくにやにやした恰好で、始終心がけてやるのである。だから、初めのうちは私と西向とが向ひ合つて炬燵に當つて色んな雜談をしてゐる間も、彼だけはその中に交らないで、その狹い部屋の中を絕えず彼方此方してゐた。私はふと思ひついて、突然座を立つて行つて、突當りの障子を一枚開けて外を見ると、忽ち目の下に深い谷が遠く延びて、それが盡きたところに諏訪の町があつて、町の彼方に湖水があつて、湖水を限る山脈があつて、その山脈の向ふに、山の七分方までくつきりと靑空の中に浮き出してゐる、御嶽と乘鞍の二山が、沁みるやうに目に這入つたのに驚かされた。

「先生、山がよく見えるでせう？」と觀山が後から聲をかけた。

「よく見えますね。」と私は言つた切りで、寒いのも何も忘れて、長い間その景色に見惚れてしまつ

た。そこからは、最早谷も、町も、湖も——それ等は言ふ迄もなく、その湖の彼方を限る屏風狀の山脈さへも、私の足の下に見下されるのである。無論、さう言へば、御嶽も乘鞍も見た目だけは同じやうに私の目の下に眺められはしたが、目に見たところは兎に角、その外のどの山々も、彼女等よりも私の立つてゐる位置の方が實際にも高く思はれる中に、然しやつぱりその二座の山だけは、どんなに引下ろさうとしても、それは天外に聳えてゐると形容する外、何の言葉も見出せない光景であつた。

「今日は笛を持つて來なかつた？」と後の炬燵の傍で、堀戸が西向に斯う尋ねてゐる聲が聞えた。

「ああ持つて來たよ。」と西向が低い聲で答へた。

その時、私は漸く彼等の方に振り向いて、炬燵の傍に歩いて行きながら、

「笛つて、尺八ですか？」と私は西向に聞いて見た。「そんなもの、君、持つてたんですか？」

「ええ。」と西向は例の恥づかしさうな恰好をして答へた。

私は、今し方この部屋に這入つて來た時、玄關の二疊の間で不思議な光景を見たことを思ひ出した。それは奥の間であるところの、その六疊の部屋でさへ、古びた机と、古風な木の蓋の本箱との外に、何一つ道具らしい道具のないその家の中に、そこには琴が立てかけてあつたり、三味線やヴイオリンが吊り下げてあつたりしたことである。もつともそれを見た時、私は直にこの間、音樂が飯より

好きだと言つた、西向觀山を思ひ出したが、どうも樣子から察しると、この部屋の主人公の堀戸も同じものを嗜むらしい風である。幾ら馴れ路とは言ひながら、此間の西向の言葉にも、一日おきの休の日には必ず彼の方からこの山へ訪問して來るといふのも、多分この二疊の間の樂器類に關係があるに違ひないと氣が附いた。

「堀戸君も音樂をやるんですか？」とそこで私が聞くと、

「ええ。」と堀戸は西向ほど恥かしさうな樣子をしないで、はつきりと答へた。「然し、私の西向さんは、先生なんです。」

「何か聞かしてくれませんか？」と私が催促すると、

「ええ、まづいんですけど、」と堀戸はしかし直に何かやり出しさうだつたが、

「いや、駄目です、駄目です、迚も先生方にお聞かせするやうなものぢやありません。」と先生の西向の方が恥かしさうな恰好で、兩手で頭を抱へながら、なかなか應じさうになかつた。

「一昨日も藝者が來た時やつてくれなかつたぢやありませんか？」と私は言つた。何もそんな場合藝者の話などする必要はなかつたのであるが、その時分から、何といふ理由はなく、私は變に里戀しさと、急に彼女を見たい心に襲はれ出したので、わざとそんな事を言つて見たのだつた、「もつとも、あんな藝者にうたはれるんぢやあ、彈く氣がしないかも知れませんが……」

「どう致しまして、」と西向は心から辯解するやうに、「この土地ぢや此間の人なんかはちやきちやきですから、私の方こそ氣おくれがしたんです。」

「誰、何といふ藝者？」と小柄の堀戸は身體にしなを造りながら聞いた。

「ゆめ子さんだよ。ね、君、あの人とか小瀧とか言へば、この土地では一流の人だからね。」と西向はその丈の短い鼻を突き出しながら言つた。

「まあ、さう謙遜しないでやつて下さい。」と私は再び催促した。

「ぢや、やらうぢやないか？」と堀戸の方は頻りにやりたいらしく、小聲で、彼の師匠であるといふ西向の袖を引くやうにして勸め出した。

「ぢや、やるかな、どうせ下手は分つてるんだから。先生、お笑ひになつちやあいけませんよ。」とやつと西向が思切る迄には餘程の時間がかかつた。

が、一度口を切つてやり始めると、終には私が甚だ退屈を覺え出したまで、彼等は倦まずに次から次と色んなものを演奏し出した。堀戸は徹頭徹尾ヴイオリンを彈く役目であつたが、西向は千變萬化であつた。一番初めに彼は堀戸に手傳はして、例の二疊の部屋から琴を擔いで來た。鼻の寸の短いのを悲む彼と、小柄で女のやうなしなをして體を振舞ふ堀戸とが、どう見ても彼等とは關係なささうに思へるところの、琴といふやうな樂器を運んで來た光景は、滑稽といふよりは、物凄くさへ見え

た位だつた。

「少し調子が狂つてるんだが、一寸手傳つてくれない？」と西向が言つて、相手に手傳はして、私の方にその寸の短い鼻の側面を見せながら、熟練した彼は大工のやうな體附で手足を踏ん張り、又お孃さんのやうな手附で糸を締めたり、駒を動かしたりした。それは見ると、芝居の道具方が舞臺に使ふ小道具を扱つてゐるやうにも見えた。

「おや、生田ですか？」と私はその時、關東には珍しく山田流ではなく生田流らしい琴であるのを見て、斯う尋ねると、

「ええ、生田です。先生はよく御存じですね。」

その時、私はふと思ひ出して、「確かあの此間のゆめ子といふ藝者も、僕は聞いたことはありませんが、生田をやるとか言つてましたが……」と獨言のやうに言ふと、

「さうでせう、多分、私の師匠と同じ師匠です。」と西向が音締を直しながら言ふには、「三年目に一度づつ、上方から來て半年ほどこの町に滯在して教へてくれる師匠があるんです。」

さういふ間にも、彼は十三箇の駒を彼方此方に動かしながら、琴の調子を一所懸命に合はしてゐた。と、傍では堀戸が、これ亦ヴイオリンの調子を調べたり、ニツケル製の樂譜臺を立てたり、色々と演奏開始前の準備に忙殺されてゐたが、やがて、

「はつ！」といふ西向の掛聲と共に、ヴイオリンと琴との『殘月』の演奏が始まつたのである。見ると、彼は今の先までの琴を運んで來た時の恰好や、音締を直してゐた時の道具方のやうな體裁とはまるで別人のやうな印象を、見てゐる私に與へた。最早彼の頓狂な顏付も、その寸の短い鼻も、不相當に太い眉毛も、その幾分か猫のやうな背中も、悉く生々として、と言ふよりも、實際よく人が言ふやうに、そこに奏し出される音の外には、彼の體も、それから安物らしい古ぼけた琴も、何にも見えないと言ふことが出來る程であつた。或ひは又、彼の上半身は、氣狂のやうに震へる手と共に、猿のやうに琴の上を走り廻るとも見えた。それに引きかへて、流石にその弟子だけに、彼と合はしてヴイオリンを彈いてゐる堀戸は、その小柄な、女のやうな體付が、弓を持つ手に氣を取られたり、樂譜面に氣を取られたりして、尋常茶飯の折の變にしなをする恰好も何も忘れて、しどろもどろの體に見えるのである。

それは實際、一種何とも言はれない、不思議な光景であつた。そんな人里離れた、高い雪の山の上の、つまり發電所の番小舍であるところの茅屋の中で、ちぬの浦浪六の小說の主人公のやうな二人の青年が、樂器を持ちながら踊つてゐたやうにも見えるのである、或ひは又、さういふ山家の中に置き忘れられた魔法の樂器が、この二人の青年に取り憑いて、縱横無盡に鳴つてゐるとも思はれるのである。やがて、私は煙草の烟が部屋の中にこもつたからといふ理由で、先の緣側の障子を開け放つ

て、西の方の御嶽の方を見ると、早や大分傾きかかつた日の加減で、並んでゐる乘鞍の峰と共に、その頂の氷のやうな雪の色が、少し紅味を帶びて來たのを見出した。その時は丁度西向が獨りで、三味線をもつて、六下りの何か上方唄を彈いてゐた時だつた。私は先程からの思ひが次第に募つて來て、殊に六下りの三味線の音などを聞くと、矢も楯もなく麓の町が戀しくなつて來たので、

「西向君、もう大分遲くなつて來ましたから、どうです、歸りませんか。」と彼の三味線の一寸した止み間を見計らつて言つた。「どうです、そして都合が何とか附くんでしたら、堀戸君も一緒に僕の宿へ遊びに來ませんか、そして一つ小瀧とか、ゆめ子とかを呼んで、諸君も一緒に何かやつて聞かしてくれませんか？」

すると、初めのうちは、西向は例に依つて遠慮してなかなか應じなかつたが、到頭私の言葉に從ふことになつて、堀戸も勤めの方の用事を中尾に賴んで行くことにして、一緒に來ることになつた。三味線は言ふ迄もなく藝者たちが持つてゐるだらうし、琴はゆめ子のでも、或ひは觀山の相弟子だつた、湖心亭（料理屋）の娘のでも借りればいい、ヴイオリンだつて一挺や二挺位なら何處かに借りられる所があるだらう。やつぱりこれだけ持つて行つたらいいでせうと言つて、觀山だけが、持つて來た尺八をマントの下に隱して、着物と帶の間に刀のやうに差し、堀戸は中尾の借り物だといふ、大きなだぶだぶのインバネスを羽織つて、三人は山路をとぼとぼと町に向つて下りた。私は頻りに町とゆ

め子とが戀しかつたが、向ふの湖水の緣の山の後に、次第々々に、せり下りのやうに沈んで行く、夕日を浴びた、御嶽と乘鞍の景色に別れるのが、ああ又、いつこの景色を見るだらうといふ氣がして惜しくてならなかつた。

「先生、先生にお願ひがあるんでございますが、」と山路で突然西向が、ひどく言ひにくさうにして、やつとのことのやうに言ふには、「といふのはこの堀戸君のことなんですが、堀戸君はいつ迄もあんな發電所の番人のやうなことをしてゐたくないと言ふんです。無理もないんです、堀戸君は未だ十九歳なんです。で、是非東京に出て、人の內の書生でも何でも辛抱するから、音樂をもつといい先生に就いて稽古したい、それには何處かの音樂隊とか何とか言ふやうなとこの下廻りのやうにして這入つてもいいし、どんな辛抱でもすると言ふのですが、それに就きまして、どうか先生、先生などはお顏が廣いでせうから、若しお心當りの所がありましたら、是非お話をしてやつていただきたいんでございますが……」

「どうも僕はそんな方には一向知つた人もありませんし、顏なんか一寸も廣くないんですから、心がけては置きますが、賴まないと同じ位に、的にしないで下さい、」と私は言つた。「そしてあなたは、西向君、君は東京へ行く氣はないんですか？」

「ええ、それや、」と彼は例に依つて恥づかしさうな表情をしながら、「行けるものならいつでも行き

たいんですが、私はもう堀戸君などよりずつと年も取つて居りますし、元々印判屋なんですし、……然し、私も何とかして行きたいなア……」

ふと、路が一つの曲り角に來て、今迄隱れてゐた谷の向うに、再び湖水や山の景色が私たちの前に開けたので、私は心の中で御嶽と乘鞍の方に別れを惜みながら、

「東京などに行つたら、山が見られませんよ、」と半分冗談にして言つた。

「もう、さうなつたら、山が見られなくてもかまひません。」と然し相手は眞面目な調子で答へた。

それから私たちは山を下りて、一先づ私の宿に歸つて、湯などに這入つて一服してから、夕飯を食べかたがた、宿屋ではまさかそんな音樂會を始める譯には行かないので、湖心亭に出かけて行つたのである。ところが、その晩、彼等の音樂と合奏する爲に、彼等と相談して湖心亭に呼んだ藝者の中に、無論ゆめ子も這入つてゐたが、その外に、三春家の小瀧といふ藝者がゐたのである。何故、わざわざここに小瀧といふ藝者の名を出したかと言ふと、今、その時から最早四年ほど經つてゐるが、不思議な緣あつて、私はその女と夫婦になつてゐるのである。そして、今もなほ、その當時のまま、私がこの世の中で最も戀してゐる女はと言ふと、その、當時一歲の赤ン坊を抱へてゐた、藝者のゆめ子であることに少しも變りはないのである。ゆめ子の子は最早四歲になるであらう。

その翌年の四月に、小瀧は信州の山から下りて來て、東京の私の女房となつたのであるが、その年は七年目に一度づつ催されるといふ、町に大祭のある年だつた。それは例の私の宿屋の三階の部屋の、南向いて附いてゐる二つの丸窓から見えるところの、明神樣の大祭なのである。杉の木に圍まれたこの明神の境內に這入つて、神社の後に廻つて見ると、皮と枝とを挫り取つた、大きな杉の柱が四本長方形を畫いて、各その頂點の位置に突立つてゐる。この四本の柱を七年目に一度づつ取換へる事になつてゐるので、その年の五月に卽ち七年目のその柱の祭が行はれたのである。七年目に一度といふやうな祭の事であるから、町全體が、のみならずその町の附近の村々が、或ひはこの明神の名を知つてゐる範圍の村々町々全體が、祭の催し物、祭の着物、祭のお客、祭の御馳走、すべて祭といふものが持つて來るいろいろな用事の爲に、私のやうな他國人の目にも甚だ緊張してゐるのが見られた。

私の南の丸窓から覗くと、明神の杉の森と社の景色には何の異狀も認められなかつたが、心なしかいつもは減多にその境內を人が、近道の爲に横切る外には、或ひは又稀には子守や子供たちが遊んでゐる外には、人の姿を見なかつたやうに思はれたのに、その頃はいつの時でも、五六人の法被を着て、靴を穿いて、中折帽を被つてゐると言つた風な種類の人たちが、その杉の森の中を檢分するやうに見歩いてゐたり、又別の時は、洋服を着た役人のやうな連中が二三人の巡査と一緒に、口々に何か

頻りに話しながら境内を彼方此方と歩いてゐたり、始終何か彼にか人の姿を見かけないことはなかつた。さて又、西の窓から眺められる範圍の町の辻々の、五六箇所に、それぞれ思ひ思ひの形をした長持のやうなものと、その上に御幣を立てたのが見出されるのである。それは番頭の説明に依ると、やはり柱の祭の時の催し物として、町ならば町内からそれぞれ一箇づつ、村ならば一村から一箇或ひは三箇位づつ、各々趣向を凝らした長持を擔ぎ出して、それが二三町の長さにもつづく所の、長持の行列が行はれる爲のものであるとの話である。或ひは又西の窓、北の窓から眺められる、二百本の工場の煙突が、此頃では夜になつてからも黑い烟を吐いてゐるのは、その祭に何日かの休を得る爲に、男工女工等が臨時の夜業を屬んでゐるに違ひないのである。夜と言へば、そのうち段々祭の期日が迫つて來る頃になると、毎晩々々私の高い三階の窓の下を、不思議な、木遣に似た唄を何十とも知れぬ多數の人間の聲で合唱して通るのが聞かれた。それは、私の部屋が、彼等の歩いてゐる道から言ふと、塔ほどの高さにある上に、下の町の屋根や、夜の暗さやの爲に、その姿を十分に見極める事は出來なかつたが、祭に出る町の人々が、長持を擔ぐ者は長持を擔ぎ、棒を持つ者は棒を持ち、音頭をとる者は音頭をとり、その七年に一度の晴れの祭の日の練習をしてゐるのである。その時には、長持の行列の外に、大名行列といふのが主な催し物の一つとして數へられてゐたので、その爲の槍持つ者、挿ん箱持つ者等も亦、別の行列を作つて、毎晩々々私の窓の遙かな下を通るのである。彼等は皆、書

間は桶屋だつたり、大工だつたり、漁師だつたりする稼業があるので、夜の休息時間を利用して、さういふ祭の日の爲の練習をしてゐるらしかつた。或晩からは又、南の丸窓から見える明神の森で、何をするのか、一ところ篝火をたいて、それを取卷いて何人かの人々が、がやがやと騒いでゐる氣配が聞え出した。

町の人々の話題は二言目にはその祭のことに移つた。宿屋の番頭は言つた。

「先生、一度お歸りになるにしても、五月には是非お待ち申しますから。……ええ、それはもう先生のことですから、この部屋をお明けしてお待ちいたします。藝者はもうお正月の五倍も忙しい目をします。取分け先生の御眞贔になさいますゆめ子とか小瀧とか云ふ連中になりますと、さあ、一座敷に五分間ゐるところは、餘程お馴染の方でないと。……へへ、御冗談でせう。先生のお座敷なら十分や二十分は向ふでお願ひしてもお伺ひいたしますでせう。……」

「もうずつと、祭の時まで御滯在ですか？」と顔見知りになつた、郵便局の局員も私に言ふのである。「何しろ七年に一度のお祭のことですから、大騒ぎする筈なんです。この前の時は私はまだ十五歳の鼻たれ小僧でしたが、その時分には父がゐまして、どうにか斯うにかやつて居りましたから、東京へ出て大學に這入るつもりだつたんです、郵便局員にならうとは思ひませんでした。この次の祭にはもう三十歳になるんですから、どういふ風になりますか……」

なる程、七年に一度と言ふと……、と私は途々考へるのである。この局員と多分同い年頃である藝者ゆめ子は、この前の祭の時はまだやつと雛妓になり立て頃だつたに違ひない。七年後に子の親になりらうとは誰が知つたらう？　恐らくこの町の人々は、七年に一度づつ、自分たちの過去を思つたり、將來を考へたりする機會を與へられるに違ひない。七年を長い氣がしたり、餘りに早く經つたと思つたり、喜んだり、悲んだり、そしてその祭を三度見るか、五度見るか、七度逢ふか、どんなに多くても十度以上めぐり逢はないうちに、桶屋も、局員も、藝者も、皆々死んで行くのであらう。

共同浴場の傍を通ると、「この間の木落しには珍しく誰も怪我をしなかつたよ。」「それは珍しいな。この前の時だつたな、綿屋の勘藏が死んだのは？　その代り今年は又大きな喧嘩がなければいいがな……」「もうどの邊に廻つてるずら、御柱は？」「有元村ずら、昨日有元の若い衆が來て、今日御柱が村へ着いたと言つとつたから……」

宿に歸つて番頭に聞くと、もうずつと前から町々村々の總代の者が、この山のずつと奥の、四里ばかりあるところへ一ヶ月ほども通つて、適當な木を四本切つて、それを木落しと呼ばれる崖の上まで引いて來て、そこから崖の下へ落すのださうである。山道の四里のことであるから、鼻の村や町から出かけて行くのに、行きと歸りの道に一日のうちの大部分の時間をとられて、向ふでは一時間位しか仕事が出來ないのださうである。さて、木落しから落してしまふと、その落ちたところから最も近い

村までは一里位しかないので、その村の者やその外からも多少手傳の者が出て、四本の柱に縱横無盡に綱をかけて、それからえんさえんさと村から村へと引きずつて歩くのださうである。そして一つの村に一日なり二日なり置いては、又隣の村から引取りに來て、到頭五月の祭日までに、この諏訪の町に柱が這入るやうになるのである。

さういふ賑な最中に、私と小瀧とは、私たちは共に共に最早三十歳であつたから、二十歳の人たちのやうに、今更らしく戀を語り合つたといふ譯でもなく、又別に改まつて結婚しようと約束し合つた譯でもないが、俗に言ふ、破れ鍋と閉ぢ蓋とが合つたやうに、その翌月、私が、二ヶ月近く滯在したその町に別れて、東京に歸つた一週間ほど後、彼女も東京に出て來て、そして私たちは夫婦になつたのである。それは即ち御柱の祭のある月であつた。七年に一度づつ奥山から杉の木を切つて、供へさせるやうな神樣であるから、それは隨分な荒神樣に違ひないのである。果して、祭には何處でも附き物の觀があるが、この祭では山で木を切る時とか、木を引張つて里を歩く時とか、兎に角、何かの機會に人間の血を見なければ治まらないものだと言はれてゐる。緣起を調べて見ると、この明神は上社下社の二ヶ所に分れてゐて、この町にあるのは下社で、上社といふのは三里ばかり東にあるのである。祭神は建御名方命と八阪刀賣命といふ夫婦の神で、ずつと以前には二神は上社に一緒に居られたのであるが、或時夫婦喧嘩の末、別れて妻の八阪刀賣命は此方の下社に移られたと云ふ話であ

る。それに因んでか、この柱の祭の年に結婚すると、必ず別れることになるから、決してしてはならぬと云ふ言ひ傳へがある。それにも拘らず、私たちは夫婦になつたのである。

私はどうしても東京に歸らねばならぬ用事が出來たので、四月の末か、五月の初のことだつたか、或雨の降つた晩、

「もう御柱祭が近いんですから、折角のことにそれを見てお歸りになつては、」と止める宿の番頭に、

「祭の日までは未だ十日からあるんでせう、その時には又來るかも知れない、多分來ることにしますよ、」と言ひ殘して、その町を立つたのである。東京行の汽車がそのステイションの小さなプラットフォオムに着いて、丁度そこへ俥で着いた私が、あわててその汽車に乘り込んで、座席の中の空いたところに鞄を置いて、私は硝子越しに、小さな驛の待合室から入口の方を覗いて見た。そして三十秒か一分かが經つた。やがて、汽笛と一緒に汽車が出ようとした時、私はその入口のところに二人の女が慌しく傘をすぼめてやつて來るのを見たので、あわてて汽車の昇降口のところへ立つて行つた。私が昇降口のところへ出て行つた時、二人の女は――小瀧を先にして、ゆめ子が後から――改札口を出て來たところであつた。「わざわざお見送り有難う、さやうなら、」と私は彼女等に向つて叫んだ、私と彼女等との間に雨が降つてゐて、プラットフォオムがあつて、驛員たちが右往左往してゐた。それだけの間を隔てたところから、小瀧がその大きな目で私の方を見てお辭儀をした。と、彼女

の背中の後からゆめ子が半分隱れてお辭儀をした、が、恐らく彼女等がお辭儀の頭をすつかり上げ切らないうちに、最早走り出してゐた私の汽車は雨の夜の中に消えた譯である。

その時の印象を私は忘れることが出來ない。私はほつきりとではないが、小瀧と、彼女が近々東京へ、――私のところへ遊びに來るといふ約束を交してゐたのである。それのみならず、その時既に私は彼女ともつと立入つた交渉をさへ結んでゐたのである、そして彼女よりも以前から知つてゐるところの、且つ心から愛してゐたところの、その爲にこの町をも愛するやうになり、そして屢々この町に來る原因になつたところの、ゆめ子とは何の約束も、何の特別の關係も、それどころか唯の四方山の話の外に何の語らひも私はしたことがなかつた。私は汽車の冷い硝子窓に頭をおし着けて、雨の夜の中にも朧ろに見えるその山の湖を硝子越しに睥みながら、「神よ、憐み給へ、」と心の中で叫んだ。「私がゆめ子を愛するやうな愛は、この世の中で成立たないものでありますか？　ゆめ子を愛する愛と小瀧を愛する愛と、神よ、人の心は昔の哲學者が言ふやうに、二元に惱むやうに抑も出來てゐるのでありますか？　神よ、助け給へ！」そして私は山の湖に別れ、甲斐ヶ根の傍を過ぎ笹子小佛の峠を拔けて、翌朝東京に歸つたのであつた。

だが、それから十日程後、私はふと思ひ立つて、又もや飯田町から出る汽車に乘つたのである。私がその十日程東京にゐた間に、山の町からは小瀧から二通と、堀戸から二通と、（その外に誰からも

來なかつた）四通の手紙を受取つた。前者からのは、一口に言ふと戀文で、寂しいとか、商賣も殆ど休んでゐるとか、近いうちに東京に出て、色々御相談したいとか、さういふ類のもので、後者は是非御柱の祭に入らつしやい、屹度先生にはお珍しいに違ひないとか、ここにはわざと言はないが、實は面白いことがあるからとか、さういふ類のものであつた。堀戸がそんなに二度も案内の手紙を寄越すのに、どういふ譯か西向からは何の便りもなかつた。そして、丁度私が不意に思ひ立つて、憑き物でもしたやうに、ふらふらと飯田町から汽車に乘つた晩に、私の留守の内に小瀧から、アスウカガヒマスといふ電報が來たのであつた。私はそんな事とは知らないで、宿に着くと、その晩、小瀧は又の日のことにして、早速ゆめ子に會つたのであるが、彼女といつもながらの唯の四方山話をしてゐるた時、東京から電報が來て、留守に小瀧が來てゐると知らして來たのである。だが、その翌日が愈明神の御柱が町に引込まれる祭日の當日だつたので、私は返事の電報を打つておいて、もう一日滯在の日を延ばすことにした。私は妙に病的な迄に內氣な性質から、これ迄にも郵便局に行く時位の外は、宿屋から町に足を踏み出すことは稀であつた。今、曙の高い田舍町のことだから、私とゆめ子や小瀧やとのいきさつが、その眞相が何にも知られてゐないだけに、色々の臆說と共に傳はつてゐるに違ひないと思つて、それに私の妙に祕密好きの癖も手傳つて、現に私は停車場から宿屋までの俥にも、晴天だつたにも拘らず幌を掛けさせた位だつた。そんな譯で、私は町に一歩も出なかつたが、その上そ

んな人里から遠く且つ高く離れた、山の中腹の三階の部屋に一日坐つてゐながら、物音に依つてか、氣分に依つてか、空氣に依つてか、人々の素振に依つてか、多分それ等の總てに依つてであらうが、町に大祭があることが十分に感得されるのである。南の丸窓をそつと開けて覗くと、いつもの無表情な明神の森も、社も、今日は七年に一度の化粧をして、赤と白や、黑と白やの幔幕が張り廻され、百の見世物の小屋掛や、百の物賣の屋臺店やが、杉の木を埋める程に並んでゐた。夜は夜で、そこに何事か、戰でも始まつたやうに、篝火や、電氣の火や、瓦斯の火や、カンテラの火やが點つてゐて、最早數日前から始まつてゐるに違ひない、ドンドン、ジヤジヤンといふ曲馬や、八木節や、地獄極樂やの見世物の囃子、さては社の神樂などが賑かに聞えて來るのである。それは南の窓ばかりでなく、町を見渡す西の窓や北の窓やは言ふ迄もなく、山に面してゐる東の廊下に立つても、その山の彼方此方にちらほらと散在してゐるところの、どんな小さな家や小屋にも旗や提灯が出てゐて、これ迄はそんな所に路があるとも思へなかつた邊を、ここからは隱れてゐてそれが見えなかつたとみえて、盛裝した子供たちや、大人たちが愉快さうに通行するのが見えるのである、だから、町に大祭のある事は、恐らく盲目にも聾にも感じられたに違ひなかつた。

だが、私の心の中は町の景色とは反對のものであつた。私は私の留守の東京の內に、小瀧が私と夫婦になる打合せをしに來てゐることを考へると、嬉しいどころか、到底救はれ難い、重い氣持を感じ

た。彼女と會ふ迄は、そんなにも自由に、廣々と展開されてゐた眼界であつたが、それが段々狹まつて來た上に、今や無限のトンネルにでも這入つて行つたやうな氣がした。だから、詩人のやうに譬へて言ふと、町は大祭の最中であるのに、私の心には葬式が通行してゐた。私はふと思ひ立つて、即ち山と、湖と、町と、夢とを求めて來た來たのだが、東京からの電報に依つて、忽ち思ひ設けぬ穴に落ち込んだやうな氣持で、三階の窓から町の景色を見下ろしてゐた。私は、だから、來たこととを堀戸にも、西向にも、誰にも知らさなかつた。そして唯一人、ゆめ子にだけ知らした譯である。

「先生はちつとも外にお出かけになりませんし、折角お出でになつたのに、それでは何ですから、」と番頭が來て、肩から下げるやうになつた、黑い革のサックに入れた舊式な望遠鏡を私に渡しながら、

「悪い眼鏡ですが、どうかこれでもお使ひ下さい。……今、そこへ、この眞正面の道を、下の方から大名行列が上つて來るさうですから。……」そして、番頭は案内するつもりか何かで、私の腰かけてゐた西の窓の敷居に私と並んで腰をかけて、「ほら、もう、あそこ、あの阪の上のところまで『下に、下に』の連中の來るのが見えますでせう。そら、もう槍の尖が段々見えて來ました。」

成る程、初めに供の裝束を着けて、『下に下に』と叫びながら、杖を引きずつて歩く人たちがやつて來た。それにつづいて、槍持、挿ん箱などを持つた人たちがやつて來た。が、それ等は、私の見てゐるところから一直線に延びてゐる道を歩いて來るので、下成り不便な眺望であつた。それに、私目

身の氣持が前に言つたやうに、決して晴々しない狀態にあつたので、私には、見てゐて餘り樂まないのであるが、番頭は私の爲でになく、彼の爲ででもあるやうに、一人面白がつて、そして私も當然彼と感想を同じくするかのやうに、やれ當節の人があんな裝束を着ると似合ひませんねとか、あの一番初めに來るのが何の某といふ鍛冶屋で、喧嘩早くて、亂暴者であるが、町の顏役になつてゐる男だとか、その二番目の槍持はもう六十近い男だが、これで五度目の御柱祭に槍を持つて出る古參だとか、夢中になつて見入りながら私に說明するのである。そしてその間、屢々、「恐れ入りますが、一寸眼鏡を、一寸眼鏡を、」と言つて、私からその持つて來た望遠鏡を取るのである。終には私よりも彼の方が望遠鏡の主人に見えた程であつた。

だが、彼は先程から私の機嫌が餘り浮立たないのを知ると、「ゆめ子はもう間もなく來るだらうと思ひます、確か一時間ほど前に電話でさう言つて參りました。何しろ今日は藝者衆はお正月より忙しいもんですから……しかし外ならぬ先生のお座敷ですから、今に參りますでせう。」と私を慰めた。

私は望遠鏡を目に當てゝ屢々大名行列を他所にして、町の景色を見廻した。私の部屋からは悉く目の下に見えるところの、町の宿屋と言はず、商賣屋と言はず、仕舞大家と言はず、會社と言はず、家といふ家はその通に面した場所を開け放つて、そこにありたけの毛氈を敷き、屏風を立て廻して、或所では酒を飲んでゐる者、碁を圍んでゐる者、歌つてゐる者、叫んでゐる者、町の人、近在

の人、老人、子供、ありとあらゆる人々が、ありとあらゆる形をしてこの大祭を樂しんでゐるのが、私の舊式な望遠鏡の中に近々と映つて見えるのである。が、矢張り、それ等の中で、私の最も目についたのは、今日こそ一流も三流も悉く島出に髪を結つて、紋付の着物の褄を取つて、座敷に坐つてゐるのや、町を歩いてゐるのや、兎に角群衆の中に際立つて見える藝者の姿であつた。それ等の藝者の中にゆめ子は何處にゐるか？　と私は思ふのである。すると又、この大祭を他所にして、ここにゐれば彼女等の中で第一の姉さんとして威張つてゐられる筈の小瀧が、今頃は東京の私の留守宅で何をしてゐるだらう？　と考へるのである。……

「先生、大名が來ました！」と、その時私の耳元で番頭が叫んだ。「恐れ入りますが、一寸眼鏡を拜借。」

そして彼は望遠鏡を目に當てながら、「いいな、いいな、流石にいいな。」と一人口の中で感心してゐた。「ああいふ大人びた恰好をすると、成る程、お父つあんによく似てるな。」

「一寸僕にも見せて下さい。」と私も彼から望遠鏡を受取つて、指された方を見ると、供の人たちは槍持にしても、奴にしても、先拂にしても、悉く大人である中に、大名になつてゐるのは十二三歳の少年で、彼だけが籠の代りに馬に乘つてゐるのであつた。

「あれはどういふ子供なんです？」と私が聞く迄もなく、番頭が言ふには、

「この町でのあれは金持の坊ちやんがなるんでございますが、今度のは、先生、あれはゆめ子の子供の、お父つあんの息子さんです、つまりゆめ子の子とあの子とは腹違ひの兄弟になる譯でございます。お見えになるでせう、目のぱつちりした、鼻の少し低い、――お父つあんにそつくりの顏をしてゐます。ああして坊ちやんをこのお祭の大名に出さうとしますと、それや大變なお金が掛るんですからね。あの着てゐる着物を、もう二三枚肌脫ぎになつて居りますでせう、あれを何枚も何枚も脫がして、つまり何枚も何枚も下にいい着物を着せるのが親のみえになつてゐるのでございます。あの着物だつても大變な金目のものでせうが、それに大名の馬の綱を引張つてゐる子供が一人居りますでせう、あれは他所の子供を借りて來るんですが、その子供の衣裳もしてやらなければなりませんし、その外この行列の供廻りの人たちにすつかり心附けをしなければなりませんし、迚も少々の金持では出來るこつちやございません。」

言ふ迄もなく、私は彼の言葉の後の方は聞いてゐなかつた。私は念入りに眼鏡の裏表を半巾で拭いて、その馬に乘つて、金襴の着物を二三枚も肌脫ぎになつてゐる子供の大名を、眼鏡越しに睥みつけた。すると、私に漠然とした、嫉妬とも憎しみとも附かない感情が次第に募つて來て、私は私自身をお伽話に出て來る風の神と想像して、實際私が彼のやうな大きな風の袋を持つてゐたならば、立所にその袋の口を打開いて、見たところ無邪氣な顏をして、否々決して無邪氣でない顏をして、その低い

鼻をつんと變な態度で、空の方に向けて、白粉を眞白に塗つて裝飾した顏を、時々誰かが聲でもかけると見えて、にやにや笑はす樣と言ひ、その一枚づつ要所々々で肌脫ぎになつて、金襴と金襴と緞子と又緞子と、縮緬と又縮緬と、無限のやうに着込んだ上着を一枚づつ腰に垂らして、反り身になつて乘つてゐる子供の大名を、馬も、供も、或ひは町も見物も、大風を起して、諸共に吹き飛ばしてやりたいとさへ思つた。だが、さういふ無力な風の神が、さういふ辻褄の合はぬ謀叛心を起してゐるとは誰が知る譯もなく、やがて大名行列は靜々と私の目の下の角を左に曲つて、明神の社へと通じる道に進んで行つた。だが、私の見てゐるところからは、角を曲ると、一人づつ三つ角の左側の、眞綿問屋の家の軒に隱れて行つた。

それから一時間ほど後のこと、四方八方から風に送られて聞えて來る祭のざわめきを耳にしながら、私はこんな祭を見に來たことを後悔したり、東京の私の留守の內で小瀧がどんな思をして待つてゐるだらうと思ひやつたり、ゆめ子はどんなに忙しいのか知らないが、何故顏を見せてくれないのだらう、若しかすると、否、もう多分小瀧がこんな大祭を他所にして東京へ行つたことが、そしてそれが私の家へ行つたことが彼女の耳にも聞えて、それで彼女は來ないのではないだらうか？　私は千々に思案しながら、もう直に、出來るだけ早くの汽車を摑まへて東京に歸らうと思ひ立つたり、せめてもう一度何とかしてゆめ子に會つて行かうと思ひ直したり、そして氣分がどうしても苛々して來る

と、立つて西の窓から天を覗いて見た。天を覗いて見たと言ふのは、町を見ないで靜かな山の遠景を見ようと思つてである。だが、空は曇つた日ではなかつたが、最早そんな寒い山國ではあるが、春の霞がこめてゐる爲だらうか、幾ら目を凝らしても、御嶽山も、乘鞍山も見えないのである。その時、女中が部屋の入口に現れて、

「堀戸さんといふ方がお見えになりまして、一寸失禮ですが、先生にお玄關まで……」と言つた。私はどうして堀戸が私が來てゐることを知つたのだらう、多分宿の番頭とでも逢つて、私が別に口止めして置かなかつたから、彼から聞いたのであらうかと思ひながら、玄關に下りて行つた。堀戸は例の癖で、女のやうに兩手を膝の邊にそろへて、しなをした恰好でお辭儀をしてから、何の前置の挨拶もなしに、

「先生、もう間もなく御柱が通るんでございますが、こたのお部屋からですと、大名行列などと違つてよく見えませんと思ひますので、どうぞ會社の方へお出で下さいませんか。お席を取つて置きましたから、私が御案內いたします、是非どうぞ……」

彼は私が二三度辭退した言葉にも拘らず、どうしても私を連れ出さねば歸らないやうな氣色なので、私は、もし留守中にゆめ子が來たら……と思ふと、何としても行き度くなかつたのであるが、仕樣がないので彼に連れられて外に出た。彼の會社といふのは、私の宿から半町と隔たつてないところ

なので、直にそこに着いたでのあるが、私は途で、「西向君はどうしてるんです、さつぱり消息があ
りませんが、此地にゐるんですか？」「ええ、居ります。」「會社にゐるんですか？」「……ええ……」
といふやうな問答を交した。が、堀戸は私を、昔の關所か何かに見るやうな、黒い丸太ン棒の柵をし
た電氣會社の中に案内して、そこの書記の一人に紹介して、私のことを頼んでしまふと、
「あの、私はこれから又一寸山の上へ行つて參ります。今日はこんなお祭ですから、中尾君と半日交
替で下りて來ることになつてゐるんです。」と言つて、私が何か言はうとした言葉も聞かないで、大
急ぎで外に出てしまつた。

間もなく、表の方にざわめく聞が起つて來たかと思ふと、先に堀戸が私を紹介して行つた書記が、
私の傍に來て、「御柱が通るさうですから、お席へ御案内致しませう。」と言つた。この電氣會社も堀
戸等のゐる山の會社と似てゐて、先に言つた柵の中には見たところ五十坪ばかりの空地があつて、そ
れを隔てて貧弱な建物が立つてゐた。逆に言ふと、何々電氣會社と書いた標札の出てゐる門をくぐ
つて、その空地を横切つたところに、會社の建物があるのである。私は今書記に案内されて、その空
地を横切つて行くと、先に言ひ忘れたが、その黒い丸太ン棒の内側に、一間程の間隔をあけて、それ
と並行して紅白の幕が張られてあるのは、どういふ譯だらうと不審に思つてゐたところが、今來て見
ると、柵とその幕との間に二列に澤山の椅子が並べてあつた。つまり幕を背にして、各々の人が椅子

に腰かけて、黒い柵の間から、往來を通る御柱を見ようといふ計畫なのである。私は書記に頼んで、
なるべく隅の方の椅子の一つに坐ることにした。そして私が彼と並んでそこに腰を下ろした時は、丁
度小學生徒の綱引遊戯をしてゐる者が、敵味方ともに同じ方角に引張るやうな恰好で、二本の綱に蟻
のやうに大勢の人間が摑まつて、それを引きずつて歩いてゐる光景が展開してゐた。彼等は綱を引き
ながら、既に私は、それの練習中に聞いたことがあるので、私の耳に聞覺えのあるところの例の木
遣節のやうな調子の歌を、一節づつ切りながら歌つてゐるのが聞えた。聞いてゐると、誰か後の方で
その音頭を取る者があるらしく、綱を引く群衆の歌聲が切れると、遥かに後の方で、確に一人の聲
で、模範の一節をうたふ聲が聞えて來る、そしてそれが一節終ると、群集は忽ちそれに附いて合唱す
ると見えるのである。

「この綱の後に所謂御柱が附いてゐるのですか？」と私が竝んで腰かけてゐる書記に聞くと、
「ええ、さうです。」と彼は答へた切りで、脇目もふらずに、一所懸命に柵の丸太ン棒の間に顔を押
し附けて、往來の綱引に見入つてゐた。

それは未だ村から村へと順々に渡されて行く間は、それぞれの所屬の村の若い衆たちが引つ張つて
ゐたものであるが、今日はこの明神の氏子であるところの、それ等の村々全體の若い衆が總出で引張
つてゐるのださうだから、私たち見物人の前を綱の部分が通り過ぎる間だけでも、驚くほど長い時間

が掛つた。が、漸くにして次第々々に御柱が近附いて來る氣色がした。私は初めは綱引の歌の音頭は一人であると思つてゐたところが、今言つたやうな長い一列であるから、後で知つたところに依ると、根元の御柱の上で一人の男が歌ふと、要所々々に取次の音頭を取る男があつて、大凡十人以上もさういふ者があるのださうである。それ等の人々は白い神主の着るやうな裝束をして、二本の綱の間に這入つて、行列と共に進行しながら、幹部の御柱のところで歌ふ大音頭取の歌と一緒にうたふのである。すると、それぞれの彼等の歌を聞き得る部分の引手たちが附いて歌ふのであつた。

そして、到頭御柱が私たちの前に進んで來たのである。そんな大騒ぎして引張られてゐるものは、と見ると、それは四本の柱を筏のやうに組んで、その上に御幣が立てかけてあるところの、唯大きなばかりで、至極簡單な呆氣ないものであつた。ところが、その御柱の筏の上に一枚の莚が敷いてあつて、その上に音頭取の總領であるところの、だから今迄のどの音頭取よりも、同じ神主流の白衣の裝束ではあるが、立派な風采をして、手に持つてゐる御幣を管絃樂の樂長のやうに振りながら、御柱の歌の音頭を取つてゐる男を見て、私は驚いたのである。彼を見る前に、私はその聲が遠くに聞えて來る時分から、どうも聞いたやうな聲だとは思つたのであるが、私は自分自身の物思ひの爲に、そんな事に、彼を目のあたり見る迄は殆ど頭を費さなかつたのである。

「西向君がやつてるよ、やつてるよ！……何とか聲をかけてやらうか？」と私の近所の椅守にゐた電

氣會社の人達が斯う言ひ合つてゐるのを聞く迄もなく、それはまぎれもなく西向觀山なのであつた。

西向觀山は、御柱の先の方の、莚の上に、まるで活人形のやうな恰好をして突立つてゐた。彼は歌ふ爲に口を開く事と、拍子を取る爲に手に持つてゐる御幣を振ることの外には、それ等の運動さへどうかすると人形の仕掛か何かのやうに見えた。彼は釘付けにされたやうに動かなかつた。從つて、彼は自分の勤めてゐる電氣會社の前を通行しつつある時も、即ち彼の同僚たちが黒い木柵の間から一齊に見物してゐる方へも、一瞥さへもくれないで、唯歌ひ、唯手を振つてゐた。恐らく彼はいつ何處を通つてゐるかさへ夢中であるやうに見えるのである。私と竝んでゐる書記の話に、初めこの大音頭を取る人の人選に就いては、色々な人たちが選ばれたのであるが、最近に、祭の十日ほど前に、急に今迄の人に用事が出來たり、多少の缺點があつたりして、彼が選ばれるやうになつたのださうであるが、その最初の動機は或晩彼が銘酊して、町をふらふら歩きながら、いつの間に聞き覺えたのか、その御柱の歌をうたつてゐたのが、それが誰かの注意を呼んだといふことで、調べて見ると、兎に角中流の、相當に教育のある人間でもあり、殊に元々音樂が大變好きであるといふので、彼を頼みに來たのださうである。言ふ迄もなく、彼はその妙に内氣な性質を以て、泣くやうにして幾度も斷つたのであるが、それではせめて、稽古の時にでも來てくれと云ふことになつて、それ迄も斷る譯に行かなかつたので、一度行き、二度行き、そして一度うたつて見せ、二度うたつて聞かせるうちに、一層そ

の巧さが人々を驚かして、無理耶理に今度の大音頭に選び出されたのださうである。町の人々は彼を選んだことが間違ひでなかつたのを喜び合つてゐるといふ噂であつたが、「成る程、これや巧い。それにあんな男ですが、内氣なだけに夢中で、實に熱心ですな、あの熱心なところがいいな。」と書記は半分は獨言のやうに言つて、相變らず柵に顏を押しつけて、歌つてゐる西向觀山から目を放さなかつた。

さういふうちにも、御幣を振り、歌つてゐる西向觀山の姿は、柱と共に一寸か二寸かづつ、徐々に私たちの前を過ぎて行つた。恐らく私は今一時間程前に見た子供の大名の身分に就いて聞かず、又この音頭取の西向と知合の間柄でなく、彼等が同樣に私に知らぬ他人であつたとしても、前者は風の神になつて吹き飛ばしてやりたいと思ふと共に、後者には滿腔の好意を持つ事に變りはなかつたに違ひない。一口に言ふと、彼は子供の大名のやうに去り身にもならず、肌も脫がず、況して時々にやにや〳〵と笑ふこともなく、左右を顧みることもなく、唯々恐縮し切つてゐた。そして恐縮しながら滿身に汗をにじませて、御幣を振り振り、夢中で歌つてゐた。その聲は、いつか彼が賢くもそれを知つてゐて、私に悲みながら言つたやうに、鼻の寸が短いので、聲の調子が極僅か狂つてゐたが、今この木遣節に似た御柱の歌を歌ふのに、それが最も適當した音聲となつて、人の心をひしひしと感動させるのである。私は一二寸づつ、彼の歌聲と、それに和して綱を引く千人の歌聲とに連れて、私たちの前

を進行して行く彼の姿を見送りながら、目と目の間の鼻の邊かむづかゆくなつて來るのを感じた。やがて後を見せて、次第々々に遠ざかつて行く西向觀山の姿は、面白いとも、悲しいとも、嚴肅なとも、滑稽なとも、何とも名狀しやうのない感じを私の胸に刻み込んで、それが涙となつて私の目をうるませたのである。

今は早、その時から足掛三年の月日が經つのである。が、御柱祭の年に緣を結んだ私たち夫婦は、どんな明神の怒りを免れたのか、見たところは、今だに一通り和合して暮してゐるのである。けれども又、考へやうに依つては、夫婦の上に加へられる神の罰は、離別一點張りとは限られてゐないので私たちの上にはもつと嚴しい彼の罰が加へられてゐるのかも知れない。他所目には、そして實際上にも一通りは、好き合つたやうな形で夫婦になりながら、私たちが同じ屋根の下に住むやうになつた日から、或ひは私たちが知り合ふ前から、私が山の町に殘つてゐる今の私の妻の朋輩藝者であるところのゆめ子に、折に觸れ時につけ、絕えず心を通はしてゐるといふやうな境遇も、確に神の罰の一つに違ひない。或ひはまた私の妻にして見れば、漸う三十年の辛抱の實が結んで、長い間憧れてゐた生れ故鄕の東京に歸ることが出來て、而も、私が言ふのも變なものだが、相當な、引目を感じない男の、

妾にではなく、妻になり得たことは、それは確に夢ではないのだが、夫婦になつてから唯の一度も夫と並んで歩いたこともなく、病氣の時の外は一日として二時間以上向ひ合つたこともなく、彼は自分を愛してゐるのか、ゐないのか、どんな事を考へてゐるのか、外に出たらどんな事をしてゐるのか嘗て一度も彼自身の考へや出來事に就いて語つたこともなく、考へて見ると、幾ら考へて見ても、今となつてはさういふ譯にも行かないが、又山の町を引上げる時には二度と歸らぬつもりで出て來たのだが、折角一人前の藝者にはなつてゐたし、自分の手で何人かの抱へ妓さへ置いて一家を張つてゐたし、ああ、あの時の方が、どんなに氣樂で、安心であつたらう、と最早及ばぬ後悔に煩悶してゐるのも、これ亦確かに明神の罰の一つに違ひないであらう。更にまた、夫婦共に三十歳を過ぎて、たとへ明日の生活に何の安全も約束されてゐないとは言ふものの、謂はば相當に贅澤なその日暮しの生活をしてゐる私たちに、最早丸三年に近い夫婦暮しをしながら、一人の子もなく、それは多分永久にないだらうといふことは、これは明神が私たちに加へた罰の最も重大なものであらうか？

その祭のあつた年の秋のことだつたと思ふが、或日その私たち夫婦の家の玄關に、突然西向觀山が現れたのに私は驚かされたことがあつた。

「突然ですね、いつ來たんです？」と彼を座敷に通してから、私が聞くと、

「もう半月程前からなんでございます。」と彼はいつもながらの恥かしさうな恰好をして言つた。

私はいつかの御柱の祭をそつと見に行つたことや、而も堀戸に案内されて會社の座席から彼の歌ひ振りを見たことやを、東京に歸つてから彼に感謝して書いてやつたことがあつたが、それに對して彼からの返事の代りに、堀戸から、彼が西向の厭がるのを承知しながら、私を御柱の祭に案内狀を出したのみならず、そんな會社の座席にまで迎へに行つたことを、殊に今度の私の手紙を見て改めて西向から非常に叱られた、といふことを書いて來た。それ切りで私達は消息を絶つてゐたのである。

「堀戸君はどうしました？」と私は彼の上京から思ひついて、やはり上京して音樂をやりたいと言つてゐた堀戸のことから遠廻しに聞いて見た。

「堀戸君ですか。」と彼は力のない聲で言つた。「堀戸君は轉勤になつて、島々へ行つてしまひました、非常に悲觀して居ります。」

「島々といふと日本アルプスの入口の――方ですか？」と私は聞いてから、段々相手の西向の事情に移つて行つて、「で、今、君は何方にお住居なんです？」と聞いて見た。

彼は、見たところ、東京に來た甲斐もなく、妙に悄然としてゐて、着てゐるものなども餘りさつぱりしてゐないのである。彼が言ふには「どうも田舍がだんだんつまらなくなつたものですから、以前甲府の私の家に居りましたもので、當地の四谷に來て相當にやつてゐるものがありますので、そこへまあ住み込んでゐるやうな譯なんでございます。あの田舍にももう六年住んで居りましたので、飽

き飽きしてしまひました。」

つまり、彼は東京に來て、音樂でなく、再び印判の職人になつてゐるらしいのであつた。そして今彼が住込んでゐる四谷の印判屋といふのは彼の父の家にゐた職人で、彼の父に可成り世話になつたものらしく、それだけ今彼がその家を他依つて行つて、多少とも仕事を手傳ひはするものの、明らかに冗員として、半分は居候の資格で住んでゐるといふことを、甚だ窮屈に感じてゐる樣子であつた。だが、彼は私があの山の町で會つた時もさうであつたやうに、その時も決して自分の境遇や心持の悲しさや苦しさを直接に表現しなかつた。そして、毎日二階でごろごろ寢轉んでゐます、退屈も慣れて見るとなかなか味のあるものですとか、私の部屋の窓からは夕方になると富士山が實によく見えます、富士山といふ山も退屈と同じことで、ちつと見てゐますと實に味のある山ですなとか、ですけど一旦決心して田舍を引拂つて來たのですから、まあ、これからどうなりますか、何にしても土にかじりついても、此方にゐるつもりですとか、いふやうな事を、なるべく言葉に餘裕を持たせて、ぽつりぽつりと話した。

私は彼の性質を知つてゐるので、彼が恐縮するのを氣遣つて、いつかの御柱祭に就いては、何にも言はずにゐた。彼も亦それに就いては何にも言はなかつた。彼は一時間ほどゐて歸つて行つたが、歸り際に玄關の所で、「失禮します、さよなら、」と言つてから、「あ、これは變なものですけれど、どう

ぞ。」と言つて、新聞紙に包んだものを置いて、逃げるやうにして歸つて行つた。後で開けて見ると、國華といふ紙卷煙草の袋を五箇、丁寧に紙に包んで水引をかけたのと、もう一つ何か小さなものを、同じやうに紙に包んで水引をかけたのとが這入つてゐた。小さい方のは、彼がこしらへたもので、私の名前を刻んだ象牙の印判であつた。

彼はそれから一年ほどの間に、合はして三度位私のところに來た。そしていつの時でも、或ひは石鹸半打とか、タオルとか、さういふ種類の、妙に實用向きの品を、歸りがけに新聞包みのまゝで置いて行くのが常であつた。「これはお粗末なものですけど……」などと言つて、人の前で齷齪しく出すことなど、彼には屹度變に恥かしくて出來ないのであらうか。彼は時々、「私のやうなものでも、何か書けるものでせうか、書きたいと思つたら、書いて見てもいいでせうか、」といふやうな事を言つた。「書きたいと思つたら、書いて見てもいいでせう。」と私が答へると、彼はまるで大變な事でも許されたやうに、「有難うございます、有難うございます。」と言つた。だが、到頭一度も私は彼の書いたものといふのを、見たことがなかつた。「此頃は音樂の方は……？」と聞くと、「いや、迚もそんなものをやつて居られません。」と言つた。

その二度目に來た時は、一度目の時から四五ヶ月も後のことであつたと思ふが、その時の話に、「堀戸は到頭島々の方の勤めを止めて又諏訪に歸つて居ります。」「諏訪で又勤めてゐるんですか？」

と私が聞くと、「さうは行きません。だから仕事がなくて困つてゐるものですから、今は方々からの印判の注文をとつては、私の方に申込んで來るといふやうな仕事をしてゐます、一つの注文に何割かの禮をやることになつてゐるのですが、大したことはありません。困つてゐるんでございませう。」と西向の話であつた。「ですから、堀戸も亦、今の私と同じことで、もう音樂どころの騷ぎぢやないんでせうが、東京へさへ來たら何でもいい事があるやうなつもりで、始終私のとこへ手紙を寄越します。ですが、私は田舍者が東京に來たら、泥坊か乞食の外にすることはない、とその度毎に返事してゐるんですが、堀戸は、それが何か私が意地惡でもするやうに思つてゐまして、近頃では怒つてゐます。ねえ、先生、私たちは東京で何をしたらいいでせう？」

私は氣がついたのであるが、第一回の時よりも、その時の方が彼が一層悄然として見えたことであつた、着てゐるものも一層汚れてゐるやうであつた。その時まで、私は彼の容貌を見る度に、それが樂天的なものか、厭世的なものか、明るい顏なのか、陰氣な顏なのか、解決に苦しんだものであるが、その時こそ初めて、それが決して樂しいものではないことを見出した。實際、その手入れのしない、無雜作に分けた髮の毛も、太い眉毛も、寸の短い鼻の恰好も、さてはその鼻の下の太く短い口髭も、勤人のやうにも見え、かと思ふと爭はれないもので、忽ち職人らしくも見えるところの、その全體の感じも、それ等の一つ一つが泣いてゐるやうな表情をしてゐることを私は感じ出したのであ

る。そしてその泣き顏が時には笑つてゐるやうに見えることがあるだけなのである。

何でもその翌年の正月に、彼から寄越した年始狀に、西向觀山と書いた横側に括弧をして、住所選定中としてあつたので、笑はされたことがあつたが、果してそれから一ヶ月ほど後に、牛込の方の何某方といふ處書で、移轉したことを知らして來た。彼は到頭四谷の印判屋に別れを告げて、二階借の生活を始めたらしかつた。その後、私のところへやつて來た時は、更に一層悄々としてゐた上にひどく肉體的にも窶れて見えた。「やつぱり私のやうなものには、山の見える所でなければ暮せないんでございますな。植木と同じことで、野に生えるものとか、川べりに育つものとか、山でなければ育たないものとか、人間にもそれぞれ合ふ土と合はぬ土があるんぢやないでせうか、先生？」と彼は言つた。「私はもう此頃では退屈にも飽きましたので、毎日東京の町を歩いて暮して居ります。毎日歩くとえらいもんですな、實に下駄が減るんでございます。……」「先生、東京からも山は見えないことはないんでございますね。」とその時西向はいつになく雄辯になつてつづけた。「この上野の公園などからもお天氣の夕方なら屹度、富士山から箱根にかけての山がよく見えますのを、先生は御存じですか？　もつとも此頃は一年中で一番よく山の見える時ですが。……先生、田端といふ方へ行きますと、筑波山が見えますね、私は初め何といふ山だらうと思つて、往來の人に聞いて見たんですが、誰も教へてくれないんでございます。ところが三度目に行つた時に、その田端の停車場の傍のとこで

すが、御存じでせう、あの前の方が大きな穴のやうな、崖のやうになつた處です、ですから、往來の片側に柵がこしらへてある、あそこのところです、甘酒屋が丁度荷を下ろしてゐたものですから、甘酒を一杯飲みながら聞いて見ましたら、そしたら敎へてくれたんです。先生、あそこからは筑波山ばかりでなく、日光とか、秩父とかの山も見えるんでございますね。先生、秩父の山は甲州の山に一寸趣きが似て居りますね、さうはお思ひになりませんか？　もつとも、それを知つたのは極く近頃のことでして、それ迄は毎日程この上野へ來たんですが、先生の所へはいつでもお寄りしたいんですけれど、いつも先生のお邪魔になるだらうと思ひますもんですから……」

實際、彼の性質として、この言葉の通り、彼は私のところへ始終來たいと思ひながら、私の邪魔になりはしないかと思つて、その度毎に遠慮して來ないに違ひなかつた。或時は折角私の家の前まで來ながら、玄關に客の下駄らしいものが幾つも脫いであつたので、人が見てゐたら隨分怪しく思ふだらうと恐縮しながらも、引返したことが三度もある、といふやうな話さへした。そして彼はそんな山の話ばかりして、何故四谷の印判屋を出たのか、どうして二階借をしたのか、そして何をしてゐるのかといふやうな話に就いて、詳しいことは何にも言はなかつた。だが、彼が可成り苦しい境遇にあるらしいことは、言葉の端々にも現れてゐた。が、彼は依然として山の話ばかりつづけるので、

「甲州の山といへば、東京の近くからそれが見えるのを知つてゐますか？」と私もつい山の話に引込

まれて、斯う言ふと、

「え、本當ですか、先生、本當ですか、何處からです？」と彼は膝を進めて聞いた。

で、私が、市内の愛宕山とか、或ひはその外二三箇所からも見えるところがあるさうだが、それ等に就いては詳しいことは知らない、私の知つてゐるのは、京濱電車の川崎驛の傍の、六郷川の前後の低地のところへ行くと、電車の中からでも、或ひは下りて見るなら川崎驛で下りて行つて見ると、西北の方に甲斐ヶ根の三座の山が、まるで砂糖の山のやうにくつきりと見える、電車の中からでも、それ等の山は暫くの間、電車が走ると共に、家や、林の頭の上を走つて見えるといふことを話すと、彼は驚きと喜びとで、即座に座を立ちさうにした位であつた。

私の外の大勢の友達の中で、山の話をそんなに興味をもつて、熱心に語る人は一人もなかつたので、私はその點だけでも西向と會ふことは、どんなに自分の仕事の忙しい時でも、決して厭ではなかつた。まして、彼の極端に内氣で、それに何處か田舍の人には珍らしく垢拔けのした所があつて、而も善良な性質に、私は十分好感を持つことが出來た。だが、私が彼を歡迎するのにもう一つの重要な原因があつた、それは外でもない、彼が多分堀戸から聞くのであらうが、あの山の町の新しい消息を來る度に傳へてくれることであつた。山の町の消息と言へば、即ち彼女の（私の愛するゆめ子）の消息を含まねばならぬのである。けれども、彼女等の（山の町と彼女）との新しい消息と言つても、

彼女等の一ヶ月は、私たちの住んでゐる都會の一日の變化をも持たなかつたから、要するに、此間何々屋の番頭に會つたら、先生に宜しくお傳へしてくれとのことであつたとか、何月何日の朝、堀戸がその近所に用事があつて、夢の家の前を通つたら、ゆめ子が襷がけで水汲みをしてゐたとか、昨夜湖心亭の入口から、褄をとつたゆめ子が出て來るところを、ちらと見かけたとか、此間町の芝居小屋で、東京の歌劇團といふものがやつて來て、手品と歌劇とを交る交るやつたとか、さういふ種類のものに過ぎなかつた。が、それ等を西向は私に話すのに（彼は、この前、山の町で會つた時には、一人の年增藝者に過ぎなかつたものが、次に東京の私の內で見た時は、けろりとして私の妻になつてゐる女に向つて、生れた時からの私の妻でゞもあるかのやうに尊敬して、奧樣、奧樣、と挨拶してゐたが）その私の女房が傍にゐる時は、勿論遠慮して話さなかつた、そして彼女が傍にゐない時を見計らつて、一段と聲をひそめることを忘れなかつた。だが、話は、私には、それより以上を要しなかつたのである。私にはゆめ子があの坂の上の彼女の家の前にある、共同の堀井戸へ、襷掛けして水汲みに行つたといふことだけで、又彼女が褄をとつて、湖心亭から出て來たといふことだけで、或ひは又堀戸が町で何々屋のあの顏のつるりとした雄辯家の番頭に會つたといふことだけで、それ以上を要しなかつた。私は端折りの着物を着て、襷をかけて、細い身體に重さうにバケツを下げる彼女の姿、バケツの重さに惱む彼女の顏の表情、褄をとつて俯向き勝に、何か悲しい事でもあつたやうな恰好を

して、さういふ料理屋から出て來る時のすらりとした姿、さては町の共同湯の往來まで溢れる湯の匂ひやら、最早雪の爲に白くなつた四方の山々の景色やら、いろいろの風物が目に見た百倍もの生々さで、樣々の姿で心に浮ぶのである。——

西向觀山は、私が京濱電車の沿道から、彼の生れ國である甲州の三座の山が見えることを敎へてから、三日に上げずそこへ出かけて行つたらしかつた。彼からはそれに就いて一ヶ月おき位に二度ほど葉書を寄越した。その二度目の葉書では、彼は最早春になつて、どの日もどの日も、甲斐の山が見えなくなつたことを、人に別れたよりもつと悲しんで來た。彼は今日こそはと思つて、幾日か出かけて行つたらしかつた。けれども、東京でどんなに空が靑く晴れてゐても、その六鄕川の邊に行くと、靑い空は頭の上だけで、彼が仰ぎ見る西北の空も、多分その何の方角の空も、地平に近くなるに從つて、乳のやうに白く淀んで見えた。彼は或日野にゐる百姓に尋ねたところが、もうこれからは幾ら天氣のいい日でも、向うの山は見えませんと答へられた、その事を私に報じて來たのである。

それから又一ヶ月程後、私は同じ人から、甲府何々町といふ肩書をした、手紙をもらつたのである。彼は到頭、又彼の故鄕の山の町に歸つて行つたのである。それは甲斐ヶ根の三山の峰の雪が次第に消えて、その南の端の農鳥山に、殘雪に依つて形造られる有名な鳥の形の現れる頃であつた。彼はここに、父の家に一ヶ月ばかり滯在してゐる、毎日々々山を見て暮してゐる、六鄕からは見えなくな

つた甲斐ヶ根の、南の端の農鳥山だけは、三日にあげず見ることが出來る、やがて私はやつぱり六年間住み馴れた諏訪の町に歸るつもりです、諏訪に歸つて何をしませうか、それは未だ考へがつきません。が、今兎に角、堀戸君に家を探してもらつてゐます、私が彼方へ行きましたら、先生どうか是非入らつしやいませんか、ところで先生、昨日堀戸君からの手紙に、ゆめ子は又子を孕んださうです、それで、近いうちに藝者を引くさうです、と書いてあつた。

私は彼の手紙を掴んだままで、思はず部屋の中に棒立ちに突立つたのである。彼女が子を孕んで藝者を引いてしまへば、それを生み落してまた再び藝者に出る迄は、丁度六郷河原に春が來て、甲斐ヶ根が見えなくなるやうに、私は幾ら飯田町から汽車に乗つても、彼女を見ることは出來ないのである。

だが、私は今まで言はなかつたが、實はたとひ私が彼女の町に出かけて行つて、たとひ彼女がまだ藝者をしてゐても、暫くでした、と言つて、笑つて彼女に會へない事情があつたのである。といふのは、私は足掛け三年前の御柱祭の後も、私はその時々に都合のいい友達を引張つて、私の女房には内所で前後四度ばかり、彼女の町に行つたことがあるのである。ところが、その三度目の時のことであるが、或晩、私は一緒に行つた友達と、彼女と、彼女の連れの藝者と、四人で近くの町に、自動車に乗つて活動寫眞を見に行つたことがあつた。その翌日、私たちは、私がどんなに長く落着いてゐたくても、落着いてゐられないその町を立つたのであるが、その時のことを、町の新聞で何か隱れ事でも

しに行つたやうに書いたといふ事件が起つた。私はこれ迄に、自分の職業である小説に、屢々彼女に似た女をモデルに使つて書いた事があるので、それでなくてさへ、彼女の子の父親か、或ひは目下彼女が特に贔屓になつてゐる旦那かの、ありもしない嫌疑を受けて、不機嫌を買つてゐたに違ひないのに、その新聞の記事に依つて、彼か（或ひは彼等か）の更に嚴しい咎めを彼女は受けたらしいのである。彼女は或日私に手紙を寄越して、その新聞の切抜を封入して、どうか私と先生とは、特別の怪しい關係はないのですから、その事を、私を可哀さうだと思ふなら、書いて來てくれませんか、と言つて來たことがあつた。その手紙は、私の女房に、私が彼女に隱れてその町へ出かけて行つたことを知らせた上に、嫉妬の感情で彼女を可成りに怒らせた。だが、そんなことは私として幾らでも忍ぶとしても、考へて見れば、それはゆめ子から私への絶交狀であるに違ひないのであるから、私は悲しみの餘り呆然としてしまつた。嘗て添寢したこともなく、嘗て戀を語つたこともなく、それでゐてこの世の中で私の最も愛する者であるところの女から、そんな手紙を受取つた私の悲しみは、實際譬へやうもない程であつた。私はそれに返事を出さなかつた。

だから、四度目に私は一人で行つた時は、例の三階の部屋にこもつたままで、呼ばうか呼ぶまいかと三日の間毎日四方の窓から窓へと部屋の中を歩き廻つて、そして到頭彼女に會はずに歸つて來たのである。私はそれを、この頃はまだ東京にゐた西向觀山に、行つたといふことだけはその度毎に話

しはしたが、彼女との間がそんな風になつてゐるとは話さなかつた。だから、今の私には、晴れた冬の日に、六郷河原に行つて甲斐ヶ根を見るやうに、そんなに易々と彼女を見ることが出來るかどうか、たとひ勇氣を出して飯田町から汽車に乘つたとしても、それは丁度西向が東京に來たやうに、恐らく要領を得ることは覺束ないのである。

けれども、私のやうなものには、どんな艱難な境遇にゐても、そこに夢見る餘地さへあれば、又悲しみのうちに樂しみ、憂ひのうちに樂しむことが出來るのである。だから、彼女と私とがどんな境遇や關係にあらうとも、彼女がその町に藝者でゐさへすれば、たとひ行きはしなくても、或ひは又行つても、四度目の時のやうに到頭會はずに歸つて來るやうな事があつても、私は未だしも希望を樂しむ事が出來るのである。それが、いつか私たちの何でもない唯の散歩が、新聞に間違つて載せられた時に、彼女を咎めて、彼女にそんな手紙を書かせたところの男の胤であらうか、兎に角子を孕んだ爲に、彼女が藝者を引くといふ西向からの消息は、愚な、併し私の身にとつてはこの艱難な浮世に於ける、唯一の慰めであるところの心地よい假睡から、棒でもつて叩き起された程の打擊に違ひなかつた。私が彼の手紙を摑んで、部屋の中に芝居の幕切れの役者の眞似のやうに、棒立ちに、突立つた所以である。

私は取るものも取敢ず、是非行つて見たいと思つたのである。山と彼女の國へ！

山戀ひ（後篇）

しかしながら、私は自分の情熱に驅られて山と彼女との國に出かけようとして、例へば旅の支度を始めるとか、鞄に品々を詰め込むとか、さては帽子を被つて、一足門を外に跨ぐとか、そこまで足を踏み出しながら、忽ち目の前に、雨の大井川にでも出會したやうに、棒立ちになつて、危く前にのめりさうな體を後へ引かねばならない氣持を味はねばならなかつた。彼女から貰つた絶交狀の思ひ出がポムプでのやうに私の燃える情熱に水をそそぐのである。私は犬のやうに尾を卷いて、私の部屋の中に引返すのである。

小說家である私は、この時までに既に二三篇の、彼女とのいきさつを骨子とした小說を書いてゐた。私が旅を思ひ立つて、忽ちそれを思ひ止まつて、落膽して私の部屋の中に坐つたところが、私はそれを誰に歎きも訴へもする者がないのであるから、私は私の爲に子守唄でもうたふやうなつもりで、何と恥べき話ではあるが、それ等の自分の昔の小說をそこはかとなく取出して讀むのである。

私の友達の西向觀山が、彼の鄕里の甲斐の國から、私の心に愛する彼女が、二度目の子供を腹に持つて、近いうちに藝者を引くと知らして來てから、私はその時彼の手紙を手に摑んだままで、これ

は是非とも彼女が藝者を引く迄に、たとひ私が遥々と彼女の國まで出かけて行つて、客として彼女を招いても、すると彼女が私と知つて、招かれて來ることを拒むやうな目に遭ふとしても、その結果はどうならうとも、それは神任せにして、私は行かうと決心したのであるが、一日經ち又一日經ちするうちに、忘れる譯ではないが、それからそれと引續いて起る色々な俗用やら、そんな俗用は何としても切拔けるとしても、と、又例の彼女から貰つた絶交狀の思ひ出が、蓋をするやうに私の情熱を抑へるやら、そして一日と過ぎ又一日と過ぎて、一箇月も二箇月も過ぎてしまつたのである。

私の斯ういふ戀の心持は、病氣の言葉で譬へて言ふと、それは慢性の狀態に這入つてゐたに違ひなかつた。それは目に見え、心に思ひ當る刺激に依つては言ふ迄もなく、殆どその理由の分らない、氣の附かない刺激に依つてでも、例へば或晩眠られなくて、何度も寢床の上で寢返りをしてゐた時とか、或ひは又突然人込の電車の中で吊革にぶら下つてゐる時とか、かと思ふと夜遲く自分の家に歸つて來る途で、ふと空を見上げてきらきらと輝いてゐる星を眺めた時とか、ありとあらゆる場合に、私は思ひがけなく私の病氣がちくちくと痛み出すのを覺えるのである。まして、町の屋並の間の地平の上に、遠くの山の姿を見出した時とか、或ひは西向から手紙を受取つた時とか、町でたまたま彼女に似た女を見かけた時とかには、病氣は忽ち急性の徵候に變つて、私は二十歳の青年のやうな惱みを感じねばならなかつた。

けれども、どういふ譯か、その後西向から寄越す手紙の中には、幾ら期待しても、幾ら期待しても、彼女に就いての消息が少しも齎されなかつた。到頭、又信州に舞ひ戻りました。然し今度は諏訪ではなく、岡谷の町に參りました。それは諏訪には適當な家がなかつたのと、何か大望を抱いての如くに、はるばる東京に出て行きながら、又こそこそと泥坊のやうに元の町に歸つて來た後目たさと、何や彼やで、諏訪は私に今は古里よりも懷しい町ではありながら、最早夜でなければ歩けない所でもるやうに思ひますので、堀戸君とも相談して此方に定めたのです。岡谷といふのは、先生の諏訪の宿屋の、先生のお好きな三階の西の窓から、夜になると影畫の町のやうに、ちらちらと灯の光つて見える町です。さういふと大變いい町のやうですが、町中が製絲工場で、實は未だ戸籍の上では岡谷村とはなつてゐますが、人口は町以上で、工場の男工と女工とで五萬も人間がゐるといふ變なところです。そこで私と堀戸と二人で暮す事になりました。二人とも未だ何をして食つて行かうかといふ見當が附かずにゐます。——云々といふのが、彼が古里の甲府から二度目に信州に歸つた時の第一信であつた。

諏訪の町に時々出かける事がありますか、ゆめ子の消息をお聞きになりませんか、彼女はもう藝者を引きましたか、おついでの折お聞き込みになつた事、或ひは心安い人で適當な人がありましたら調べてもらつて、次のお手紙の時にでもお知らせ下さいませんか——と私は彼に書いた。

次に西向から來た手紙には、封筒の裏に「鵞湖樂舍」といふ、長方形の立派な判が捺してあつて その判の横手に小さなペンの字で西向觀山と認めてあつた。彼の筆蹟は拙くて絹糸のやうな細い書體であるのが特徴だつた。中には、今度數人の應援者を得て、表記のやうな音樂會をこしらへました、鵞湖といふのは、先生なぞは勿論御存じでせうが、諏訪湖の異名ださうでございます、で、鵞湖樂舍と人が附けてくれたのでございます、『樂舍』といふのは可笑しいでせうね。今のところで十五人ばかり弟子があります、堀戸君は助教授といふ役目です、それと、隔日位に方々へ弟子を勸誘に廻つてくれてゐます、先生一度入らしつて下さい、とそれだけであつた。

私はその返事には、唯、彼の新しい仕事の繁昌することを祈る意味の文句だけ書いてやつた。私は、私がいくら諏訪の彼女の動靜を知らしてくれと言つてやつても、多分一ヶ月に一度もさういふ藝者の出る席に行くことは、今の彼の境遇としては出來なからうし、さう私が考へるやうに、幾ら狹い田舍のことだからと言つて、一人の藝者の消息を誰も彼もが知つてゐるといふ譯ではなからうし、(恐らく彼の町の百の工場を埋めてゐるところの、男工女工の唯一人でさへもが、私がそんなに心の底から戀慕してゐるところの、彼等の隣の町の藝者の名を知る者がゐなからう。) だが、彼の手紙に依れば、一日おきに彼の助教授である堀戸が、音樂の勸誘に歩いてゐるとのことであるから、今に何事か聞いて知らしてくれるに違ひない。だから、私は我慢して彼女に就いては何にも書いてやらなかつ

たのである。

それから又ざつと一ヶ月ほど後に、鵞湖樂舍から來た手紙に、私は今度こそゆめ子に就いて何か書いてあるだらうと思つて、大急ぎで開いて見たところが、言ふには、一昨日の日曜に、(第三日曜日は稽古の休日になつて居りますので、) 堀戸君と二人で、彼が以前諏訪の電氣會社から轉勤になつて行つた先の、島々といふ所へ行つて來ました。そこの彼の昔の同僚に、日本アルプスの三十幾つかの山に登つたといふ男がゐまして、その男の案内で、私たちの足さへ丈夫で元氣があつたら、樂舍の方をもう一日位延ばすつもりで、上高地まで行つて見ようといふ考へだつたのです。ところが、上高地どころか、私は德本峠の頂上まで行くのに、幾度引返すことを提議したか知れない程です。が、堀戸君はあんな小さな女のやうな恰好をしてゐる癖に、なかなか弱らないで、案内してくれる男と一緒に、私を押し上げるやうにして、せめて穗高山の見える峠の頂上まで行かうと言つて、無理耶理にそこ迄は行つて來ました。そんな思ひをしてまで行つたのに、どうでせう、肝腎の穗高山は山一面に化物のやうなもくもくした雲を被つて、ごろごろごろごろと鳴つてゐるのです、鳴つてゐるのは雷なのです。今に晴れるだらうと言ふので、峠の上で一時間近く待つてゐましたが、晴れるどころか、もくもくした物凄い雲はだんだん私たちの方にも擴がつてくる模樣なので、流石に連れの二人も私の言ふことを聞いて、大急ぎで島々まで驅け下りて來ました。そしたら私たちが島々に着くか着

かない時分に大夕立が頭の上から落ちて來ました。先生ともよく話し合ひましたことですが、山は見るべきもので登るべきものぢやありませんな、私はつくづくさう思ひました。その癖、そんな高い山に登つたのは、私は生れて初めてのことですので、峠の上に上り切りますまでは、穂高のやうな高い山を、面と向つて見に行くのですから、嬉しくて本當に胸がどきどきした位です。そしてそんな思ひをして行きましたのに、到頭會ふことが出來なかつた譯でした。山に會ひに行くのは、勤めの女に會ひに行くやうなものですね。——

その手紙の中には、同封して、珍らしく堀戸からのも這入つてゐた。彼のは唯簡單に御無沙汰してゐるといふ事と、暑さの折から先生の御自愛をお祈りします、と唯三行ばかりの手紙であつた。

西向の山の話は久しぶりで私を喜ばした事は言ふまでもないが、暫くぶりで見た彼の手紙に、やつぱり彼女のことが一行も書いてなかつたのは、私を溜息に殘した。

私はその返事に、私たちの職業は毎月定つて勤めに出る譯でもなく、と言つて、商賣人のやうに内に坐つてゐなければならない義務もなく、所謂道樂商賣で、他所の人が見たらまるで毎日遊んでゐるやうに見えやうが、それでゐてこれ程心の中のせかせかした、絶えず夢にでも魘されてゐるやうな、氣持の落着かぬ仕事はないので、と言つて毎日々々夜になつて見ると、結局はごろごろして何一つしずに日を潰してゐる、近頃あなたの山登りの話は誠に面白く讀んだ、それに反して私の今は、氣持さ

へ落着いてゐれば、そんな思ひをしないで濟むのかも知れないが、この肝腎の暑い盛りに、私は雜誌の仕事に何かなしに襲はれてゐるやうな氣がして、これではならぬ、何處か靜かな所へ旅に出て、そして書いて來ようと思つて鞄を取出したり、かと思ふと、いや、浮か浮か旅などしてゐては却つて仕事が後れるから、などと思ひ直しては又鞄を押入れにしまつたり、旅は旅でも、あの私の好きな四方に窓の附いた三階の部屋が、最早や封じられたやうな今の場合、實際毎日をどうしてゐるかと人に聞かれても返答に困るやうな狀態にある、（何故その三階の部屋が最早私に、謂はば『開かずの部屋』のやうに、封じられてゐるのか、その實相は西向は知らないのであるが、私の歎きの餘り、つい書いてしまつたのである。）といふやうな事を書いて、何月何日、西向觀山樣と認めてから、わざと次手のやうにして、一寸、ゆめ子の消息はまだお耳に這入りませんか、と書いた。書いて私は赤くなつた。

すると、西向からはやつぱり返事はなくて、それから十日程後のこと、同じ鷺湖樂舍の封筒に、西向の感化に依つてか、やつぱり絹のやうな細い書體で、「堀戸より一」と認めた手紙を受取つた。その時は私はゆめ子のことは考へてゐなかつた。堀戸から嘆獨で手紙をもらふのは、いつかの御柱の祭の時以來のことなので、何だらう、と不思議がりながら、開いて讀んで見ると、拜啓とも何とも書いてなくて、だし抜けに、昨夜諏訪に用事があつて行きましたら、先生のいつもお泊りになる角屋の門

の前の坂道を、褄をとつて下りて來るゆめ子樣に會ひました。私は若しかすると先生が入らしつてるんぢやないかと言ふやうな氣がしましたので、よつぽど尋ねて見ようかと思つたのですが、私こそ彼女を知つて居ますが、彼女の方では私を覺えてゐないと見えて、どんどん行き過ぎてしまひました。確に、さう思ふと幾分か大きいとは見えましたが、知らなければ殆ど分らない位です。それには、もつとも、褄を取つてゐる左手で隱すやうにもしてゐましたし、帶の結び方などで殆ど分らなくなるのでせうが、姙娠してゐる人とは一寸も見えません、人の話ではもう五ヶ月以上とのことですが、つまり前孕み脊孕みと言つて、あの人のは脊孕みの方なんでございませうね、脊孕みは然しお產が重いといふ話でございますね、と書いてあつた。

この手紙は私を大變喜ばせもしたが、大變悲しませもしましたが、これは長い間私の頭の中を往來する繪になつた。どんな女でも悲しみを與へると多少美しくなるものであるが、女の腹から生れた女の中で、彼女ほど悲しんで美しくなる女はあるまい、と戀の爲に一層愚人になつて居る私には思はれるのである。彼女がどんなに美人でないかと言ふことは、私はこれまで私のいくつかの小說の中で、餘り屢々書き過ぎた程である。だが、それ等の、平生は美人の資格にならないところの目鼻立なり身體の恰好なり、諸々の彼女の肉體の部分々々は、悲しみの表情をする爲にだけ造られたもののやうに見えるのである、と言つても、諸君笑ひなすな、屢々私が言つたやうに、女の腹から生れた女の中で、

彼女ほどこの世の喜びにつけ、悲しみにつけ、誇るべき事につけ、祕すべきことにつけ、自分のことにつけ、他人のことにつけ、物言はぬ女を私は見たことがない。この世に生れて、人は他人のことを惡く言つたり、他人のことをよく言つたり、自分のことを善く言つたり、自分のことを惡く言つたり、兎に角何等かの形で告白することに依つて、どれだけ色々の悲しみから救はれてゐるか知れない。だから、どんな男でも女でも、それをしないものは殆どない。そして（私）の彼女だけはそれをしないのである。これは千萬人に一人であるに違ひない。たとへ彼女が十人の違つた男の子を孕まうとも、たとへ彼女が泥坊の癖があらうとも、或ひは又寢小便する病氣があらうとも、このことだけで彼女は天才と同じ椅子に腰かけることが出來ると思ふのである。そして私はその爲に彼女をこんなにも戀するのである、と喇叭をもつて言ひ得るのである。

私は又、そこで早速彼女の町へ出かけようかと立上つた。が、いつかの絕交狀のことがある上に、私たちの間には（私には戀であるが、彼女にはさうでなくとも、それにも拘らず）いろいろと入組んだ氣持のもつれがあるのだから、たとひ一寸目には見えない程の體裁ではあらうとも、彼女はそんな腹を抱へて私に會ふことは拒絕するだらう、と思つて、私は又机の前に落膽して坐つてしまつたのであつた。

そして到頭、私はその年の冬が來るまで、私はそんなにも憧れながら、山と彼女の町に行くべき機

會を持たなかつたのである。

その年の夏は、五十日間に、晝間に一二度夕立があつたのを除いて、たつた二度しか雨が降らなかつた。何故私がそんな事を言ふかと言ふと、私はその五十日の間、毎日々々、日が暮れる頃になると、ステッキを振つて、京橋區のとあるカフェエに出かけた、一日も缺かさずにである。そしてその間にステッキを、舌鼓打ちながら傘に持ちかへた日は、たつた二度しかなかつたのを覺えてゐる。

それは大通りから、俥も通らない細い横町を這つて、又一つ角を曲つた裏町の、何々商事會社だとか、何某法律事務所だとか、何通信販賣部だとか、何貿易部だとかいふ、夜になると、軒燈一つを殘して悉く目を閉いでしまふやうな家々の間に、どうしてさういふ所にそんな店を開いたのかと怪しまれるやうな場所に、そのカフェエはあつた。それは道に迷つた醉つ拂ひか、大通りを歩くことを避ける二人連かの外には、どんな通り掛かりの客といふ種類の客をも豫想出來ないやうな店であつた。夏のことで、普通には硝子の扉の嵌まつてゐるところに、風通しをよくする爲に、三尺から六尺位の位置に、ギイと開いたら自然にパタンと閉まる仕掛けになつてゐる、三尺ほどの簾の扉が附いてゐたが、だから道を歩きながら、少し腰を屈めてその扉の下から中を覗くと、そのカフェエの中の

卓子や椅子の足の部分が見透かされた。しかし、いつの時でも無生の卓子や椅子の足があるだけで、そこに客らしい人間の、生きた足が見えることは稀であつた。

私には妙な一つの病癖があつた。それは或何か一つの事を始めたり、樂んだりし出すと、その事にばかり溺れ込む性質、といふよりは、やつぱり病癖があつた。と、こんな風に言ふと、讀者が何か鹿爪らしいことに取るといけないから例を擧げると、私は不斷慢性の便祕症で、藥なしにはどうしても健康が保てない體質を持つてゐた。が、それで、今迄は何か彼か出鱈目の藥を飲んで濟ましてゐたのに、ふとしたことから、一體便祕症にはどんな色々の藥があるだらう、その内どんな藥が最も自分の體質に合ふだらう、といふやうな事から、日本發賣のあらゆる便祕用の賣藥、さては亞米利加製のもの、獨逸製のもの、佛蘭西製のもの、などと出來るだけ集めて、それ等を飲み比べて見るのである。つまりこの例が示す位の意味の、極く愚しい、何でもない病癖のことなのである。これは熱心といふ部類に入れるよりは、寧ろ浮氣といふ部類に入れるのが至當であらうか。さて、その頃、私は蠅が非常に不潔で、不愉快なもので、是非とも退治なければならぬといふ考へと、それを捕ることに、初めは飛んで來る彼等の不愉快さに苛々してだつたが、終には隅々を探し廻つたり、捉まへるとぶうんと鳴いたり、そんなつまらぬことにまで興味を持ち出した。だから、その頃盛んに賣出されてゐた、ゼンマイ仕掛の蠅取機械は言ふ迄もなく、昔からある蠅叩きとか、弓形の蠅彈きとか、酢を入れる硝子

の壺の蠅取瓶だとか、鞠を着けた竹の皮だとか、亞米利加製の蠅取紙だとか、或ひは蠅取散だとか、悉く目に觸れる範圍の蠅取の道具といふ道具を集め出した。だから、或日の新聞に、吸蠅管、一名蠅取杖といふ不思議な廣告が出てゐるのを、私は見逃さなかつた。何でもその廣告文に依ると、在來の蠅取道具は大體蠅が集まつて來るのを待つてゐて捕へるといふ、謂はば消極的な、ものばかりであつた、中には蠅叩きなどといふ、稀に積極的、攻擊的なものもあるにはあるが、それは敵の止まつてゐる場所に依つて、それが高過ぎるとか、物の角とか、柔軟な物質の上とか、天井のやうな逆樣の位置とかにゐる場合には、用をなさない。それに反して我が蠅取杖はその尖が漏斗形になつてゐて、管は硝子管だが、延び縮み自在で、下端についたゴム球を抑へることに依つて、どんな所に止まつてゐる蠅でも悉く吸ひ込んでしまふ仕掛のものである。殊に、日本の家庭の婦人たちは一體に運動不足である、本機を一本具へ附けておくと、かの有害不衞生な蠅を絶滅すると共に、運動不足を補つて間接に健康を增進することが出來る、だから、中流家庭の婦人に特にお勸めする、云々といふのであつた。如何にもよく捕れさうな氣がするのと、その捕り方が奇拔であるのと、殊に私を喜ばしたのは、私は婦人ではないが、私の職業上運動不足であるところから、それを補ふ云々といふ言葉であつた。私はその廣告に依つて、それを賣つてゐる家の番地を紙の端に書きつけて置いて、京橋區何々町といふ所を、その夕方尋ね當てる爲に歩き廻つたのである。そしてその結果、私は先に言つたカフエ

エを發見したのであつた。

私は朝起は割合に早い方で、大抵七時には床を出て、それから飯を食つたり、新聞を讀んだり、雜誌を拾ひ讀みしたり、そして漸くのことで、仕事であるところの原稿紙に向ふのである。それを二行か三行かも書き續けないうちに、疲れた欠伸が出て、私はペンを擱いて、蠅取杖と持ちかへるのである。私はそれを持つて內中の部屋を順々に歩いて廻る、一順廻つた時分には、又初めの部屋に戻つて來て見る、さうして、私は仕事の時間の大凡五倍を蠅取ることに費した。いつかの蠅取杖は勿論廣告文程にはいかなくとも、それは天井とか、窓敷居とか、一般に仰向いて捕る時には最も適當なものではあつたが、疊の表とか、米櫃の蓋とか、食臺の上とかいふ、手近にゐる蠅を捕るには、捕れるが、餘り面白さがなかつた。そこで私はさういふ所の蠅には、例の昔からある、底の大きく開いた、その周圍に酢が這入つてゐて、下から蠅が這入ると、どうしてもその酢の這入つてゐる部分に落ちる外に、逃げ場のないあの蠅取瓶を持ち出して、それは普通ならその下の方に蠅が集まつて來るやうに甘い物を置いて誘き寄せて、彼等が飛ぶ時に自然に硝子のその器の中に這入るやうになつてゐるところの、所謂消極的蠅取器であるのを、それを何處でも彼等の止まつてゐる上に私自身でそつと持つて行つて、上から被せてしまふことに依つて取る方法を考案した。私はさうして彼等を捕る事に甚だ興味を持つた。蠅を捕るのに疲れると、私は原稿紙のところに二三十分間戻つて來て、二行なり三行

なり書きつづけたり、それでもどうしても書けない時は、手近に置いてある本を取つて五六頁讀んだりするのだが、暑さと疲れとで私は危くそのまま眠つてしまひさうになると、そこへ何處からか飛んで來た蠅が顏の上に止まるのである。すると私は忽ち立上つて、蠅取杖と、蠅取壜とを交る交る持ちかへては、部屋々々から、臺所から、湯殿の隅々にまで、泥坊のやうに足を忍ばして歩き廻るのが常であつた。

しかし、夕方が來ると、私はそれ等の蠅捕道具を悉く見捨て、どんなに差迫つた仕事の時でも、原稿紙の上にペンを置いて、何か大切な用事でもあるやうに家を出て、馳の道のやうに、私は毎日毎夕、同じ道を電車に乘つて、そして同じ横町を拔けてかの裏町のカフエエの、簾の扉を開ける習慣になつた。そこで私は市木直吉と友達になつたのである。

市木直吉はこのカフエエでの、私よりも先輩の客であつた。このカフエエと言つても、それは私が見付けた時の一ヶ月ほど前に出來たもので、市木がそこへ行き初めたのは私よりも半月ほど前からとのことであつた。不思議な因緣には、市木をそのカフエエに紹介した友達といふのは、彼の中學時分の同窓で、私がその家を探す爲に偶然このカフエエを見付けたところの、例の蠅取杖を賣出してゐるS――商會の店員だといふ話であつた。更にその話を誠のやうに脚色づけたことには、その蠅取杖は、市木の友達の、そのS――商會の店員が發明したもので、その發明には市木も亦大いに相談に預

かつて、現に私が讀んで好奇心をそそられたあの廣告文は、市木その人が草したものであるといふことであつた。市木が悲しんで言ふには、「あの機械がもつと賣れたなら、僕も今頃は多少分け前にあづかつて、もう少しいい境遇になつてゐた筈なんですが……。」

「どうして、では、いつも君一人で、その發明者はここに見えないんです？」と私が聞くと、

「それが、……」と彼はひどくしんねんむつりとした、口の重い男で、「その男が初めは僕をこゝへ案内してくれて、一週間ほどはずつと二人で一緒に來たんですが、もう今はその商會にゐないのです。」と答へた。

彼はそれ以上説明しなかつたが、その後私とずつと親密になつてから、何かの時に話したところに依ると、その友達の男といふのは、その蠅取杖を發明して、主人の店から賣出させることに極まると共に、隨分色々な名目で金を借りたり、無斷で融通したり、さては使ひ込んだりした爲に、當時は市木からも姿を隱してゐるとのことであつた。

だが、そんな話はみな、ずつと後になつてから知つたことで、初め私たちは一週間も、或ひは十日も、互ひに毎晩顏を見合してゐながら、卓子越しに目と目とが合ふと、あわてて目を反らし合つて、そして何方からも聲を掛け合ふどころか、寧ろ敵意をさへ持つてゐるやうに相對してゐたのである。と言ふのも、彼は見たところ、如何にもつんと澄ましてゐて、目がばかに大きくてぎよろりとしてゐ

て、一寸給仕女に物を言ひかけてゐるのを見ても、實に口數が少なくて、それを笑ひ顏をしないで言つて、一口に言ふと、私は嘗てこんな親しみ難い印象を與へる男を見たことがなかつた。

けれども、先にも言つたやうに、そのカフエエの宵のうちの客といへば、殆ど私と彼との二人に限られてゐたと言つても間違ひではなかつた。私たちの外には、稀にその邊の何々貿易部とか、何々通信販賣部とかの店員や小僧やが、湯歸りとか寢る前とかに、アイスクリイムとか、ソオダ水とかを飲みに來るのと、そこから程遠からぬ所に散在してゐる待合邊から散歩の次手に來る、氣まぐれな男女の一對ぐらゐに過ぎなかつた。無論、料理などは出來なかつた。アイスクリイムと、ソオダ水と、シロップ珈琲とそして四五種の洋酒とだけであつた。それに、不思議なことには、私はそんなに毎日ほど出かけながら、そこの主人らしい人間を見かけたことはほんの二三度しかなかつた。いつでも眠たさうな、しよぼしよぼした目をしてゐる給仕女と、始終講談本か何かを讀んでゐる、アイスクリイムやソオダ水をコップに注ぐ役目の、白い洋服を着た三十がらみの男と、それ切りであつた。そして彼等は二人が二人とも、申し合はしたやうに甚だ無愛想であつた。それから、私の一つ氣の附いたことは、その五脚ほどしか卓子のない、小さな土間の店が、そんなにいつも閑散を極めてゐるにも拘らず、その上の二階の部屋に當る主人の居間らしいところには、何となく大勢の人がゐるやうな氣色がすることであつた。無論、それは唯氣色が感じられるといふ事だけで、實は毎晩私のゐる間に、極ま

つて二三人の人が、別々にそのカフエエの土間を素通りして、その白い洋服の男に一寸會釋して、奥の方に這入つて行くのを、――その奥に二階への階段があるらしいのであつたが、主人は何をしてゐるものか、兎に角、それ等の人々は皆相當の裝をしてゐたが、その主人の友達か何かに違ひないのであらうが、――さういふのを見るにつけ、私は私の頭の上の二階の部屋には、始終大勢の人間がゐるやうな氣色を感じた譯である。だが、私が或時、その しよぼしよぼした目の給仕女に、「主人たちの部屋はこの二階なの？」と聞くと、

「いいえ、もつと奥の方です。」と彼女は曖昧な調子で言つた。「私、よく知りませんけど、この上の二階と、それから三階とは別の人が借りてゐるんです。」

そして、私はそれ以上何にも聞かなかつた。一體、さういふ雰圍氣の中で、どうして私と市木とが口をきき合ふやうになつたか、私はその最初をよく覺えてゐない。だが、どんな物言はずの、人見知りする人間同士でも、例へば彼等が無人島に漂着して、そこで二人が顏を見合つたとしたなら、屹度何方からともなく物を言ひかけて、いつとなく親密になるに違ひないやうに、私たちも亦そのカフエエでいつとなく物を言ひ合ふやうになつたのは不自然ではないのである。そして又、さういふむつつりやに限つて、大抵は心の中は人一倍の寂しがりやである事も、私たちは似てゐたものだから、自然、日が經つうちには、でも口數はお互に性來のことであるから、極く少なかつたが、隨分親しくな

つてしまつたのである。私は先にも言つた通り、朝起きて夕方迄の間は、内にゐて、自分の仕事であるところの、文章を書くことに骨を折つてゐた。暑さは暑いし、仕事はほかどらないし、それで一日に何人となく、私のその仕事の出來上りを催促しに來る新聞雜誌の記者とか、或ひは私を先輩として訪問して來るより若い人たちとかに應接もしなければならなかつた。だが、私の受合つた仕事の締切の日が更に一層迫つて來たので、私はもう大抵の客には會ふことを斷つて、若し都合がよければ、或ひは氣が向くなら、夜の八時から以後ならば、京橋のこれこれのカフエエにゐるから、そこへ來ていただきたい、と玄關で女房に詫びを言はせた。が、玄關で彼女が言ひにくさうに斷りの言葉を述べ、客は又客で禮儀正しくそれに應答してゐるのを聞きながら、私は、私自身も元より首の縮まる思ひをしながら、大抵の場合、先に言つたやうに、原稿をそつち除けにして、蠅取杖と蠅取壜とを替り替りに持ちかへながら、菓子鉢の上に止まつてゐる金蠅をねらふことや、天井の隅に馬蠅を追ひ詰めることや、さては熊蜂や、小蠅やを捉へることやに汗を流してゐた。蠅を取ることには飽きなかつたが、仕事の原稿を書くことには直に疲れを覺えるものだから、蠅五十疋に原稿一枚がなかなか匹敵しないのである。そして、そんな思ひをしながら、私はやつぱり日が暮れると、原稿紙やら、ペンやら、本やら、字引やら、總ての私の仕事の諸道具を見捨て、杖やら、罎やら、箱やら、悉く蠅取の諸機械を片附けて、馳のやうにいつもと同じ道を、例の京橋のカフエエへと志して行つた。

すると、大抵の場合、市木直吉は私より二十分か三十分か、早くからそこに來てゐて、彼はいつも彼の定席にしてゐるところの、入口から一番遠い部屋の隅の卓子の前に腰かけて、そのぎよろりとした目を、壁の畫を見てゐるのか、卓子の花瓶を見てゐるのか、入口を通して往來を見てゐるのか、否、實はその何れの方に目は向つてゐたにしたところが、その何れのものをも見てゐない、何故といつて、それは空氣を見詰めてゐるやうに、何處かぽかんとした表情をしてゐたから、そして大抵の場合ゴオルデンバットの煙を、無味無臭の煙を吹かしてゐるやうな顏附で、ぷかぷかと吹き出してゐた。けれども、私がそんなに長い間の、卓子越しの、しんねりむつりとした睥み合ひの最中にも、何となしに、始終彼に引きつけられたのは、彼のその目であつた。一口に言ふと、それは物を考へ詰める人間の目に違ひなかつた。つまり探偵とか、相場師とか、さては思想家とか、或ひは又さういふ職業上からばかりでなく、どんな人にでも胸に心配のある時にするところの目附である。この男は一體何を職業とする人だらう、と私は屢々考へた。

果してこの男は、私が彼と口をきき合ふやうになつてから四日目だつたかに、私とは年も一つ違ひで、その所屬してゐた學校こそ違つてゐたが、同じやうな科目を研究した者であることを私は知つた。私は文科で、彼は哲學科の出身であつた。その後、私たちが次第に親しくなると共に、折に觸れて彼は屢々私に嘆いて言つたことは、「今は昔と違つて文學の方だと、いくら無名でも、飜譯すると

か、その他文學的雜文を書くとかして、どうやら斯うやら身過ぎが出來るやうですが、哲學では未だ未だどうにも金の取りやうがありません。と言つて、私は無器用な爲か、どうしても文學的な雜文や、通俗的な文章が書けないのです。いや、實は二三度書いて、雜誌社に足を運んだことがあるのですが、どこでも受取つてくれないのです。……」

「失禮ですが、さう言へば僕は君のお名前を、雜誌の廣告面か何かで、時々見たやうに思ひますが……」と私が言ふと、

「ええ、時々書くことは書くんです。」と彼は、さういふ癖と見えて、怒つてゐるやうに見える物の言ひ方で、「と言つて、私の書いたものをだとひ六號活字で載せるにしても、受取つてくれる雜誌といふのが二種しかないんですが、もつとも私等よりもつと有名な人のでも、哲學の文章などを今日載せる雜誌といふものは幾らもありませんがね、さあ、それで私の得る收入を毎月に平均すると、金五圓に充たないのですから、笑ひ話にもなりません。それでゐて、どういふ因果か、私は哲學といふものが好きで、これが止められないのです。少しばかり方向を變へて、近頃流行の經濟問題とか、社會問題とかいふものを論じたら、もう少し色んな點で融通がきくんでせうが、これ亦どういふ因果か、私にはそんなものに一寸も興味が持てないんです。」

斷つておくが、彼が物を言ふのは決してこんな風につづけてはしないのである。私が色々日數多く

きいた後で、私の十に對する一位の割合で、彼はぽそりと一言、怒つたやうな言ひ方で、吐き出すやうに、文章にすると一行ほど言ふだけである。だから、これだけの言葉は、その外の無駄な言葉を省いた上でのことだから、私が彼から聞くのに三日かかつたと言つても決して嘘にはならない。つまりここで彼の言葉として言ふのは、私が彼に代つて、自分の言葉に直して、時間の上で言ふと、そんな風に縮めて言ふものだと承知しておいて貰ひたい。

ところが、彼、市木直吉に、哲學の專攻者で、哲學より外に何も出來ない人で、それで一ヶ月の收入が金五圓に充たないといふのに、外にもう一つ重要な仕事があつたことを、私は長い間知らなかつたのだ。尤も、私は彼が哲學などやる人としては、いつも珍しく洒落た裝をしてゐるのに私は氣がつかない譯ではなかつた、そんなに裕福な生活をしてゐるらしくも見えないのに、明石や、上布の着物を素肌に着て、殊に目立つのは、彼と會ふ場合がいつもそんなカフエのやうな場所だつたからでもあらうが、私は彼が羽織を着てゐる姿と、帽子を被つてゐたところと、足袋を穿いてゐるのとを、夏の間ぢゆう見たことがなかつた。或時、珍しく私の方が彼より早く行つた時、その家の唯一人の女給仕である、目のくしやくしやした女が、何かの話の次手に、彼のことを「株屋さんでせう、」と言つたことがあつたが、私はそれを、彼女が彼の風采から推して言つたのだらうと思つた。「どうして？」と聞くと、「だつて、赤木さんと以前よく『場』の方へいらしつたやうですもの。」「赤木さんつて……

…？」と私が聞くと、「蠅取杖の赤木さん、」と彼女は言つた。つまり、それが彼を初めにこのカフエに連れて來たといふ、彼の中學の同窓の、蠅取杖を發明して、その後間もなく行方不明になつたといふ男の名前に違ひないのである。

つまり、實際、哲學の外の彼の重要な仕事といふのは、相場のことなのであつた。更に驚いたことには、その相場に手を出したのは、彼の方が初めで、彼の行方不明になつた同窓の友達の、赤木は彼に誘はれて相場を覺えたのであるといふことを、私は後に彼自身の口から、聞かされたことであつた。そして、その當時だつても、彼は實は細君と三人の子供との一家の生活を、哲學ではなく、相場に依つて立ててゐたのであつた。彼は言つた、「さういふと、私は勝負事は何でも好きなやうに思はれるかも知れませんが、よくよく變つた生れ質と見えて、相場の外は勝負は至つて嫌ひな方なんです。その反對に、例の蠅取杖の赤木なんかは、今まで機會がなかつたので、相場をすることは私から初めて教はつたやうなものの、その前から、花でも、トランプでも、將棋でも、相撲でも、野球でも、何でも金を賭けなければ承知しないといふ男でした。どうしてあの男が今迄相場を知らなかつたらうと、幾ら考へても、不思議でならない位です。」

これ等の言葉も、彼が極く斷片的に、一句づつ話したのである。「今頃は何處にゐるか、何にしてもやつぱりそんな事ばかりして暮してゐるでせう、」と彼は言つた。そして、彼自身に就いては、彼

はさういふ小相場をやる人間としては、珍しく殆ど仲買の店などに出かけないことであつた。もつとも、近頃では赤木に勸められて一二度と、場の方へ行つたことがあるが、普通には、彼の相場のやり方は、謂はば哲學者的といふのか、毎日夕刊で一寸上り下りの値段を見る外には、賣も買も悉く自分の頭の中で斯うと定めたら、それを速達葉書で取引の店に通知するだけなのださうである。これは相場を月に一度か二度位、ほんの慰みにやつてゐる人なら別として、彼のやうにそれで曲りなりにも生活してゐる人間には、殆ど類のないやり方に違ひなかつた。

すると、私がさうして、畫のうち、内で蠅五十匹と原稿一枚と、原稿一枚と蠅五十匹とを、交る交る取り又書き、書き又取りしてゐる間、彼、市木直吉は何をしてゐたかと言ふと、彼は私と違つて大變な寢坊で、起きるのはいつも午後一時頃であつた、彼は夏の汗の出る間は、讀むことも書くことも、何にも出來ないのださうである、その癖、起きて、朝と畫とを兼ねた食事を認めると、降つても照つても彼は麻布にある家を出て、神田か、本郷か、牛込かの古本屋の町に出かけるのが常であつた。彼は神田の古本屋を三區に、そして本郷と牛込とを各一區づつに分けて、一日に一區づつ、だから、六日目には又同じところを廻る譯で、毎日二時頃から夕方までの何時間かを、それ等の古本屋の店を覗いて歩くのである。それは彼の言ふところに依ると、無論目下の彼はさうして毎晩カフエに來る位の金はどうにか工面するとしても、氣に入つた本を片つ端から買ふほどの經濟狀態にゐないので、唯

さうして本の景色を眺めに行くだけなのださうである。初めのうちは、それでも一册や二册は時々買つてゐたが、今では全然買はなくなつた。又初めのうちは可成り根氣よく拾ひ讀みしたり、毎日續けて何處から何處までといふ風に讀みに行つたりしたものであるが、今ではそれさへしなくなつて、唯行きあたりばつたりに、これと思ふ本を棚から拔き出して、出鱈目に一頁の半分か、半分の半分かを讀んで、そしてその本全體を想像したり、それからそれと、別の彼自身の空想を呼んだりすることを、彼は無上の樂しみとするのであつた。そしてそれがどういふ種類の本であるかといふと、それは三種類に限られてゐた。言ふのは彼自身の專攻であるところの哲學書と、それから今の重要な仕事であるところの相場に關した本と、さて第三番目がどんなに私を喜ばしたか、又その爲に私が彼と一層親しくなつたか、――つまり、山に關する本なのであつた。

だが、こんな風に書くと、讀者はうつかりして、その京橋の、私たち二人の外に殆ど他の客を交へないカフエエで、私と彼とがどんなに仲よく、雄辯に、毎日の夕方を語り合つてゐるかと想像するかも知れないが、それが先にも言つた通り、私も決して口數の多い方ではなかつたが、彼は無口な中の最も無口なものであつたから、私たちは十分に一言二十分に一言位しか話すことはなかつた。似てゐたのは、どんな暑い晩でも、彼も私も滅多にアイスクリイムとか、ソオダ水とかいふ冷たいものを飲まずに、いつも熱い紅茶ばかり命じて、例の始終講談本を讀んでゐる、白い洋服を着た、酒の番や、

湯沸しの番をしてゐる男を困らすことであつた。そして、唯、いつとなく、私たちは、彼の卓子であるところの、部屋の一番隅のそれに、向ひ合つて椅子に腰かけるやうになつたことである。

さうして夏が過ぎて、やがて秋にもなつたのであるが、私も彼も日が暮れると、京橋のカフエエに出かけて行く生活はちつとも變らなかつた。變つたのは、季節が移るにつれて、日が早く暮れるので、私たちがそこに行く時間がそれと共に早くなつた位のもので、そして私自身の晝間の生活で言へば、いつか蠅も少なくなつたので、原稿を書く間々には、山の寫眞を眺めたり、それに關する本を讀んだり、山の國の地圖を調べたり、更に又その最も多くの時間を、山とゆめ子に就いて色々の思案に耽ることに、原稿を書くことの五倍もの時間を潰した。そして市木に就いて言ふと、彼は此頃では一日おき位に哲學の論文を書いたり、それに就いて考へたり、又別の一日おきには、夏からの癖がつゞいて、相變らず古本屋町を逍遙して暮してゐた。そして二人は、日が暮れるとそのカフエエで落合ふのである。だから、恐らく私たちの生活を第三者の位置から見る人があつたら、その單調さと、その餘りに極まり切つてゐるのに呆れるに違ひない、多分役場の書記でもが私たちよりは單調でない生活をしてゐるに違ひない。

それは何でも十月の極く上旬のことだつたと思ふ。――夏中、薄物の時でも、單物になつても、必ず襦袢なしにそれ等を素肌に着るのを得意にしてゐるらしい、酒落者の哲學者である市木が、やつぱり素袷の着流しでやつて來たので、私は何にも言はなかつたが、心の中で驚いたのを覺えてゐるから、最早私等のそのカフエエの、簾の扉がいつの間にか普通の硝子のそれに變つてゐた或晩、相變らず市木も私も銘々飲みさしの紅茶の茶碗を前に置いて、默りこくつて、椅子に倚りかかつてゐた時、私は珍しく扉の外に人の氣配を聞いたやうに思つたので、ふとその方を見ると、果して硝子越しに人間の顏が覗いてゐるのを見出した。が、妙なことに、顏は足音と一緒にそこで止まつたままで、扉が開かないので、私は變に思つた。それに私の氣のせゐか、顏は此方の室内が明るくて、外の方が暗い爲に、はつきりと見分けられないが、白い小さな顏に見えた。そしてそれが確に見覺えのある樣な氣がしたので、私は目を反らさないで、寧ろ多少腰を上げてその方を一層よく見極めるやうな目附をした。と、その時、向うでも私をはつきり見極めたらしく、瞬間にギイと音を立てゝ扉が開いて、そこに現はれたのは、あの西向の友達の堀戸なのであつた。

「やあ！」と叫んで、私は驚いて立上つた。

堀戸は何年か前に見た時のままの、年取つてゐるとも、若いとも附かない顏を、恥かしさうに幾分か赤くして、昔ながらの女のやうな恰好で歩きながら、私の方へ歩いて來た。

「いつ來たんです？　どうして……」と言ひかけて、私は一寸口を噤んだ。私は咄嗟の間に、いつか山の發電所から彼や西向やと一緒に下りて來る途で、彼が東京に出たがつてゐる事、就いては私に何か彼が音樂の研究がさして貰へるやうな家に書生にでも、或ひは樂隊の一員にでも、彼を世話してやつてくれと西向から頼まれた事を思ひ出したのである。それにしても、もう二三ヶ月以上も、彼からも、西向からも、そんなにも山の消息を待つてゐる私に、何の手紙もくれなかつた私の不滿をも私は思ひ出した。が、考へて見ると、彼等の手紙を書くのは、彼等の町にゐるところの、今は私から直接に手紙を書くことの出來ない、私のゆめ子に書くやうなつもりで、即ち彼等の安否に事寄せて、彼女の安否を聞く意味に外ならぬのである、即ち又彼等からの手紙に、私は彼等の消息よりも、彼等の町とそして彼女との消息を讀まうとするのである。それに對して彼等が返事をくれなかつたからとて、私は怒る代りに、私自身の自分勝手を恥ぢねばならなかつたのかも知れない。だから、今、突然そんなところに現れた彼を見て、私は正直に言ふと、彼そのものではなく、彼を通して或ものを見るやうな思ひがして、甚だ心の勇躍するのを覺えねばならなかつた。

堀戸が言ふことを聞くと、彼は二三日前に東京に來て、昨日の晝私を訪問したのであるが、私の女房が玄關に出て、晝間は原稿で忙しいから、失禮だが、夜分に京橋のこれこれのカフエエに行つてくれ、そこに屹度私がゐるからと聞いて、それで今夜尋ねて來たものなのである。私がそれを今まで知

らなかつたのは、彼が來た時丁度私が一所懸命に仕事をしてゐた十分間ほどの最中ででもあつて、その時直に私の女房が私に傳へるのを遠慮して、そのまま忘れてしまつたものなのであらう。

「今、何處にゐるんです？」と私が聞くと、

「四谷區の須賀町の……」と彼が答へたので、

「ああ、あの西向君のゐた印判屋ですか。」と私は引取つて言つた。「君も判屋さんになつたんぢやないでせう？」

「ええ、私はあの、昨日から、神田區の、東洋音樂學校へ入學しまして、勉強することになりましたので、……」と堀戸は多少誇らしさうな樣子で言つた。

「さうですか、それや結構ですな。まあ、然し、その方の話は後でゆつくり伺ひませう。」と言つて、私はそこで彼を市木に簡單な言葉で紹介した。それからは私たちはいつとなく、山の話に移つて行つた。堀戸は私たちや西向のやうに、取立てて山が好きといふのではなかつたが、生れが信州の木曾で、諏訪で暮したり、島々に住んだりした事があるだけに、私たちと十分話を合はすことや、私たちの間に答へることが出來たのみならず、部分々々の話になると、私たちよりは無論よく知つてゐた。そして、彼は段々馴れて來ると、次第に雄辯になつた。だから、彼が最もよく話し、次が私で、やつぱり市木が一番無口であつた。堀戸の話に、夏はどうしても登山客のこぼれが諏訪あたりにも立寄るので、何となくごたごたしてゐて落着かないが、今はもうそれ等の人たちも殆ど影をひそめたから、私たちが出かけて行くのに最もいい時期である。もう遠い、高い山の上には白いものが見舞はれ出した。「先生、しかし此地はまだ夏のやうですね。信州ではもう朝晩はめつきり寒くなりまして、年寄りなどには炬燵を入れてゐるものがある位でございますよ。」と彼は言つた。

「私たちのやうな、山を見て樂しむものにはこれからの旅がいいですね。」とその時、ざつと三十分間も、何にも言はずに人の話を聞いてゐた市木が、傍から言つた。

その言葉は私に感動を與へた。その瞬間、私の長い間見ない、甲斐の山や、信濃の山や、彼女の町や、彼女の姿やが、涙をもつて眺める景色のやうに、濡れたやうな水々しさで、私の心に畫ぎ出された。

「一度、信州の方に一緒に旅して見ませんか？」と私が言ふと、

「ええ、行つてもいいですな。」と市木は珍しく熟のこもつた聲で答へた。

「西向君はどうしてゐます、ちつとも便りをくれませんが……？」と私は次に堀戸に向つて聞いた。

「ええ、」と堀戸は何だか曖昧な答へ方で、「西向さんは相變らず……ええ……音樂をやつて居りますんですが……」

「何か變つたことでもあるんですか？」

「ええ、いいえ、別にさう……」と堀戸は言葉を濁した。

私は無論、やつぱり何か變つたことがあるんだらうと想像した。で、その晩、堀戸と別れる時、明日の午後に遊びに來ないか、と誘ふと、學校の歸りに寄らうとの相手の返事だつた。私は一人で秋の夜更の道を歩きながら、西向にどんな變つたことが起つたのだらうかとか、あの山の町に變りはないだらうかとか、彼女はまだ藝者をしてゐるとのことだが、恙ないだらうかとか、そんな事ばかり考へられた。翌日起きても、それ等の事ばかりが繰返して考へられた。で、今日は仕事を一切念頭から捨てて、堀戸が來る迄、積極的にそれ等の事を縱に考へようと決心した。堀戸は間違ひなく、三時過ぎに訪ねて來た。さて、彼の話に、彼もこれ迄はただ話にだけ聞いてゐたのださうであるが、といふのは西向に、六七年前に別れた細君があつたが、彼女は、印判屋渡世で、それも思ふやうに發展せず、從つて始終貧苦に惱まされねばならなかつた西向との生活に愛想を盡かしてゐた折から、町に來た旅役者と戀に陷ちたのを機會に、夫を捨てて駈落してしまつた。西向が印判屋の店を閉ぢて、電氣會社の養成所に這入つたのはそれから五六ヶ月後のことで、すると彼が發電所に勤めるやうになつてから、誰から聞き傳へたのか、彼の逃げて行つた細君は彼の新しい住居に宛て、時々手紙を寄越したことがあるさうである。西向の發電所時代に友達になつた堀戸は、彼に以前さういふ彼を見捨てた細君であるといふことを、誰からとなく薄々聞いてはゐたが、その頃東京から、――西向

がそれに就いて聞かれても何にも言はないところの、然しどうも彼と深い關係のあらしい女から、時々手紙が來て、更に不思議な事には隨分無理な金の工面をして、その女に送つてゐるのさへ一二度見たことがあつたが、その女と、昔の彼の細君とが同じ女であるとは、思ひも寄らなかつた、と彼は言つた。

それ等の色々のいきさつは、西向が東京に一年餘り出かけてゐて、今度ふらりと元の町に歸つて來て、音樂の教授を仕事に始めるに就いて、同じく無職で困つてゐた堀戸が、彼と一緒に住むやうになつてから、折に觸れて見聞きして知つた事ださうである。といふのは、この新しい仕事に、西向が多少成功し出してから間もなくのこと、或る日素人女とも、と言つて藝者とも見えない、若い女が停車場からの俥に乘つて、彼を訪ねて來た。その女が、今言ふ西向の以前の細君で、彼女はその時から、ずるずるべつたりに住みこんでしまふやうになつた。そして、初めのうちは多少音無しくしてゐたやうであつたが、一週間、十日と經つうちには段々我儘になつて來て、昔やり馴れた通り、次第に西向をお尻に敷くやうな振舞をし出した。だが、西向はその氣の弱い性質から、初めは謂はば半分は居候であるところの堀戸に對して、彼女と同棲してゐることを氣兼ねしてゐるやうに見え、そして彼女が次第に我儘になつてからは、彼女に對して、彼女の餘り氣に入らないらしい堀戸の存在を、蔑ひ且つ遠慮してゐるやうに見えた。

さういふ中で、堀戸は西向とその細君との厭々喧嘩の仲裁に這入つたり、もつとも喧嘩と言つても、彼女の方から持ちかけて、西向を苛める行動に外ならぬのであるが、又或時は夜が更けてから彼女が彼に口汚く罵りかけてゐるのを壁越しに聞いたり、あれやこれやの行ひや言葉から、堀戸はこれ迄の西向と彼の細君とのいきさつを大方知ることが出來たのである。多分、彼女は以前はその町の或生絲工場の女工らしかつた、そして西向と夫婦になる迄にも、無論何人かの男と接してゐたらしい、西向と同棲生活の後も、例の旅役者と駈落する迄にも、やつぱり幾人かの男と交渉を持つてゐたやうだし、更に西向を捨てて、暫くその旅役者との關係がつづいた後、彼女が捨てたのか、彼女が捨てられたのか、又別れてから、或ひは大阪に行つたり、名古屋にゐたり、さては東京に行つたり、その間、無論、男なしには暮してゐなかつた。そして、その間、彼女がどんな生活をしてゐたか、それは人間以上の者でなければ誰にも分らない。それにも拘らず、徹頭徹尾西向はそれに就いて何の反抗もしなかつたのみならず、先にも言つたやうに、屢々彼女からの圖々しい無心の手紙を受取つて、苦しい工面をしてまでそれ等に報いてゐたのである。「餘程、あの人は惚れてゐるのに違ひございませんね。でないと、迚も出來ることぢやあございませんよ、と私は思ひますが……ね、先生。」と堀戸は私に言つた。それに答へて私は言つた。「だけど、幾ら惚れてゐると言つても、唯の惚れてゐるとか、甘いとかいふだけでは、それは出來ない藝當ぢやあないですかね。僕はそんな話を聞

いて、西向といふ人は、多少えらい人間ぢやあないかと言ふ氣さへしますね。」

だが、何にしても、その西向の細君といふ人は、可成りなヒステリイ病者に違ひなかつた。それは彼女が何年振りかで、今度西向の家に歸つて來てからの、彼女のいろいろの動靜に就いて、堀戸が細大洩らさず私に話したところに依つても、さう確める外はなかつた。さうして、私が堀戸と色んなことを話し合つてゐるうちに、いつか中西向が東京に來てゐたのは、無論、何か身を立てたい考へがあつてであることは間違ひではないだらうが、それと共に、それ等の彼の行動の裏には、彼女がゐたといふことの推量が十分に出來ることであつた。現に、それに就いて、堀戸が言ふには、西向が四谷の印判屋を出て、牛込で二階借をするやうになつたのは、彼女が彼を唆したものらしく、而も唆しておいて、到頭彼女は彼と同棲することを拒んだらしいといふのである。さういへば、その頃から彼が一層元氣をなくしてゐるやうに私にも見えたのは、多分その細君とのいきさつの結果だつたとも思へないことはないのである。彼はその不思議な女の爲に、始終腹の中で泣かされながら、山を見て歩いたのであらうか。そしてそんな女との惱みを人に（例へば私に）告白する代りに、山の話をしてゐたのであらうか。——

さて、彼の細君が來てから、堀戸は辛抱しいしい大方三ヶ月も西向の内に同居してゐたのであるが、次第に居辛くなつて來たのに違ひなかつた。だが、それを傍觀しゐる主人の西向は、その同居

人へと、自分自身の細君へと、卽ち堀戸の二倍分も、遠慮し、氣兼しいして日を送つたに違ひない。その證據に、彼は今まで決してそんな事はなかつたのに、弟子たちに音樂を敎へながら、時々うつかり樂譜を讀み違ふやうな事さへあつた。又、或日は細君がヒステリイの發作を起してゐる爲に、弟子が四五人も來てゐるのに、奥の方で何かどたばたと音する騷ぎをしてゐて、二時間以上も彼が顏を見せなかつたり、もつと甚だしい時は、弟子たちが待ちくたびれ、且つ當惑して、一人立ち二人去りして到頭悉く歸つてしまふ迄彼が稽古場に姿を見せなかつたり、だんだん彼は人氣を落していつた。或日、彼は細君が何處かへ出かけて行つた留守の時に、そつと堀戸に言ふには、――兎に角斯ういふ狀態では、誠に君に氣の毒でならぬ。それにしても、君のお蔭で斯うして隨分弟子も殖え、どうにか斯うにか今日を送つて行けるやうになつたのは、非常に有難い事に思つてゐる、ところで、君もいつ迄こんな所でこんな事をしてゐては、要するに自分と同じ位の人間になるのが關の山だ、君は未だ年も若いんだから、日頃の望みの通り、東京に出てはどうか。この内で御存じのやうな、ああいふ自分の細君の我儘を辛抱して暮してもらつたところが、君に何の得にもならない。さうと氣はつきながら今迄は十分見當が附かなかつたのだ、自分は見て見ぬ振をしてゐたんだが、どうだ、東京に出て見ないか、東京では四谷の斯う斯ういふ所に、自分の懇意な印判屋がある、そこに紹介して上げよう。そこから神田に斯う斯ういふ、割合に誰でも樂に這入れる學校があるから、そこへ行き給へ。その印判

屋での食料と、音樂學校の月謝とは、自分が屹度引受けた。その代り、小遣は自分から手紙でよく頼んでおくが、君もそこの主人と相談して、何とかその内の用事をして、それでこしらへてくれ給へ。ところで、いつの時でも金が着いても返事をくれないやうに、そして若し何か用事があつたなら、さうだね、内へ來る人の中で、さうだね、時計屋の永井君のところへでも二重封筒にして出してくれ給へ。いや〳〵、遠慮はいらない、その位のことは、君が骨折つて世話してくれた弟子の月謝の代からでも出來るんだから、決して決して遠慮はいらない。あんな、自分の細君のやうな女の犧牲になるのは、自分一人で澤山だ。自分は覺悟してゐる。間違つてあんな者と夫婦になつたのは、自分の惡運だとあきらめてゐるんだから、その惡運を君まで脊負ふ必要はない。いやいや、君、決して遠慮することはない、といふよりも、これは僕の方で頼みたい位なんだ、そして僕のと二人分勉强してくれ給へ。――

そして、二人はめそめそと女のやうに泣き合つたさうである。だが、實を言ふと、その話は、それを堀戸から又聞きした私の目にも、きゆつと鼻の上の邊が痛んで來た上に、幾ら堪へても、到頭涙を齎さないでは濟まなかつた。

その時分から、私と市木との坐つてゐる例の京橋のカフェエに、隔日か二日おき位に、必ず堀戸がその小柄の、女のやうな物腰をする姿を現すやうになつた。彼は木綿の双子か何かの縞の着物を、その小さい體にだらりと下駄が隠れる程に長く着込んで、無暗に帶を胸の上の邊に高く結んで、お辭儀する時には、必ず一寸首を曲げて、兩手を膝の上にそろへて、すべて女のやうな仕方で行動するので、例の目の小さい女給仕など、時々蔭で「厭味な人ね、女の腐つた見たいな——いけ好かない！」と言つた程だつた。

彼の話に依ると、あの山の町の、私の心の愛する藝者ゆめ子は、もう腹の子は十分六ヶ月以上にならうかと思へるのに、彼がその町を見捨てる時分までは、未だ確に藝者を止めてゐないとの事であつた。が、それに就いて、もう少し詳しいことを、西向に手紙ででも尋ねてやりたいが、と私が遠慮しいしい聞くと、藝者の動靜などを聞いてやる手紙を、彼の細君は甚だ喜ばない、それどころか、ヒステリイ婦人一流の邪推心を働かして、そんなことを彼に聞きに來る位だから、屹度彼もその藝者と何か怪しい關係がありはしないかといふ風に疑つて、私からの手紙にはこれ迄でも彼女が嚴重に監督して、彼に返事を出させないやうにしてゐる、との堀戸の話であつた。この事は、私に糧食の道を絶たれたといふ事を聞いたよりも、もつとの打撃に違ひなかつた。私は閉口して堀戸を前にしながら、それから五分以上も無言でぽかんとして、考へてゐるやうな狀態に陷つた位であつた。

もうその頃は、一方、私と市木直吉とでは、十年以上もの友達であるやうな、親密な仲になつてゐた。で、幾度も言ふ通り、これ迄に私が發表した彼女とのいきさつを書いた幾篇かの小説に就いて、その事實は色々に違へたり、又筋としても、半分以上も小説的空想を加へて書いたりしてはゐるものの、その根本の實感さに於いては、愚に見えるまでに私は私の正直な氣持を表現してゐたので、自然それ等の文章を讀んでゐた彼は、時々冗談のやうにして、私に山の女に就いて尋ねた。そして、私も亦、冗談のやうにして、その實は心に思つてゐることを、彼に明かしてもゐた。そこで「私も一度、今度君がその山の方へいらつしやる時にはお供したいものですな。」と市木は屢々言つた。「ええ、どうか。」と私は答へた。「どうせ僕は、彼女に會ふにしても、會はないにしても、一人ではどうしても變に氣恥かしくて行けないんですから、願つても一緒に行つて欲しいものです。」

さういふ風にして、市木その人も亦、冗談のやうにして、彼自身の目下の境遇に就いての嘆きを時々洩らすことがあつた。彼は彼の生活の元であるところの、相場の方でこの半年といふもの、損に損を重ねてゐるらしかつた。彼の例のぽつりぽつりとした言葉で、何日間かに渡つて、聯絡もなしに言つたことを綜合して見ると、彼は相場をやり始めには、細君の金をもつてしたのであるが、損をしたり、得をしたりしながらも、やつぱり計算して見ると、結局損をしてゐた、何故と言つて、二三年するうちには彼の細君の財産は悉くなくなつてしまつてゐたのだから。そこで、彼は細君の斡旋で、

彼女の親類や、彼女の知合ひの筋やから、少しづつの融通をしてもらつては、それで相變らずつづけてゐた、それも結局損をしてしまつた。何故と言つて、彼は今ではそれ等の人々からも最早融通してもらへなくなつて、彼自身で隨分ひどい工面をしなければならない狀態にあつたのだから。然し、それに就いて、彼の意見は、それは儲けたといふことは言へないにしても、考へて見ると、損をしたとは絶對に言へない、そんなことを言つたら罰が當る、何故と言つて、その何年かの間、彼と彼の細君と、そして三人の子供と女中との一家が、米を買つたり、着物をこしらへたりして來たのであるから、つまり借りた金を殖やすことは出來なかつたにしても、それ等の金で彼の一家が暮したことになるのだから。「結局相場では得も損もしなかつたといふ勘定になる譯ですよ。」と最後に彼は言つて、彼の癖で、口の端に深い皺を寄せて、そこだけで笑ふ笑ひ方で笑つた。

そのうちに、彼は秋の末頃からは、月末と、月の五日と、それから十五日とに限つて、そのカフエに姿を見せなくなつた。何氣なく私がそんな風に彼の休む日が極まつてゐるとは知らずに、どうして來ないのですか と聞くと、彼は「いえ、借金取がこのカフエにゐる事を知つてゐるものですから、」と答へた切りで、後はその頃の彼の癖の、旅行をしないか、旅行先は何處がいいでせう、といふやうな話ばかり、それもぽつりぽつりと嚙むやうに言ひかけた。私も春以來外に出たことがないので旅の心が甚だ動いてゐたところだつたから、堀戸を度外視して、彼と熱心にいつ行かうといふことの

一寸も定らない旅に就いて、そこの壁にかかつてゐる鐵道省のポスタアの日本地圖を卓子の上に下ろして來ては、その上に二人の頭を近々と竝べて、中學生のやうに熱心に話し合つた。そこで、私たちの間に、例へばこんな話が出たとする。「身延山といふ所へ行つたことがありませんか？」「ありません。」「身延山は何だけど、あの隣の七面山といふ山に登ると、甲州の盆地が目の下に見えて、甲州の山々の展望が可成りいいさうですね。」——すると、それから二日後か、三日後かに、私が彼とカフエの卓子に向ひ合つて、一寸目禮をし合つた後、二言三言何か話してから、暫く經つて二人とも稍々ぼんやりした時分に、市木は相變らず無言のままの狀態で、懷中から二三枚の原稿紙の綴ぢたのを私の前に默つて突き出すので、私が何だらうと思つてそれを開いて見ると、

「東京發、午後十一時　車中一泊。
「富士着　翌午前四時頃　乘換。
「身延着　同七時頃　三門迄一里二十町、俥或ひは馬車にて三十分、自動車の便もあり。
「身延山久遠寺着　同八時頃。
「七面山　久遠寺より約五里、山頂の七面堂にて一泊。
「七面山發　翌午前六時。
「身延着　正午、晝食。

「身延發午後一時。馬車、俥、或ひは自動車等の便に依つて、富士川の景を賞しつつ、その日の夜甲府着の豫定。

「甲府發　翌日正午頃の汽車。

「東京新宿着　夕方。

ざつとこんな風に、一字も消字のない丁寧な書體で、原稿紙に認めてあるのである。

「東京より身延まで、汽車賃八圓十二錢、車中の朝辨當四十錢、茶八錢、計八圓六十錢。

「身延より三門まで　俥賃一圓。

「富士川橋賃往復　十錢。

「身延山晝食　一圓五十錢。（茶代を含む）

「七面山一泊料　三圓五十圓。（前同）

「身延町晝食　二圓。（前同）

「身延より甲府迄の馬車賃約八圓。（稍々不明）

「甲府一泊料六圓。（茶代、女中祝儀を含む）

「甲府花代　六圓の豫定。

「甲府より東京まで　三圓九十二錢。

「晝食　汽車辨當（茶を含む）四十八錢。

「雜費　十錢。

「總計　五十一圓十錢。

そして、最後に一枚の原稿紙に、その旅程の大體の略圖を書いたのが添へられてあつた。

私はこの鹿爪らしい顏の、哲學の研究者で、同時に無口な相場師であるところの男が、いつどんな暇に、どういふつもりで、斯ういふものを書くのかと思ふと、幾度か口元に微笑が浮かんで來て、それを抑へるのに苦心したか知れない程であつた。

「この甲府一泊代の次にある、甲府花代といふのは何ですか？」と私は略々見當が附かないこともなかつたが、念の爲に聞いて見ると、

「それは藝者です、多分一人前その位あればいいだらうと思ふんです。」と市木は笑はずに答へた。

「はあ、藝者代のことですか、」と私も笑はずに斯う言はねばならなかつた。

そして私たちは、この身延から富士川を遡るのは面白い道でせうね、甲府から見ると、この七面山といふ山は實にいい恰好に見えるさうですね、などと言ひ合ふだけで、結局、いつの時でも、それを實行に移さうとは何方からも發言したことはなかつた。そして又十日か十五日もすると、「甲州御獄へ行つて、あそこから下黑平、增富といふ順序で行くと、木賊峠の展望がいいさうですね。金峰

山が直側に見えて、それから遠くに富士山が眺められるさうです。」「金峰山といふやうな山なら、僕たちにも登れないことはないでせう。」「いや、金峰山とか、國師とか、甲武信とか、却つてあの位の山が一番登りにくいと言ふぢやありませんか。」そして、そんな話の出た後は、屹度その三日か五日の後には、市木は例の道順と、費用と、それから略圖とを丁寧に原稿紙に書いたのを持つて來ては、それを默つて卓子の私の目の前に置いた。

その時分から、堀戸がだんだん私たちのカフエエへ顏を出す度數が少なくなつて、初めのうちは大抵一日おきに來てゐたのが、二日おきになり、三日くらゐ中をおくやうになり、近頃では一週間に一度位しか來なくなつてしまつた。無論、晝間私の家に顏を出すことなど滅多になかつた。稀にカフエで會つた時、私が、「どうです、學校の方は？」と聞くと、「ええ、大して面白くございません。」と餘りはつきりしない聲で彼は答へた。

初めのうち、彼は東京に來たことだけで、而も田舍にゐた頃には思ひも寄らなかつた、そんな音樂の學校に這入つたといふことだけで、如何にも有難いことのやうに喜んでゐたのに、そんな風な口をきくやうになつたのは、僅の間に隨分變つたものである。それは所謂墮落したのかとも思はれるし、或ひは又進歩したのかとも考へられた。で、それとなく注意してゐると、彼は時々音樂を一所懸命にやつたところが、餘程の天才でもない限り、それで身を立てるといふことは、田舍で西向さんの

やうにやれば兎に角、東京で暮して行くなんて、迚も見當が附かない、どういふものでございませう、と彼の年頃の、彼の境遇の青年によく見るやうな、前途に對する不安を洩らしたり、かと思ふと、印判屋の半分居候のやうな境遇に對する不平をこぼしたり、さては東京で一番安い下宿生活をするには、どの位の金がいるでございませう、といふやうなことを尋ねたり、要するに可成り氣持が動搖してゐるらしかつた。

或晩、もうそれはいつの間にか冬の季節が來てゐたのだつた、私と市木とが向ひ合つてゐる四角な卓子の、空いてゐる一方の側の椅子の上には、罅の入つた瀨戸の火鉢が載せてあつた、私たちはいつもの通り默つて、私は紅茶ばかり馬のやうにがぶがぶ飲んでゐたし、市木は、一日にどうしても數島を四袋すふと言つてゐた通り、煙突のやうに煙を吹き出してゐた。そこへ新しく私達に紅茶を運んで來た、昔ながらの目のくしやくしやした女給仕が、次手に火鉢の火を調べながら、

「此頃はあの、何さんと仰有いましたつけね、女のやうな人、さうさう、堀戸さん、ちつともお見えになりませんのね？」と言つた。

「ああ、來ないやうだね、何處かもつといい所が見付かつたんだらう。」と私は言つた。「ここは堀戸君のやうな若い人は向かないよ。」

「ぢやあ、あんた方は年寄り？」

「さうだよ、まあ中老だね、ここはその中老のうちでも、僕等のやうに一風變つた人間でなければ來ないんだよ。」

その時まで相變らず、默つて煙をぷかぷかと吹き出してゐた市木が、突然私に向つて、

「堀戸君が二三日前に僕んとこへ來ましたよ、僕が未だ寢てるうちでした。」

それを聞いて私は、此頃堀戸は私の家に一寸も來ないのに、市木の内に行つたことが、多少不愉快に思へたが、

「さうですか、相變らずですか？」と聞いて見た。

「ええ、相變らずでせうな。然し、此頃、あの人は少し遊蕩でもするやうですな。」と市木が言つた。

そして、それからも幾らか堀戸に就いての話が出たやうに思ふが、何分相手が市木のことなので、大して發展しなかつた。そのうちに私の方から話題を變へて、彼が卓子の隅に載せてゐた、可成り容積張つた、何かの買物の紙包みらしいのを指さして、

「今日も亦、何か玩具ですか？」と聞くと、

「ええ。」と彼は答へた。

何故私が買物の包みを見てそんな事を聞いたかといふと、彼は三日に上げず、それは此頃の彼は隨分貧乏らしいにも拘らず、始終さういふ買物の包みを下げてゐて、それがいつの時でも彼自身のもの

でもなければ、彼の細君のものでもなく、即ち彼の子供への玩具だつたからである。のみならず、彼は上の九歳になる子は言ふ迄もなく、二番目の七歳になる子、三番目の三歳になる子などを、別々に、例へば私が自分の所有の何本かのステッキを、その時その時の氣の向き方で、その中から選び出した一本づつを持つて來るやうに、彼は任意にその第何番目かの子を連れて、カフエエに來ることがあつた。子は男の子も女の子も皆彼に似てぎよろりと光る大きな目を持つてゐた、そして二番目の女の子を除いては、子供ながらに彼に似て、みんな口數の少ない、音無しい子供であつた。彼はそんなに可愛がつてゐるやうに見える子供を連れてゐる時でも、やつぱり無口であることは、子の代りに買物の荷物を携帶してゐる時と一寸も變らなかつた。

「君は、」と或時彼は私に言つた。「君の小説で拜見しますと、厄介者がおありにならないやうですな。」

「厄介者つて……子供のことですか？」

「さうです。」

「ええ。子供があるといいでせうね？」と私は言つた。それは未だ夏の時分だつたので、「子でもあれば、僕は蠅なんか取つて日を暮すことは止めるでせうがね。」

「ですけど、坊さんの言ひ草ぢやありませんが、此奴は悟りの邪魔になりますよ。」

「ぢやあ、やつぱり蠅を取つてゐる方がいいんですかね？」と私が半分笑ひながら言ふと、
「さうですとも。」と彼は相變らずにこりともせずに、「蠅を取ることでも、三年もつづけてゐたら、石の上の達磨大師と同じことで立派な修養でせうからな。」
「所謂子は三界の首械といふ諺ですかね。」
「子に限らず、物を所有するといふことが抑も皆いけませんな。それも大事なもの、高價なもの程いけないやうですな。」
「なる程、さういふ點で、子は我々の所有品の中では一番大事で、一番高價なものでせうね。」
「君のステッキもなかなか高價らしいですな。」と市木はそこで初めて、その口の端に皺を寄せる笑ひ方で、少しばかり笑つて言つた。
「如何にも、このステッキでも、成程、悟りの邪魔になるやうですね。ハ、、、、。」
だが、子の話になると、私の心は二重の物思ひに沈まねばならなかつた。それは私に、今や第二番目の子を腹に持つて、山では最早人々が炬燵に親しむ頃であらうから、お座敷の炬燵か、我が家の炬燵か、兎に角、その傍で行儀よく俯向いて坐つてゐる藝者ゆめ子の肖像が浮ぶのである。それは又、子を持つて難儀してゐる彼女と共に、子のない故に内の空氣が荒つぽくなつて、それが市木の所謂達磨の道かも知れないが、いつも多の景色にあるやうな私自身の家庭の境遇をも想起させるのである、

私の一番上等のステッキでも、その外どんなよい持物でも、それ等の足下にも追付かない程高價なものであるところのものを、私たちが持たないといふ寂しさに襲はれねばならぬのである。
「だが、君にはこんな厄介者の代りに、君の小説によく出て來るゆめ子といふ人があるぢやありませんか？」と或時哲學者の市木が言つた。「あれは君のやうな考へ方の人には、つまり、私は君を浪漫派と見てゐるのですが、如何です？　あの人こそ、君には最も大事な、最も高價なものぢやないですか？」
「恐れ入りますね。」と私も、多分彼の笑ひ方に似てゐたに違ひないやうな、微笑を浮べて言つた。
然し、實のところ、私は彼に言はれる迄もなく、私はその通りに考へてゐるのである。子供らしいことを言ふやうだが、子は死ぬこともあるだらうし、所謂色戀なら醒めることがあるだらうし、夫婦となれば別れることもあるだらう、だが、私が山の彼女を思ふやうな思ひは、彼女が一ダースの子の親にならうが、人の妾にならうが、或ひは彼女が死んでしまはうが、私自身が墓に旅せぬ限り、消えることはないであらう。——

或日、何月振りかで山の西向觀山から手紙が來た。

「長々御無沙汰して居りますが、お變りはありませんか。今年は隨分寒い冬になりさうで、もう一ヶ月もしたら湖水も凍つてしまふでせうと存じます。山の雪もいつもの年から思ふと、ずつと多いやうに思ひます。（中略）堀戸君にお會ひですか。私も一度東京に行きたいと存じて居ります。（中略）昨日の新聞にこんなのが出て居りましたから、切拔いてお送りいたします。」

その切拔きといふのは、一段六七行の小さい紙片だつたので、封筒の底にくつ附いてゐて、なかなか見付からなかつた位だつた。田舍新聞によく見る通りの、磨り減つた五號活字で、それも何か外の記事の間に、それだけの五行分か六行分かを、二本の線で仕切りをしたもので、「藝妓廢業、諏訪町二業藝妓、夢の家の娘、ゆめ子事、丸見あい（二十三歳）は昨日限り廢業屆を出した。原因はまめ太鼓の爲なり。」と讀まれた。この拙い、不愉快極まる文章の記事ではあるが、私は長い間弓破ることを忘れて、それはこれ迄私は人の噂や、或ひは堀戸や、西向からの手紙で既に聞き知つてゐたことで、決してそれを疑つてゐる譯ではないのだが、今この不鮮明な、磨り減つた五號活字の表現に依つて、最後の宣告を聞かされたやうな氣かして、暫くの間氣の拔けたやうな狀態に陷つた。――まめ太鼓とはどういふ言葉であるか、兎に角腹が大きくなつた事を言ふのであらうか。更に私に一種の感慨を持つて來たのは、泥坊や身投やの新聞の記事なみに、彼女の名前の下の（二十三歳）といふ註であつた。私が初めて彼女に會つた時、彼女は二十一歳であつた。だから、今二十三歳、そしてもう四

十日もしたら、年が明けて二十四歳になるのは當然の事に違ひないのであるが、女の二十一歳と二十四歳とでは、何といふ違つた感じであらうといふ感想ばかりでなく、その新聞記事にもある通り、夢の家の娘分でもあり、同時に殆ど主婦の位置でもある彼女は、最早二人の子を持つて、二十四歳にもなつて見れば、今度藝者を止めたら、もう永久に藝者になる事を止めはしないだらうかといふ心配であつた。それに、昨日までは、せめて呼ばない迄も、その町に出かけて行きさへすれば、夜の町を褄をとつて歩いてゐる彼女を見るかも知れないと思つて、一縷の希望をつないでゐたのであるが、今日からは、彼女はもうその大きな腹を持つて、彼女の家を一歩も外に出ないだらうと思ふと、折角山の國に行つても、悲しみを買ひに行くに過ぎないであらう、と私は嘆息しなければならなかつた。

私はその晩、いつものカフエで市木に會つた時、出來るだけ自分を抑制した、直接法でない言ひ廻し方で、彼に今日の打擊の感じを打明けた。すると、彼はその持前の、口數の少ない、出來るだけ簡單な言葉で、私の言ふことに合槌を打つた。然し、言ひ終ると、私は又自分の言つた事に甚だ極りの惡さを覺えたので、彼がいつ迄經つても、五分間目に一度か、十分間目に三度位の割合で、ぽつりぽつり忘れた時分に、突然「君の永遠の女性も、新聞記者に掛つちやかなひませんな。」とか、「ゆめ子事、何の某（二十三歳）は不愉快ですな。」とか、「まめ太鼓とは可笑しな言葉ですな。」とか言ふので、私はその話題を變へる爲に心の中では決して不愉快ではなかつたが、隨分心を苦しめなければ

ならなかつた。すると市木は最後にこんなことを言つた。「考へて見ると、君と私とでは位置顚倒ですな。君の煩悶の方が哲學的で、私の苦勞の方が小說的ですよ、今のところ……」

私は、いつ頃からか、彼の笑ひ方が傳染してしまつて、その時も口元で笑ふことで答へた。

「どうです？」と彼は又二三分經つてから、多少附元氣に聞える聲で、「一度思ひ切つて、机上のでなしの旅行をしようぢやありませんか？」

「行きませう、是非。僕もつくづく此頃旅に出たいと思つてゐるのです。行くとすれば何處がいいでせう？」

「行くとすればやつぱり山がいいでせう。」と彼は言つた。

「遠慮は入りませんよ、信州に行かうぢやありませんか？」

「ええ。」と私は多少恥かしさうに、然し肯定の意味で言つた。「もう山には雪が深いでせうし、今年は殊に寒さが嚴しいといふことですが……」

「然し、雪國とか、例へば諏訪のやうな謂はば氷の國とかに、夏行つたつてつまりませんよ、冬の國は冬行つた方が面白いぢやありませんか？」

「それやさうですね。」と私は出來るだけ嬉しさを隱して合槌を打つた。

それから確か一週間も經たない日のことだつた、何故と言ふに、その晩、私たちはいつもの卓子の上に、市木がこしらへて來た、信濃行の旅程と費用との見積り書を置いて、今迄になく珍しく二人とも氣が合つて、それに就いて二人で意見を戰はしたのを、私は覺えてゐるからである。

「東京飯田町發　午後十一時。

「木曾福島着　翌午後一時或ひは三時頃の豫定。天候の都合に依つて、鹽尻下車、約一時間半附近散歩。日本北アルプス展望。

……例に依つて、例のやうな、彼獨得の、恐らく先づ文案をこしらへて、それを小學生のやうな丹念さで淸書するのであらうと思へるやうな、丁寧な書體で原稿紙に書いたものを、私たちは遠足に行く前の小學生のやうな熱心さで讀み、尋ね、敎へられして、時の移るのを忘れた。彼のその計畫書に依ると、先づ車窓から冬の木曾街道を樂しみながら、木曾福島に行つて一泊する。それから松本へ戻つて、蟀便鐵道で大町まで行つて、そこで一二泊する。「途々、穗高、鎗、或ひは有明、それから大町に行けば白馬、みんな雪で眞白でせうからね、見てゐて目が痛くなるやうな景色に違ひありませんよ。君は机上の山嶽通だから、知つて居られるでせうが、有明といふ山は實に恰好のいい山ださうですね。信濃なる有明山を西に見て心ほそのの道を行くめり、といふ西行法師の歌がありますね、西行法師などと言ふ人は隨分歩いたものなんですね。」と彼は私が初めて見た程、興奮して、雄辯になつ

てゐた。さて、大町から松本に歸つて、淺間溫泉で一泊するか、都合に依つたら妙高山の麓の赤倉溫泉に一泊するか、然し多分赤倉は又の機會にして、愈いよ諏訪に行つて、……

「諏訪着　午後五時十分。滯泊日數任意、宿泊料不定、花代不定。

「飯田町着　午前五時二十一分。」と認められてあつた。

「長い間、君の小説でだけ見てゐた人を、――ゆめ子をいよいよ見る機會を得ましたかね。」と市木は珍しい雄辯さで續けた。「ああ、さうさう。あの人は今藝者を止めてゐるんでしたつけな。然し何にしても、君の憧憬の國と、いや、私にも憧憬の國なんです、そして君の憧憬の町に行けると思ふと、實に愉快ですな。」

その晩の十一時半頃のことだつた。私の位置が斜めに表の入口の方を見る位置にあつたので、私が何かの話半ばに、何氣なしにふと入口の方に目をやつた途端、そこの硝子の扉の向うに、變な、見知らぬ男が立つてゐて、その男が頻りに私を手招きしてゐるのを發見した。私は初め、それが私ではなくて、市木を呼んでゐるのだらうと思つたので、彼に注意して見たが、彼もその方を見て知らないと目附で言つた。その男は私たちが彼の方を見ると、急に顏を引込めたり、又その方が氣に掛つて私が顏を上げると、頻りに手招きを繰返してゐるのである。もう可成り夜更けの事ではあり、そんな人通りのない裏町の事であり、そんな硝子戸に見知らぬ男の、暗い、陰の多い顏がちらちらと覗いて手招

きするのでもあり、私はひどく氣味惡さを覺えたが、どうやら私を呼んでゐるらしいその男の手招きを見ながら、知らぬ顏をしてゐる譯にも行かなかつたので、勇氣を出して、戸の外に出て行つた。

私が扉を内から開けると、その男はそこから一間ほど離れた外にゐて、尙も手招きをつづけた。それは鳥打帽を被つて、筒袖らしい着物を着た、然し一見色の黑さうな、目のぎよろりとした男だつた。而も先程からの彼の行動が、手招きに依つて、だんだん私を何處かへ誘ひ出すやうにも思はれるので、私は更に一層氣味惡くなつたが、思ひ切つて一二歩その方に歩き出した瞬間に、ふと刑事ぢやないかな、といふ氣がした。だが、何の用あつて、刑事が私に？　と思ふと、益々氣味が惡くなつた。

その男は果して刑事だつた。彼は私に鑑札を見せて、カフエエから二三間離れた家の軒かげに私を連れて行つて、割合に丁寧な言葉で私を不意に呼び出した失禮を詫びてから言ふには、實は、あそこのカフエエの二階で連日大勢の者が賭博をしてゐる、今夜彼等を一人殘さず捕縛するつもりで、もすつかり手筈を終つたのであるが、その時、罪のないあなた方に怪我でもあつてはいけないから、一寸注意しておきたい、就いてはあなたの友達の市木さんにも、譯を何にも言はないで、いつも歸る時のやうにして、誘つてあそこから出てほしい、あなた方が出るのを合圖に攻めかかるから……

私がどんなに驚いたかは言ふ迄もない。流石、探偵だけに、話の最中に、私の名も、市木の名も既

に知つて、それを出したのも氣味惡かつたし、話最中に私が氣が附いたのであるが、彼方の家の蔭にも、此方の軒の蔭にも、丁度米騒動とか何とか言ふ、ああいふ場合の警官のやうに、帽子の頤紐を下ろして、サアベルを音のしないやうに、要所要所を紐で縛つて、更に物々しく見えたことには、いづれも皆脚絆に草鞋穿きであることだつた。どんな同盟罷業とか、政治騒動の時にでも、こんなに彼等が私に所謂武裝して、攻擊的な樣子に見えたことはない。さういふのが、蠅のやうに何人となくその邊にこそこそと、戰爭の始まる前の氣色で動いてゐたのであつた。

私は明かにがたがた震へながら、一刻も早く市木と一緒にこの場を逃れようと思つて、刑事に挨拶して一二歩行きかけてから、ふと思ひついて、後戻りして、「あの、カフエエの番臺の男や、女給仕にも何か知らせてやらなければいけないのですか？」と聞くと、

「しッ！」と刑事は私をたしなめて、「彼奴等もぐるですから、決して彼奴等に言つちやいけませんよ。あなたは唯默つて、市木さんと一緒にあそこを出て下さい。」

私はカフエエに歸つて行きながら、成る程、さういへば、今し方ある刑事が扉から覗いて私を手招きした時といひ、さては考へて見ると、堀戸が初めて私に會ひに來て、やはり扉から覗いた時といひ、いつの場合でも、あの番臺の男が變にぎよつとした恰好をしたことなどを思ひ出した。私はもう恐くなつて、その入口から足が中に進まないものだから、扉を半分開けて、「市木君、市木君！」

と呼んだ。すると、市木は變な顏をして戸口の方に出て來た。が、市木の後を追駈けるやうにして、例の番臺にゐた、白服の男が私の方へ駈けつけて來たので、私ははつとして、思はず表の方へ二三歩後退りした。そして市木がそのギイと鳴る扉を先に出るとそれの閉まらないうちに、白服の男が出て來るのと、何處に隱れてゐたのか、先の刑事が突然飛び出して來て、その白服の男の手を摑へたのと、交字通り間髮を入れなかつた。

その時が、丁度讐へば爆裂彈で言ふと、火を點けた時であつた。もう武裝した警官隊は八方から攻擊を開始したらしかつた。一瞬間後の、そのカフエエの二階の騒ぎと物音とは、私の樣な氣の弱い者には、事の譯を知つてゐなかつたら、腰を拔かしたかも知れなかつた。表口から飛び込んだ五六人の警官、いつの間にか兩側の屋根の上に現れた數人の警官。——そして、多くの賭博者等は、普通の心理として裏の方へ逃げたらしかつたが、裏の方は私たちが見てゐた表の方より、一層警戒が嚴重だつたらしい。表の屋根からは一人飛び下りて捉まつたのと、カエフェの土間の方へ出て來て捉まつた者と、例の女給仕と、そして先の白服の男と、合してたつた四人だつた。

それから、私たちは、二人とも各々足を震はせながら、その場を去つて、京橋の橋詰のところで、二人とも氣拔けしたやうな狀態で、「ぢや、さよなら、」と言つて夢中で別れたのであるが、その晩、そのカフエエの二階で賭博してゐて捉まつた中に、かの市木の中學友達で、蠅取杖の發明者で、今

は行方不明になつてゐた筈の、赤木某がゐたといふことを、私は後になつて聞いて、一層驚いたことがある。赤木某といふのはどんな男だらう、とその話を聞いた時、一時間ばかりといふもの、私はいろいろに想像したことを覺えてゐる。

そして十二月の二十日過のことであつた、私の家の玄關に突然西向觀山が立つた。一見して、私は彼がひどく憔悴してゐるのに驚かされた。裝は私が彼に最後に別れた時分とは違つて、秩父大島か何かの、新しい對の着物を着て、手に傘杖などを持つてゐたが、その肉體から言ふと、例へばこの前の時は物質的の營養不良の爲に衰へてゐたのだとすれば、今日の彼は何か心の非常な病氣の爲に衰弱してゐるやうに思はれた。

「いつ來たんです？」と私は座敷に通してから尋ねた。

「昨日の朝五時に着きました。」と彼は答へた。

「ぢやあ、昨夜は四谷の印判屋さんの家に？」と聞くと、

「ええ、その……一寸……」と彼は曖昧な返事をした。

「堀戸君に會ひましたか？」

「ええ、その事なんでございますが、」と西向は久し振で、その恥かしさうに腕で頸を卷くところの當惑さうな表情を私に見せながら、「先生、市木といふ方を御存じでございませう。昨日私は此地に參つて、四谷へ行きましたところが、堀戸が半月程前にそこを引上げて、麻布の斯う斯うした所の市木さんといふお家に、御厄介になりに行つたといふことを聞いたのでございます。」

「へえ！」と私も少し驚いて、「何でも堀戸君は近頃大分遊ぶといふやうな話も聞きましたが……」

「ええ、それはあの男、田舍にゐる時分からなんでございます。」と西向は別に驚かない調子で言つた。「もつとも、此方へ來てからは少し激しくなつたらしいのですが、そんな事は兎に角、學校まですつかり怠けてしまつたのは困つたものでございますよ。やつぱり東京は、恐いところでございますな。堀戸君なども田舍にゐた時分から遊びはしましたが、さう、その爲に勉强を怠るといふやうなことはございませんでした。」

「それで、君は市木君のところへ行つたんですか？」と私は聞いた。

「ええ、此方へ參ります前に、一寸伺つて來ましたんですが、市木さんには、お目に掛りませんでした、未だお寢みになつて居られましたので……。先生は一度も入らしつたことがないんださうでございますね、隨分廣いお家でございますよ。二階が確か六疊と八疊と四疊半とになつてゐるとか聞きましたが、私はその六疊のお座敷で、堀戸と會ひましたんです。堀戸は弱つて居りました、彼も氣のい

い男なんでございますからね。私に會はす顔がないと言つて、あの男は女のやうな形をする男でございましたでせう、私の顔を見ると、袖を顔に當てて泣き出したんですよ。學校を怠けましたのは、もう三ヶ月も前からなんださうでございますが、此の頃では、月謝も何も納めないもんですから、行かうにも行けないんださうでございます。初めは何でも四谷の家の職人に誘はれて、遊びを覺えたものらしいんです。ところが、覺え出しますと、職人の方では休の日が極まつて居りますから、よくよくの事でもなければ、さう出たくも出られませんが、あの男はまあ謂はば學生見たいなものですからつい暇があるでございませう。然し、それに何よりも小遣に困つたらしいですな、元々小遣だけは自分で稼ぐ約束になつてゐたものですから……」

西向は話の要所々々に來ると、まるで自分自身の事のやうに恥づかしさうな樣子をして、更に話し續けるには、――堀戸は根が小器用な男なので、田舍にゐた時分にも、西向から教はつて、多少判を刻む眞似事ぐらゐは出來たので、彼は四谷に來てからは三文判とか、安物判とかを刻んで、小遣を稼いでゐた。ところが、一旦遊びを覺えてからの彼は、もう音樂を稽古することも、學校へ行くことも、悉くそつち除けにして、朝から日が暮れる迄、外の本職の職人が驚くほど、一所懸命に判を刻み出した。それは、まるで、音樂を修業に來たのか、判を刻みに來たのか、主客顚倒の形になつてしまつた位で、卽ち彼は毎日毎日、日のある間は小遣錢を稼ぐことに、卽ち夜の遊びの資にす

る爲に、出來るだけの速力で判を刻んだのださうだ。そのうちに、その家に居辛くなり、外の職人たちにも厭がられ、無論遊びの相方の女にも、はつきりと輕蔑せられ出し、どうにも斯うにもやり切れなくなつた結果、これまで二三度尋ねたことのある市木を訪問して、賴んで居候に置いてもらふ事になつたらしいといふのである。

「堀戸君はこれ迄にも時々市木君のところへは行つたやうですが、僕のところへはちつとも顏を見せないんですよ。妙ですね。」と私が言ふと、

「私も一寸そのことを言ひましたんです。」と西向が例のきまりの惡さうな表情で言ふには、「すると堀戸が言ひますのに、どうも先生は何となしに恐いやうな氣がして、お伺ひしにくいんださうでございます。先生、一體、市木さんといふ方はどういふ方なんでございます？」

「どういふ人つて……一寸、一口に言へませんがね、」と私が當惑して言ふと、

「兎に角、御深切な方に違ひございませんね。いろいろ誠に有難う存じます。今日は今も申しました通り、市木さんに御目にかかれませんでしたが、一度先生がお出でになる時にでも、お供さしていただけませんでせうか？」

「ええ、僕も一度遊びに行つて見たいと思つてますから、その時一緒に行きませう。で、堀戸君はこれからどうしようと言ふんです。又學校をやり直すつもりでもあるんですか？」

「さあ、今日、私が會ひました時には、もう國に歸りたいやうなことを言つて居りましたが……」

その話の間に、「君の方は？」と私は幾度彼に聞かうと思つたか知れなかつたが、私が思ひ切つてそれを言はうとする時に限つて、彼がそれを感じて避けようとするのか、或ひは偶然にさうなるのか屹度何か新しい話に移つた。

「先生、四五日前の晩のことでしたが、私は胸のくしやくしやしたことがありましたので、諏訪へ行きまして、久し振りで湖心亭で一杯飲んで、もう十時過ぎでしたが、岡谷に歸る汽車の時間の都合でぶらぶら町を歩いてゐたと思召して下さい。大分酩酊したものですから、あの角屋旅館の前を北へ歩いて行きまして、夢の家の前から、發電所の山へ行く道の方へ、醉を醒ますつもりで、一二町も歩いて行つたりしました。あそこは御承知の通り、諏訪の町と湖水とが直左手に谷底のやうに見えるところでございませう。だものですから、寒い風がピユウピユウ吹いて來まして、如何に酩酊してゐましても、二町と歩いてゐられないのです。で、ぶるぶる震へながら、又町の方へ引き返して來ますと、その時どうしたのか夢の家の入口の戸が開いて居りましてね。あそこの家は先生も御存じかも知れませんが、變な建て方でして、門の中が一寸した庭になつてゐて、直、丁度芝居の舞臺の家のやうに、二間間口ほどの、四枚の障子の嵌まつた部屋が見えますんでございませう。あの障子は、先生、子供がゐるからでございませうが、破れてないのを見たことがない位ですが、丁度そこを通りました時、

あのゆめ子さんの男の子が、その破れた障子に捉まつて、あーあー、と何だか頻りに分らないことを言つて、障子の破れから表を覗きながら叫んでゐるのでございます。多分ゆめ子さんが何か用事で外にでも出て留守だつたのか、おばあさんがゐないので呼んでもゐたんですか、あーあー、とまるで侶律の廻らない、失禮な話ですが、動物見たいな聲で叫んでゐるのです。いえ、話はそれ切りのことなんですが、あの子は、先生、もう明けて四歳になるんださうでございますが、後で人に聞いたんですが、未だあのあーあーといふ言葉より外に、何も言へないんださうでございますね。……」

やがて、彼が歸り支度をした時、私が何氣なく、もう一度、

「君は何處にゐるんです、ああ、さうさう、四谷の家でしたね？」と聞くと、

「ええ、一寸、その……」と彼は狼狽したやうに言つて、「又近いうちにお邪魔に上ります。あのお伺ひしてもいいでせうか？」と言つてから、どういふつもりか、「それからあの堀戸も一度近いうちにお詫に上ると申して居りました。」と附け足した。

そして、彼は歸り際に、玄關のところで、「あの、これ……」と言つて、彼一流の土產物のやうな新聞包を置いて、逃げるやうに歸つて行つた。それは可成り上等の半巾が半打と、白粉が二瓶とを別々に白紙で卷いて、水引を掛けたもので、私と女房への贈物のつもりらしいのだ。

すると、その翌々日、ひよつこり堀戸がやつて來た。彼は初めの二三分は餘り長い間訪ねて來なか

つたことや、私に内所で市木の内に居候してゐたことや、いろいろと私にきまりの悪いことがあるので、その小柄な、女のやうに振舞ふ身體を、一層小さくして恐縮してゐる樣子であつたが、直に持前の、變に音無しやかな圖々しさと雄辯とを發揮して、

「先生、ゆめ子さんは到頭引いたさうですね、もつとも、もうお腹の子は七ヶ月とか八ヶ月とかになるさうですから、來年の夏頃になつたら又出るでせうと思ひます。ええ、それや屹度出ますよ、何しろ未だ若いんですし、それにお母さんといふ人が隨分嚴しい、何方かと言ふと、因業な人ださうですし、それやもう屹度出ますよ。」などと、彼は私を喜ばせるやうな事を言つた。

「西向君にそれから會ひましたか？」と私が話題を變へるつもりで聞くと、

「ええ、今日も一寸會つて參りました。」

「何處にゐるんです、やつぱり四谷ですか？」と私は大した意味もなく、そんなことを聞いて見た。

「いえ、あの人はあんな遠慮深い人ですから、新宿一丁目の甲信館といふ宿屋にゐるんださうでございますよ。それには、もつとも、かみさんが追駈けて來るかも知れないといふので、半分隱れてゐるつもりでもあるんでせうけど……。然し、宿屋住居では迚もやり切れないから、今日あたり、前に此地にゐた時に二階を借りてゐた、牛込の家とかへ空き間を探して行つて見ると申して居りました。」

「細君が追駈けて來るつて……？」と私は驚いて、「西向君は、ぢやあ、細君を嫌つて逃げて來たんですか？」

「ええ、もう前の家には歸らないつもりなんださうですよ。迚もやり切れないと言つて居りましたが、成る程、あのかみさんぢや辛抱が出來ないと私も思ひますね。此頃では音樂のお弟子なんかもずつと少なくなつてしまつたといふことですから、西向さんも決心したんでせうね。あの音無しい人が、そんな思ひ切つた決心をしたんですから、もうよくよくのことに違ひございません。」

「ぢやあ、又當分東京にゐるつもりで來たんですね？」

「いえ、ところが、此地ぢや、まさか田舍のやうな譯には行きませんでせうからね。西向さんは斯ういふんでございますよ、あのかみさんは西向さんが東京へ來たと知つたら、一人で迚も田舍にぞ引込んでゐられる人ぢやありませんし、それにね、」とそこで堀戸は女のやうに袖を口に當てて、一段と聲を低くしながら、「これはここだけの話ですが、あのかみさんは近頃又旅廻りの手品師と出來たらしいんです、松玉齋天坊とかいふ手品師でして、何でもこの二三ヶ月、あの邊の田舍を彼方此方と興行して廻つたり、傍ら催眠術の治療とかをして歩いて居た男なのださうです。それが來年から東京の方へ歸るとか云ふので、その男と一緒に西向さんのかみさんは、西向さんが今迄通り岡谷にゐやうが、又東京に出ようが、それにはかまひなく、駈落するつもりらしいといふのです。で、西向さんは一度東京に來て、東京に住むと見せかけて、直に田舍へ歸るつもりにしてゐるらしく、現

に又發電所勤めに戻るつもりで、もつとも今度は××電氣會社と言つて、近頃新聞の廣告に株主の募集をしてゐるのがありますでせう、あそこへ這入る口が、殆ど定つてゐるんださうでございます。私も、その方にひよつとすると行くことになるかも知れません。西向さんが私の事を心配してくれて、私さへいいと言へば大抵行けるやうに、或人に頼んでおいてくれたんださうです。それは西向さんの音樂の弟子で、その會社の發起人の一人になつてる人ださうですから、大抵大丈夫らしいのでございます。……」

「そりや結構ですね。」と私は言つた。が、私が私の愛する西向に起つた色々の事件や、境遇に就いて、十分に考へたり味はつたりする暇も與へずに、この二十歳の、驚くべき老熟た口をきく雄辯家は、更に話頭を一轉して、

「先生、話は違ひますが、市木さんのお内といふのは又實に變つて居りますね。」と始めた。「お世話になつてゐて、こんな事を言ふのは何ですが、お内の中は隨分苦しいやうでございますよ。東京の家庭といふのは、みんなあんなものでございませうかね。もつとも先生のお内なぞは別物でせうが、市木さんのお内なぞ、贅澤なものをお上りになつて、お子樣たちなぞにも氣儘のしたい放題にさしてあつて、一寸見ますと、迚も田舍の萬や十萬の金持位では夢にも見ないやうな派手な暮しをして居られるやうですが、此頃あそこに毎日お客が五人見えますか、十人見えますか、何人來るか知れません

が、それが借金取でないものは一人もないんでございますよ。いえ、實際です、俗に、都會では借金で暮しが立つといふことをよく申しますが、まつたくその通りでございますな。それで、市木さんは御存じの通り寢坊でせう、然し主が寢てゐると聞いた位で歸る生優しい借金取は一人も居りませんから、市木さんのお起きになる時分には屹度二人や三人もう待ち構へてゐると言つた按排なんです。ところが、市木さんは御存じの通りあんなむつつりした方ですから、さて借金取に會つたと言つて、『今は都合が悪い』とか、『もう少し待つてくれ給へ』とか、『何とかするよ、近いうちに』とか言ふだけで、その外に無駄口なんて一口もおききになりませんからね。さうして、あの人は起きて、借金取を一通り返すと、それから夜の十二時頃まで外へ出られた切りなんですよ。後のは皆な奥さんが談判されるんです。これ又、市木さんとは反對で、初から終ひまで喋り續けて、何とか彼とか巧く誤魔化して行かれる手際は、これは確に千兩の値打がありますね、先生、そりや巧いもんでございますよ。けれども、流石にもう餘り長く持ちさうにありませんね、一つぐれたら、それこそ一遍に五組六組の差押へが重なるでせうと思ひますよ、この暮がどうしても危いと私は睨んでゐるんでございますが……。先生、市木さんは相場を盛んにおやりになるやうですね、もつとも、この頃はそれも向うの方から斷られて、おやりにならないといふ話ですが……」

そして、到頭、その年も暮れて、あけて一月一日の夜の十一時半に、私たちは新宿から汽車に乗つたのである。初めそれは暮の三十日の夜の出發にしようといふ事になつたのであつたが、私の色々の用事の都合で、二日日延べすることを止むを得なかつたのである。が、市木直吉は、何にしても三十一日は内にゐられないといふ譯で、西向の泊つてゐる新宿一丁目の甲信館といふ宿屋に來て居た。彼は詳しい事は何にも言はなかつたが、彼の細君と子供三人とも、やはり同じ日に國の岐阜縣の方へ年越しにやつてしまつて、その留守番を堀戸がすることになつたのであつた。だから、一日の晩、山に向つた私たちといふのは、市木と、西向と、私との三人なのである。西向君が信州に歸つて、××電氣會社の口を、自分のと堀戸のとをしつかりと極め次第、堀戸を電報で呼ばうといふ約束になつたらしいのである。ところで、私と市木とは、言ふ迄もなく、それが先に定めた見積り書に依つて、木曾福島から大町へ、大町から松本へ、そして松本から私の愛する諏訪の町へと、唯何といふ目的もない旅に出るといふ譯なのであつた。「私は然しその中で氣に入つた町があつたら、一月でも二月でも坐つてゐるつもりですよ。」と市木が言つた。「いや、僕も、僕も當分東京に歸りたくないなア。」と私も言つた。

そして、一日の晩、私たちが新宿から汽車に乗る時、堀戸が一人プラットフオオムまで送つて來

た。その時、堀戸は私たちと殆ど話する間もない程、市木と頻りに何か小聲で話してゐた。多分、市木が内にゐる事を恐れた暮の三十一日に、彼の家に起つたことを、留守番の役目として堀戸が報告してゐるのであらう。何でも、市木の家は到頭差押へ處分に遭つたらしいのである。といふのは、汽車が出てから、私が彼に、

「お内の方の都合はよかつたんですか？」と聞くと、

「なアに、豫定の如くやられたんですよ。」と彼は例に依つて、簡單な言葉でさう言つた切りだつた。

「やられたつて……？」と私が聞くと、

「官權――ぢやない、つまり私權の壓迫に遭つた譯ですよ。」と言つて彼は口の端に一寸皺を寄せて笑つた。「さあ、明日の朝は、丁度夜明け時分が日野春でせう、夜明けに起きなければ山が見えませんよ。早く寝ませうか？」

「さうしませう。」と私は言つた。

「ぢやあ、お寝みなさい。」「お寝みなさい。」と私たちは言ひ合つて、市木と、西向と、私とはそれぞれの寝臺の青いカアテンの中に身を入れたのである。

だが、さうしてゴトゴトゴトゴトと揺れる、狹い寝臺の上に横になつて、暫くすると、――その暫くの間は、市木のこと、西向のこと、堀戸のこと、これから行く私の愛する町の彼女のこと、さて

は私の妻のこと、――種々雑多の物の思ひが、合戰の繪圖のやうに私の頭の中で渦を卷いたが、いつとなくとろとろと眠り入つてしまふと、それ等の物の影は一切、私の頭から霧が晴れたやうに消えて行つてしまつて、私は時々ふと目を醒ますと、子供のやうな心でむくむくと寢床の上に起き上つた。そして寢間着の上から外套を羽織つて、明日の天氣はどうだらう、と窓を覗きに、汽車の昇降口の臺のところへ出かけて行つた。すると、思ひがけなく市木が立つてゐるのに會つたのである。私たちは譯もなく極りの悪い狼狽を感じて、「君は未だ寢ないんですか？」「いや、もう一度寢たんですが……」「どうも汽車の寢臺といふものは暑苦しいものですね。」「冬の星といふものは如何にも冷たさうですが、實に綺麗ですね。」「明日はいいお天氣でせう。」そして私たちは車室の中に歸つて來て、「お寢みなさい。」と言ひあつて、各々の青いカアテンの内に這入つた。

だが、先にも言つた通り、汽車が進むに從つて、又一寢入りしては目を醒まし、又一寢入りしては目を醒ます毎に、私の心持は山と共に次第に高く晴れて行くのを覺えた。私は、この夜が明けたら、……ああ、久し振りで見る甲斐の山の事を考へると、終にはその爲に段々眠れなくなつて困つた位であつた。そして私は目を醒ます毎に、傍の網袴に引掛けてある袖時計を見た。恐らく市木も、又西向も、私と同じ感じを經驗してゐるに違ひなかつた。そして、私は第何度目かに目を醒まして、時計を見た時、丁度五時であつた。で、もうかうか寢てはゐられないと思つたので、私は早速起きて

身支度をして、取敢ず大急ぎで、昇降口の臺に出かけて、外の景色を透かして見ると、外はまだ夜の最中のやうで、眞闇な空に星がきらきらと輝いてゐた。そこで、私が元の車室に歸つて來て、今の間に手水などを使つておかうと思つて、洗面所に這入つて手水を使つて出て來た時、不斷はそんなにも寢坊である市木が、丁度彼の寢臺から起きて出て來たのに驚かされた。同じ車室の中の、どの寢臺にも悉く青いカアテンが張られてゐて、私たちのを除いて、その中の他のどの一つでもが起きてゐる氣色のするのはなかつた。が、六時前になると、西向も「やあ、皆さん、早いんでございますな。」と言つて私と市木とが腰かけてゐる喫煙室に顏を出した。

私は嘗てそんなに冬の夜の明けるのが遲いのを恨んだことを覺えない。私は屢々立つて昇降口のところへ出て見たが、その冷々した溫度なり、走つてゐる速力なりから推して、最早確に、私たちの汽車が甲斐の國の、次第に高くなつて、信濃の國へと近づいて行く道の邊を走りつつあることを感じた。そして、到頭、待ち兼ねた夜が明けた。それは云ふまでもなく、夜から朝へかけて初めて通る汽車に違ひないので、線路に夜露か霜かが凍りついてでもゐるのであらう、ギイギイギイギイといふやうな軋む音が、間斷なく汽車の下で鳴つてゐた。無論、窓の硝子などは、まるで磨り硝子のやうに曇つてしまつて、外の景色は少しも見えない。開けようとしたが、迚も開きさうにないので、便所と、洗面所とに這入つて見て、そこの硝子窓を開けようとしたが、やはり挺でも動きさうにない。又甎け

出して、昇降口の所で、西向と力を合はして、各々轉げ落ちないやうに鐵の欄干を片手で捉まへながら、片手で出入口の扉を、そこも凍つて容易に開かないのを、死物狂ひの力をこめて、漸く開けることが出來た。

と、目の前に、眞に文字通り飛び込むやうに、殆ど全山雪に蔽はれた南アルプスの山々が、夜明けの黄色の空を背景にして、脊かすやうに聳え立つてゐるのが見られた。だが、それは一瞬間のことで、扉を開けると同時に、さつと水が流れ込むやうに、痛い冷たい空氣が這入つて來て、私の肝腎の眼鏡が俄に曇つてしまつたのである。が、それがいつもの湯氣か何かで曇つたやうなつもりで、幾ら待つてゐても、晴れないどころか、次第に甚だしくなつて來るので、外して見ると、それは自分の息が凍りついてしまつてゐるのであつた。

私は、竝んでゐる市木と西向とに支へられながら、眼鏡を拭いて、前の景色を眺めなほした。甲斐駒ヶ嶽のいびつになつて、傾きかかつた恰好の頂が、氷のやうな色をして光つて見えた。その後に、奥仙丈、地藏、鳳凰の山々の頂が、別々の氷の塊のやうな色をして、すくすくと兵隊のやうに競ひ立つて見える。さて目を後にやると駿河との國境の薔薇色をした空に、富士山がくつきりと版畫のやうな葡萄色に染め出されてゐる。それから、私たちは又右側の扉を、前と同じやうな難儀な思ひをして開けて見た。と、そこには直ぐ眼の前に、築山の石の山のやうな恰好をして、頂か

ら砂糖を振り掛けたやうに雪を被つた、八ヶ嶽が藍色して聳えて見える。

「到頭來ましたね！」と私は言つた。

「素敵ですね！」と市木が言つた。

そして、私たちを乗せた汽車は信濃へ信濃へと走るのであつた。

一と踊

一

私は、考へると不思議に思はれてならぬのである。そんな町、これ迄地圖の上でだつて、碌に目を止めて見たことはなかつたのである。それが三十歳の或る秋の日のこと、ふと何といふ事もなく東京から汽車で八時間ばかりの道程のその町に、友達と二人で出かけたのであるが、沿道は隧道だらけだし、汽車はガタ馬車のやうに搖れるし、私たちは屢々途中でいつその事降りてしまはふかと言ひ合つた位であつた。それはたつた一昨年のことで、指折り數へて見ると、その日から未だ二年の月日さへ經つてゐないのである。

だが、今や私はその町の停車場の、屋根一つない貧弱なプラットフォオムも、二三等の區別もない一間切りの小さな待合室も、驛前に竝んでゐる繭だか絲だかを入れる、一寸見ると兵營のやうな、窓の澤山附いてゐる大きな白壁造りの土藏の行列も、停車場前から一直線に走つてゐるでこぼこの道も、道端の家々の前を流れてゐる溝川も、青いペンキ塗りの郵便局も、その郵便局の建て附けの悪いドアも、さては二つに別れて急な坂道になる道の傍に立つてゐる石の地藏も、その道の突當りにある私の宿屋のいつも硝子が壞れたままになつてゐる瓦斯燈も、悉くそれ等は恰も私が生れた日以來ず

つと見馴れて來たもののやうに、私の記憶の藏の中に收められてしまつたものである。

だが、斯うはいふものの、而も私は何もその町につづけて住んでゐた譯でも、滯在してゐた譯でもなかつたのである。その初めの時は二週間ばかり、二度目には一月餘り、三度目にはほんの五日程、そして四度目の時は二ヶ月近く——それが去年の春のことであつた。そして私はその町の一人の藝者と犬のやうに夫婦になつたのである。そしてそれが私の今の女房なのである。

五月、——彼女は彼女の家財道具を引纏めて、彼女は元東京の者であつたが、十年間その町に住んでゐたのである。彼女にとつて十年間の浮世の町、私は今日限りさらりと身を洗ふのだ、さらば、さよなら、と惜氣もなくその町を引上げて來たのである。さればその秋に行はれた國の國勢調査の日、彼女はけろりとした顏をして、生れた時から私に連れ添うてゐるやうな顏をして、調査員に向つて、戸籍にもあります通り、私は何某妻でございます、としやあしやあとして述べたことに違ひない。彼女は私の内に來て以來、あんな山の中の町、鬼に喰はれてしまへ、と言つて更に振り向かないのである。

けれども、私は彼女と夫婦になつた後も、彼女に隱れて又二度もその山の町に出かけて行つたものである。その譯は斯うである。——初め私はその町で今の私の女房でない、別の一人の藝者に戀したのである。その女は藝名をゆめ子と言つて當歲の子を抱へてゐた。けれども私たちの間には到頭怪し

い關係はなかつたのである。

どんな男にもどんな女にも色々違つた面があるものである。それが白と黑と程の違つた面でも、その白もその黑も僞りではないところのその人間の一部なのである。例へば一人の辨慶が泣かぬ辨慶になつたり、泣く辨慶になつたり、一人の賢女が教育家であつたり道ならぬ戀に陷つたりすることは、それぞれ皆人間の自然なのである。つまり私も隨分惡い男であり、その子持藝者も案外だらしのない女であるかも知れないが、神樣の思召しか、或は彼の惡戲か、私は彼女と組合はされた場合、お雛樣のやうに二人は向ひ合つて、處女の樣に二人は話し合ふのである。——何處を見ても、いつの折も、何とも早淺ましい、厭なことだらけの世の中である、私とあなたでせめて一つ夢のお伽話をこしらへませうよ、とまあ斯ういふ譯なのであつた。

だから、別れてゐると二人は手紙を書き合ふのである。だが、その手紙には一切戀しいとか、好きだとかは認めぬのである。二人は又屢々贈物などし合ふこともある。が私は大抵わざと彼女の子供へのものを贈るのである。すると彼女は私の母への物を贈つて來るのである。念には念を入れ、用心には用心をしないと、夢のお伽話は壞れるのである。ところが、私がその町に二度目に出かけて行つた末の頃に、私等の間に今の私の女房が現れて、四度目の時の中頃に、私が彼女に攫はれたのか、彼女が私を攫つたのか、遂に取返しの付かぬことになつた次第である。

二

その私の女房といふのはなかなか利口物で、しつかり者で、もつとも十年も藝者をしてゐたのではあるが、三本の簞笥と、二本の長持と、その外茶棚やら本箱やら、（普通の書生の持つやうな本箱を二つも、）それから長火鉢やら客火鉢やら、手水鉢から下駄箱までも、それ等を先に言つた隧道を幾つも通るガタ馬車のやうな汽車に三十何箇の荷物にして持つて來たのでも分るであらう。當時彼女はもう一本の藝者であつたばかりでなく、藝者屋の主婦でもあつた。配下に藝者さへ抱へてゐたものである。そして更に感ずべきことには、彼女の同僚であるところの、その町の七十人の藝者たちは、無論旦那がない筈がないが、しかし誰が、どんな人が彼女の旦那であるかを誰も知らない位であつた。斯ういふと、彼女は如何にも海千山千の剛の者らしく聞えるかも知れないが、無論さういふ類の何かには違ひないが、私と同じ年の生れで、私と似て至つて氣弱の性質で、姑である私の母にもよく仕へ、夫である私にも誠に柔順で、それはなかなか感心な女房である。

從つて、この女、隨分頭も働く氣のきいた者であるが、何處やらうつかり者のところがあるのである。彼女が私のがらんどうの内にその三十何箇の荷物を運び込んだ時、折から私は旅に出てゐて留守

中だつた。そして三日目に私は歸つて來たのである。一週間程前、空家のやうな體裁の家から旅に立つた私は、歸つて來てその同じ家の中にそれぞれ安物でない相當な家財が充滿し、それ等が悉く整頓されておかれてあるのに驚いたことは言ふ迄もない。ところで、それ等の一つの簞笥の中からと、下駄箱の中からと、私は一枚の洗張りして間もない八反（織）の男の丹前と、二三度履いたばかりの男の下駄とを見出して一寸困つたことである。だが、私はそれに就いて默つてゐたばかりでなく、私自身の丹前を洗張りしてゐる間、どんな男が着たのだらう？　その女房の持つて來た丹前を着、お湯に行く時などの不斷履きに、どんな男が履いたのだらう？　その女房の持つて來た下駄を履いたものである。

これは然し女心の物を惜む性質から、思ひ切つて捨て兼ねて、彼女が持つて來たものかも知れないが、その事がなくつても、やつぱり彼女がうつかり者である證據は、やはりその時分のことであつたが、「もう大抵要らないと思ひましたし、母さんもこれは要らないと仰言いましたが、念の爲に紙の類は新聞でも何でもこの中に入れておきましたから……」と彼女は言つて押入の中の一つの支那鞄を指さした。「さうか、さうか、」と私は答へて、その日はそのままになつてゐたが、その翌日何かの用事があつて、私はその支那鞄の中の紙屑を掻き探してゐた。その時私は一册の小さな、見慣れない古びた手帳を手にとつて、何だらう？　と思つてばらばら中を繰つて見た、それは彼女の日記だつ

たのである。「何年何月何日」と細いペンの字で書いてあるのが一番初めに目についた。もう五年ばかり前の月日の事である。

私はふと好奇心に誘はれて讀んで見ると、それは特に、彼女が懷しい何某といふ男と、伊香保に遊びに行つた二日間だか、三日間だかの日記なのである。その報告に依ると、彼女は彼女の停車場から一人で乘つて、汽車が乘り換へになる或驛でその男と會つて、それから二人で樂しく出かけて行くのである。高崎から伊香保までの電車の中で、愛嬌のある醉つ拂ひの男と會つた話は、私がまだ彼女と客と藝者として坐つてゐた時分に、彼女からよく聞かされたものであるが、その事もこの日記の中に出てゐる。その話を聞いた時にも、無論彼女はそんな事とは言はなかつたが、私は心の中で誰か男と一緒に行つたのだな、とは察してゐた。何故と言つて、彼女は頗る旅の見聞の狹い女で、旅行の話といへば、子供の頃箱根に行つた話と、この伊香保の話と、もう一つ何處とかに行つたこと切りない、そしてその何處其處の旅行談には、必ず連の大勢の客や藝者たちの行動をまぜて話すのに、この伊香保の話に限つて、決して彼女自身の身邊に就いて話さなかつたからである。

その日記の中で、彼女はその男と夫婦として三日間行動したことを、女らしい嬉しさを廻らぬ筆に現はして、その途上の電車中での所見にまで、嬉しさの情を現はしてゐるのである。私はそれを讀み終つた時、元よりよい氣持にはならなかつたが、そのまま支那鞄の紙屑の中に押し込んで、初めの

自分の探し物を止めて、町に散歩に出たことである。しかし、それに就いては彼女に何にも言はなかつた。

三

そして彼女と私と連れ添つてから、早いものでかれこれ一年になるのである。

さて又一月ほど前のことであつた。夕方、私たちは母を合はして三人で夕飯を食つてゐるところへ、女中が一束の郵便を運んで來て、私たちの傍でそれを改めながら私の前に置いた時に、一通だけ「これは奥樣」と言つて、一つの手紙を彼女の前においたことがあつた。

彼女は、既に實家がない身の上で、唯一人の義理の妹の外、どこそこに叔母が、どこそこに叔父が、又どこには以前父の店にゐた者が、などと話すことがあるが、妹と叔母との外には殆ど文通などをしてゐない。見ると、今來た手紙ははつきりした男の筆蹟で、彼女はそれを女中の手から受取ると、一寸顏色を變へて、あわてて懷の中に捩ぢ込んだ。無論、私も母もそれに就いて何の質問もしなかつた。

「惡い手紙らしいな。」としかし私は思つたが……

その晩も私は散歩に出て、夜遅く歸つて來て、すぐ床に就いたが、氣が付くと彼女の顏色がいつになく冴えぬのである。いつもは屹度晴々しい顏をして、今夜は夫の機嫌はどうだらう？　と半ば伺ふやうに、活氣づけるやうにする彼女が、その晩に限つてそんな餘裕を失つて、ひどく自ら悄氣でゐるのか見て、私は直に、ああ、あの夕方の手紙に就いてだな、と思つたが、默つて床に就いたのであつた。

ところが、彼女は私が寢てからも、隣の間で、いつ迄經つても床に就かないらしいのである。彼女は何かひどく煩悶してゐると見えるのである。そこで私は思ひ切つて、「もしお前の俺に都合の惡いことで、つまり祕密で、俺の氣持の惡くなるやうなことがあつて、それが隱せることなら成るべく隱しておいてくれる方がいい。だが、どうしても隱し切れないことや、どうしても自分で始末の出來ないことがあるなら、遠慮なく言つてもいい、」と私は言つたのである。すると彼女はさめざめと泣き出した。

「夕方來た手紙に就いてか？」と私はそこで努めて優しく聞いてみた。

「濟みません、濟みません。」と彼女が泣きながらつづけて言ふところに依ると、今から三年程前に彼女はある男から五百圓の金を借りたが、半月程後にそれを返さうとすると、「まあいいよ、今は。いづれ一萬圓も君に金がたまつたら返してくれ給へ、それ迄は預けておかう。」と言つたのださうで

ある。

「お前はその時分その男と關係があつたのか？　どうせ話すのなら、話の分るやうに隱さずに言つた方がいい。」と私がそこで言ふと、

「ありました。」と彼女は俯向いたまま答へて、「が、直に、一月しないうちに切れました。その人が外の人と又關係の出來たことを聞きましたので、私の方からお斷りしたのです。その時お金を返さうとしたのです。」

「差支へなければ、その手紙を見せてくれないか、」と私は言つた。彼女からその手紙を受取つて見ると、それは男をこしらへて逃げて行く金を君に用立てはしない、どうしてくれる？返事を下さい、と言つたやうな簡單な意味のものであつた。彼女が言ふには、「今から半月程前に葉書で初めてお金の請求狀のやうなものを突然ここへよこしたのですが、それはそんな請求されるやうな筋のものぢやありませんから、さう書いて返事を出しておいたのです。」

「さうか、その金は兎に角俺がこしらへてやらう。」と私は暫くしてから言つた。「それから、ついでだから、今後又そんなお前も煩悶し、俺も氣持の惡くなるやうな事で、底の割れて來さうな心配のある話が外にあるなら、ついでに今みんなしてしまはないか。それ等のお前の澤山の家財道具や、抱へ藝者の着物や帶なんかのことで、又どこかから抗議を申込んで來やしないか？」

「いいえ。」彼女ははつきり言つた。「それは私が夢の家の年が明けて、二度目に自分で三春家に抱へられた時のお金とか、その他一切自分のお金で買つたのです。外にもう何もあなたの御迷惑になるやうなことはないつもりです。」

四

實際、今の彼女の料簡としては、そんな町の思出や、幽靈や、みんな消えてなくなれ、私は今人の正當な妻である、忘れられるものならあんな町のこと皆忘れたい、私の今迄の生活は今日の日の爲の用意だつたのだから、ねえ、あなた、あんな町のことなどあなたも忘れて下さいな。——さう彼女は心に祈つてゐるに違ひないのである。

けれども、私には忘れられぬのである。だから私は彼女と住んでからの一年の間に二度も、そして今度と合はして三度も、彼女に隱れて、その山の町に行つたのである。

彼女が私にこの町に行かしたくない理由は色々あらう。が、その最も大きな理由の一つは、嘗て彼女の同僚であつた、あの子持藝者のゆめ子と私との關係である。彼女にして見れば、ゆめ子と私とがそんなお伽話の關係であるとはなかなか信じられないのである、よし又それを信じたところが、その

お伽話がいつ迄お伽話の境に安定してゐよう？　と心にかかるのである。彼女はそのゆめ子の姉さん藝者でありながら、不意に現はれて、そして鳶のやうに私を攫つた事を思ひ出すであらう、その腹立まぎれに、ゆめ子が彼女に就いての知つてゐる祕密の、ある事ない事を私に告げ口しないものでもない。……それからそれと考へると、彼女の心配は三十何箇の荷物にもはひり切らない程に、次第々々に殖えて來るのであらう。

「どうぞ後生ですから、」と彼女は屢々私は言ふのである、「外にどんな好きな人をおこしらへになつても私は決して何とも申しませんから、どうぞあの町にだけは行つて下さいますな、後生ですから。」

「よし、よし。」と私は答へておくのである。私だつて彼女の料簡を推察して同情しないものでもないのである。

けれども私は、たまたま私の商賣が著述業であるのを利用して、仕事をする爲、內では落着いて出來ないといふ理由で、屢々旅に出ることがあつた。そして旅先で仕事を仕上げると、二日なり三日なり內の方の體裁をごまかせる餘裕を見出して、そつとその町に廻つて來るのである。そして一年前のやうに、私の愛する子持藝者のゆめ子と、お雛樣のやうに向ひ合つて坐つて來るのである。唯それだけの事なのである。或ひは彼女のだんだん大きくなつて行く子供の爲に、玩具とか、襦袢とか、靴とか、そんなものを買つて行つてはその僅かばかりの逢瀨の一日をば、彼女と彼女の子供とそして私と

の三人で、浮世の苦勞の風は何處の空を吹くか、人間の邪氣や罪や淺ましさの雨は何處の土に降るか、と言つたやうな顏をして、私たちは子供のやうな罪のない話をして、膝一つくずさずに行儀よく交際して、そして私たちは別れて歸るやうなこともあつた。

子持藝者のゆめ子も亦珍しく利口な、しつかりした、頭のよい女であつた。考へて見ると、今となつては彼女にとつて私は可成り不愉快な、憎むべき男に違ひないのである。何故と言つて、彼女は以前、よし私が彼女に戀してゐたやうに彼女は私に戀してゐなかつたとしても、町の噂では、現に私の女房でさへもそれを信じてゐた程、私と彼女とは親しい仲だつたのである。それをおめおめと、——私はこんなもう頭さへ禿げ掛つてゐるやうな男だが、客としてはこれでもそんなに惡い部類のものではないに違ひない、流石にあの人は子供までであるけれど、東京の、學問などする人間の目に付くところがあると見える、結構な事である、とまあこれはお話だが、多少町の外の藝者たちに羨まれてゐたのであらうが、——それがおめおめと裏切られて、年もずつと上の姉さん藝者に寢とられてしまつたのである、何といふ甲斐性なしだらう、と人々に後指さされたことであらう、藝者としてこれは死ぬ程の恥に違ひない。その事もその事だが、彼女は又彼女だけの考へとして、その事があつてから私の顏を見る度に、この人は常々あんな綺麗な口をきいてゐながら、やつぱりさうだつたのか、と私流の言葉で言ふと、お伽話を無殘に打ちこはされた恨もあるであらう。そして未だにしやあしやあとした顏をしてやつて來るとは、呆れた人だ！　と彼女は心の中で思つてゐるに違ひないのである。

果して、私が女房を迎へた後に、彼女に隱れて一度行き、二度行きしてゆめ子に會つた時、私の心なしか彼女の言葉や行ひは殆どこれ迄と變らなかつたが、何となしに私に對して冷たくなつたやうに私は感じ出した。元々一寸薄情らしく見える女ではあつたが、その薄情らしい中に、その薄情らしい形式にさへも、私は魅力を感じたものであるが、今やさういふ事でなしに、彼女が眞から心の底の冷たさをちよいちよいと私に對して、一度目の時よりも二度目の時と言つた風に、出して來るやうに思へてならぬのである。

そしてそれは決して無理とは思へぬことである。若し彼女がもう少し毒婦型の女であるならば、此際彼女はうんと私に親みを見せて、私が近附いて行つたところで、ぽんとはね附けて、私に復讐すべき程のものである。だが、誠に甘い話だが、たとひ彼女がさうであつても、私は私として彼女に益々愛を覺えるのである、私も隨分をかしな人間である。

五

私は內で家內の者と滅多に口をきかないが、ふとセンチメンタルな氣持になつて、その子持藝者の

噂を口にしたくなつて、それを女房に話すと、彼女は必ず色々な藝者の内幕話をした。私自身も子供の頃、或市の藝者町に十年ばかり住んでゐたので、今更女房の口から聞く迄もなく、色々な彼女等に就いての内幕を聞き知つてゐる。今や、それ等の藝者の一人であつたものを緣あつて女房に持つにつけて、それ等の話を思ひ出すことは、私に決して心よい氣分を與へないのである。

私の女房の言ふことに、何某といふ藝者は、それは仕樣のない女で、或男と思ひ合つた末、やつと一緒になつたと思つたら、今度は別の男に惚れて、かと思ふと、又別の男に口說かれたので、その方になびいてしまつて……等、等、等と話すのである。そんな話はしないがよい、と私がたしなめると、馬鹿でない私の女房はふと氣がついて、すぐに話を變へた。藝者仲間の腐つた話を聞くことは、私の女房はどれ程の程度のものか知らないが、やつぱり引いては彼女の過去の身の上が樣々と私に邪推されるからでもある。

或日は又彼女は私の愛する子持藝者の身の上に就いて話すのである。「あなたはどんな風に思つてらつしやるか存じませんが、あの人はなかなか一通りや二通りの人ぢやありません。」と彼女は言ふのである。そして私が聞いたところに依ると、――彼女は初め或男と堅く約束もし、深い關係もあつたのであるが、その男が兵隊に取られて東京に行かねばならぬ事になつたので、二人の男女は實際、はたの見る目も氣の毒な程別れにくがつた、彼女はわざわざ男が入營する前の日まで、東京まで送つ

て行つて別れを惜んだものである。

ところが、その男が兵隊に行つた二年の間に、彼女は腹に子を持つたのださうである。二年の後、兵隊から歸つて來た男に呼ばれて、彼女は俯向いてその男の前に坐つた時、男は「お目出たう、よく留守をしてゐてくれたね。然し、これでもう君と會ふ事もあるまい、さよなら。」と言つて、幾らかの金をくれたさうである。彼女は子のこぼれ落ちさうな腹をかかへながら、男の言葉を徹頭徹尾默つて聞いてゐた。そして默つて金を受取つた。「ゆめちやんだつて辛かつたでせうが、男の方の心はまあどんなだつたでせうね。だけど本當によく出來た人だとみんな褒めました、その男の方を。」と私の女房は言ふのである。

尙、彼女の言ふところに依ると、ゆめ子の養母の、彼女の叔母は、その町の藝者家中で一番金を貯めてゐると言はれてゐる位で、隨分人でなしの評判の惡い人だが、ゆめ子も一寸見たところは大人しいがあのお母さんの氣性を十分受けてゐるといふ人の評判である。その時の子が今の赤ん坊で、その子の父親から手切金として、及び子の養育料として、間に彼女の養母が色々と奔走した末、隨分のお金を取つたといふことである。その上、まだ子が大きくなつた時の何とか料として、十五年後に拂ふ約束で金一萬圓の證文まで取つたんださうだが、それは何でも間に新聞記者が入つて、うまく騙し取られて、破り捨てられてしまつたが……などと私の女房は色々と惡い取沙汰をするのである。

それ等の話は本當か、嘘か、どの位の本當か、どの位の嘘か、私は知る由もない。が、まあ、世の中といふものは何としたものであらう。けれども斯ういふ事は恐らく藝者仲間だけの話でなく、華族には華族の、金持には金持の、學者には學者の、それぞれ各々の階級の人間にもやつぱり色々と變つた形で轉がつてゐることであらうか。

だが、それは私と彼女との間に起つた事ではないのである。——私たちはこんな事ばかりでなく、物事を常にこんな風に判斷して、世の中を渡つて行く必要があると私は思ふものである。だから、私は一寸も變らず、今も尙その子持藝者が懷しく、彼女の住むその町がやつぱり私のお伽話の町であることに變りはないのである。

六

ところが、今から一ヶ月ほど前のことである。或日暫く音信の絶えてゐたその子持藝者のゆめ子から突然私に手紙が來たのである。私は何とはなしに震へる手附でその封を切つた。私は胸を打たれた。

その一二ヶ月前に私は私の一人の友達と、私の女房に內所でその町に行つた事があるのである。先

に言つた、それが私の女房を迎へてから、隱れてそこへ行く第二度目の時なのであつた。その時のこと、或晩、私はその町から一里程はなれた隣の町に、ゆめ子と、もう一人他の藝者と、私の友達と私との四人で、自動車に乘つて活動寫眞を見に行つたのである。その事が後でその町の人の噂に上つて、私たちの事を何か隱れ事をしに行つたといふ風に看做されて、その町の新聞に載せられたのださうである。彼女からの手紙の中にその新聞の切拔が入つてゐたのである。

そして彼女の手紙が言ふには、私がどんなに辯解しても人が承知しません、あなたと私とは決して厄ない仲でないことを、——私は口惜しくてなりません、どうぞ、どうぞ私を可哀さうと思召すなら、あなたからも、あなたと私との交際が潔白なものであるといふ事をお手紙で書いて來て下さい、とざつと斯ういふ意味なのである。

つまり、到頭私たちの間に破裂が來た譯である。私は思ふのである。言ふ迄もなく、これは彼女が明かに私をそでにした氣持で書いたものに違ひないのである。恐らく彼女に目下よい旦那が附いて居るのであらうか、その旦那がこの新聞の記事を見たり、人の噂を聞いたりして、大きに怒つて彼女、を詰つたものであらうか、彼女がそれを色々辯解した末、旦那の發言でか、彼女の思ひ附でか、兎に角二人一緒にゐるところで、この手紙を認めたものに違ひないのである。何とも無理もない次第である。

私は直に彼女の要求通りの返事を書かうかと思つた。だが、もうさうしなくとも、恐らくこの手紙を書いたといふことだけで、彼女の用は足りたのに違ひないと思つた。私は女房に見られぬうちに、そッとそれを灰にしたことである。

だけど、私が彼女を愛することは毛頭これ迄と變りはないのである。が、もう私は如何に彼女がまだ藝者稼業をしてゐるものであるからと言つて、最早あの町に出かけて行つても、彼女を呼ぶことは遠慮しなければならぬことになつたのである。恐らく私はもう二度と彼女を見ないかも知れないのである。

七

けれども、この文章の初めに書いたやうに、今私は又三度目にその山の町に、女房に隱れて、今度は一人でやつて來たのである。そして此度は私はわざとこれ迄の行きつけの宿屋には行かなかつた。汽車で私は屋根もない貧弱なプラットフオムの停車場に夜着いた。帽子を深く被つて、マントの襟を立てて、知らぬ宿屋に俥をつけた。私はそこの女中に賴んで、少しぐらゐ部屋は汚くても狹くてもいいから、奥まつた隅つこの、人目に附かない、そして便所に行くにも湯殿に通ふにも、餘り長い

廊下を通らないやうな部屋に通してくれと賴んだ。東京を出たのは一週間ほど前で、私はもう目的の著述の仕事は他所でしてしまつて、最早家に歸るまで何にもしなくてもいい身體になつてゐたのであつた。この邊の土地では宿屋に藝者が入るので、夜になると方々の部屋から陽氣な聲が、一人の私をそそるやうに聞えて來るのである。

私は晝間は持つて來た小説本を讀んだり、又はぼんやりと机に肘を突いたりして、茶を飲んで煙草をすつて、煙草をすつて茶をのんで、そして障子の間の硝子窓を通して山を見て暮した。山はこの世に於いて女と共に私が最も見ることを好むところのものである。だが、そんな風にして暮すと、一日は一年のやうに長い退屈な思ひがするのである。以前は私はこの町に來る度に、夜でも晝でも、一寸でも間があると藝者を呼んで、藝者とそして窓の外の山とを樂んで暮した。藝者は大抵ゆめ子を呼んだことは言ふ迄もない。今も、退屈だから、他の知らない藝者でも呼ばうか、と幾度私は机の前の、柱に取附けてあるベルを押さうとしたか知れない。だが、私は辛抱して、その日が暮れると、帽子を深くかぶつて私はその何を見ても最早私の記憶の藏にあるところの、その町々を往きつ戻りつした。そんな時如何に私の心が二十歳の青年のやうにセンチメンタルになつたか？　それは諸君の想像にまかさう。私は何となく主人のない犬のやうな氣がした、この町は物のにほひ迄私の腸に染みるのである。

そして私はそこに三日ゐたのである。そんな風にしても、私はいつ迄もこの山の町を離れたくない氣がした。けれどもそれ以上ゐると、もう内の方にごまかしが附かなくなるので、三日目の夜の汽車でそッと來た町を又そッと立つつもりでゐた。

その日の朝のことである。朝早く、まだ町の家々の戸が八分通りまで閉まつてゐる時分であつた。私は宿屋の裏門を出て、なるべく裏町を通つて、なるべく早く町外れに出て、そして町の後の山に登つたのである。何をしようといふ目的があつてではない、唯漠然と、日の光の下に横たはつてゐるその町を見ようと思つて、と言ふよりも更に少年らしいセンチメンタルな氣に襲はれてである。

山道を五六町上つたところに、右に入るとその町の小さな、春は櫻の咲く、公園がある。私はその公園への道を行かずに、道が二つにわかれる角のところで、少しばかり道のない草の中を分け登つて、草の上に蹋んで煙草を吹かした。私の足の下には掌ほどの小ささにその町が見下ろされるのである。先づ目につくのは、その町の權威であるところの、製絲工場の煙突である、どういふ譯からかそれ等の煙突は悉く赤色に塗つてある。この前この上の公園に今の私の女房やゆめ子等と一緒に遊びに行つて、同じ町を見下ろした時には、それは僅か半年ほど前のことに過ぎないが、當時生絲の相場は天井知らずで、これ等の赤色の百本の煙突は萬本あつても足りないかと思はれる程、黑々とした軍艦のやうな威勢のいい煙を吐いてゐた。ところが、今ではその相場が四分の一に下つてしまつたと

かで、それ等の煙突の工場はこの所當分休業しなければならぬ狀態なのださうである。心なしか私の目に今はそれ等が何と半年前の威勢に比べて、如何にも悄然として朝空の下に立つてゐるやうに見えるのである。

して見ると、それ等の煙突の何本かの持主の、私のゆめ子の子の父親も、此頃は見らるるやうに商賣も不景氣だからなぞと言つて、彼女への仕送りを減らしたり、或は斷つたりしてゐないか知ら？そして又思ひ出したことには、先日私の女房に五百圓の金を催促して來た男といふのも、多分やつぱりそれ等の煙突の持主で、世の中の景氣が惡いにつれて、むしやくしや腹からあんな手紙をよこしたものかも知れない。その男も今はあの煙突の下あたりで眠つてゐるか、子持藝者も眠つてゐるか、子は泣いてゐはせぬか、泣いてゐるなら乳をやれ、乳を飲んで子が又寢入つたら、ゆめ子よ、まだ朝は早い、君ももう一度お休みなさい。

その時、私の足下の道を麓の方から歩いて來る人の氣配がしたのである。見てゐると、柴でも採りに行くのか、背中に四角な木の枠のやうなものを背負つた、二人連れの老婆の姿が現はれた。二人とも默りこくつて、肩を竝べて歩いて來るのである。年の頃は双方似たもので、六十近くであらうか、彼女等は私のすぐ足下の道の邊まで登つて來た時、初めてどちらかが、「一服すまいか、」と言つて、路傍の石の上か何かに、多分その石が小さいので、小鳥のやうにくつ附いて竝んで腰を下ろした。そ

れは私のところから辛うじてその頭だけが見える位置である。

「大分暖かになつたね。」とどちらかが隨分暫くしてから斯う言つた。見ると、煙草でもすつてゐるらしく、紫色の煙が彼女等の頭のところから、ぷかりぷかりと私の方に上つて來るのである。

「もう山にもすつかり雪がなくなつたね。」と又暫くしてから別の聲が言つた。そして後は紫の煙ばかりぷかりぷかりと上つて來て、そのまま話聲はしないのである。

私はその時咽喉元に痰か何かがからまつて、オホンと一つ咳拂ひがしたくて堪らなくなつたのであるが、さうすると下の彼女等を驚かしはしないかと氣兼されて、幾度も唾を呑んで辛抱した。その代り今の先までの變挺な感慨の氣分などは彼女等の煙草の煙と共に、さらりと何處かに消えてしまつたと見えた。何の鳥だかがちろりちろりと私の頭の上の枝で鳴くのが聞えるのである。ひどく天地が悠久な氣がされるのである。

「一つ踊つて行かうね。」とその時ふと又下の老婆の聲が聞えたのである。私は私の耳を疑つた。が、確にそんな風に言つたと聞えたのである。

「ああ。」と他の老婆がはつきりと皺嗄れた聲で答へたのである。

私は驚いて、下の道に目を凝らすと、いつの間にか背中の枠を外して身輕になつてゐた二人の老婆が追分道のまん中に現はれて、

「おれ、聲が出ないから、お前うたつてくれね。」とその一人が言つたかと思ふと、他の一人が返事の代りに、

〝エーーエ、せくなせきやるな、浮世は車、めぐる日なみの、ソラ、めぐる日なみの約束に……

と忽ち唄が始まつて、私の目の下に二人の老婆がしやあしやあとして、極めて簡單な、足を二歩ばかり交る〳〵前に出したり、手を二三度叩いたり、兩手をぶらりと脇に垂れたり、それで終ひ。――と言ふ程の簡單な踊ををどつたのである。めぐる日なみの、ソラ、と言ふところでは、うたはぬ方の老婆も合唱するのである。そして最後に「そら來い、あばよ、又來なよ」と、そこでもうたはぬ方の老婆も合唱するのである。これは私が以前この町で藝者を呼んだ時分に屢々見たところのこの邊の土俗の唄と踊なのである。さて、一さし終ると、踊の手振りの終らぬうちに、

「も一つやろか、」とうたつてゐた聲があわてて言つて、

〝エーーエ、はなればなれのあの雲見れば、明日のわかれが、ソラ、明日のわかれが思はるる。

ソラ來い、アバヨ、又來なよ。……

とつづけて、二人の老婆は先と同じ踊をくり返した。

そして私が呆氣に取られて、實際心から感動して眺め入つてゐるうちに、踊は一息の間に濟んでしまふと、道の上の老婆は、又傍の私のところから見えないところに入つてしまつて、暫くがさが

さとやつてゐたかと思ふと、即ち前の通りの、背中に何か枠のやうなものを背負つた恰好になつて、その間始終無言で、さつさと何事もなかつたやうに、山への道を歩き出して行つたのである。――これは嘘の話ではないのである。

彼女等の姿が左の道の山の蔭に隠れた時、私は初めてにッと口元を歪めた。私は頗に不思議な微笑みを感じたのである。が、それと一緒に次の瞬間に私は目の中が急に生温くなつて、ぽッと眼前の足の下の町の景色が濡れて見えるのを感じた。私は目に不思議な涙を感じたのである。その時何處の笛だか多分朝が明けはなれたことを知らすのだらう。ボオと鳴り渡つたのである。で、私は急いて私の宿屋への裏道を辿つた。

宿に歸つてからも、私は頻りにあの山道の二人の老婆のことを思ひ出した、思ひ出すと、にッと頗笑まれて、次の瞬間に反對に目に涙を感じた。飯を食つて机にもたれて、障子の硝子越しに山を見た時、ふと私は今夜この町を去るんだ、今度いつ來られるだらうと思つてセンチメンタルになつた。今迄幾度來た時でも私は彼女故にこの山の町がこんなに忘れられなくなつたところの、その彼女――ゆめ子に會はなかつたことはなかつた。だが、此度を初として、これからは幾度來てもやつぱりこんな風に、机にもたれて煙草をすつて、山を眺めて夜だけ町をそッと歩いて、それだけでいつも彼女に會はずに歸らねばならぬのだと思つた。ふと又私の可哀さうな、この町で威張つて藝者をしてゐた時

よりも決して心の嬉しくなつてゐない、どうぞあの町の話をして下さいますな、唄や三味線を私は忘れたいと思つて居ります、私はもう大分忘れました、と言つて、料理の本などを一所懸命に見てゐる、私の女房のことを考へた。……

だが、いつか、直に私たちもみんな爺さん婆さんになるのだらう。そして若しゆめ子と、私の女房と、又私とても、どんな縁あつて同じ土地に住むやうなことがあるまいものでもない。そしたら柴刈りに行け。その時は今日の婆さんたちのやうに、仲よく踊りなさい、踊りなさい、と私は思つたのである。

私はその晩その町を立つた。そして家に歸つて、「やつと原稿を書いたよ。少しゆつくり遊んで來ようと思つたが、すぐ歸つて來た。」と鹿爪らしい、浮世の夫の顔をして、斯う女房に言つたことである。

心

中

到頭、九月の或晩のことである、私は、私の女房の義理の妹の婿に當る、魚屋の戸水甚吉と飯田町の停車場から乗り出して、信州の上諏訪町へと向つたのである。

すると、私は丁度三年前のことを考へるのである。やつぱり同じく秋のことに、私は私の友達と同じ時刻に同じ停車場から、同じ町へと向つて汽車を乗り出したことがあるのである。私と私の友達とは二人とも小説を書くことを仕事とするものであつた。その年は九月に這入つてから、急に眞夏にも知らなかつたやうな暑さの日がつづいた。私は私の友達と、或晩カフエエで落合つて、

「斯う暑くてはとても堪らない、雜誌社との約束の小説など、これではなかなか果せさうにない。」

と私が言ふと、

「僕もさうだ。」と友達が、「君一緒に何處かへ旅に出ないか？」

そして私たちは旅行案内の附錄の不完全な地圖を探つて、何といふ譯もなく、信州の、その湖のほとりの溫泉町に出かけることになつたのである。もう何と言つても秋のことだ、一夜明けると時候ががらりと變ることがある、殊に信州は寒い國ださうだ、用意にセルの單衣ぐらゐは持つて行かねば

なるまい。――私たちはそこそこにカフエエを出て、その晩の十一時に飯田町を出る汽車に乘込んだのであつた。

私にも、私の友達にもそれは初めて踏むところの、而もこれ迄殆んど物の本でも人の話にも聞いたところのない町であつた。私たちの汽車がまだ甲州を通つてゐる間は、東京の暑さのつづきを感じたが、一夜明けて、汽車が信州への境を越えた頃から、それの止まる驛々で、息拔きにプラットフオオムを散歩して見ると少し肌寒を感じる程の秋冷の氣を覺えた。汽車の中があんまり蒸し蒸しするのでこんなに涼しさを感じるのだらうか、それも幾分はあるかも知れないが、君、涼しさといふよりも、大袈裟に言ふと寒さを感じるではないか、と私たちは話し合つた。そして朝の八時頃、とある驛を出た時に、試みに私たちの隣の席に坐つてゐた乘客の一人に、

「今度は何處ですか？」と聞くと、

「上諏訪です。」と答へた。

「君、僕たちの下りるのは上諏訪だつたかね？　下諏訪の方かい？」と私はあわてて友達に聞いてみた。

「ああ、上諏訪だよ。」と友達は答へた。

私たちが汽車を下りた時、上諏訪の町は丁度起きたばかりの頃であつた。何處の停車場の前でも同

じことだが、大きな廣場があつて、今私たちが下りた汽車の客たちが散つてしまつた後は、廣場を隔てた遙か彼方の街筋に軒を並べてゐるところの、宿屋、畫葉書屋、雜貨屋の類の家々で、番頭や小僧たちが朝の支度を始めるのが見通された、又廣場の片側の隅には、客を求め得なかつた車屋の一組が小さな小屋掛のやうな家の中に、目白のやうに並んで腰かけてゐた、そして、その外に私たちの目を遮るものはなかつたとさへ言ひ得るのである。

「君、やつぱり寒いね。」

「ああ、驚いたね、僕は風をひく時のやうに寒いよ。それに、寂しい町だね。」

「いかにも山國らしいね。湖水は何方にあるんだらう？」

その時停車場の前に立つてぼんやりと町を見てゐた私たちの傍に、一人の車屋がやつて來て、

「旦那方は何方へ？　お供いたしませうか？」と言つたのである。

元より私たちはその町の何處の宿屋へといふ豫定はなかつたので、唯註文としては、私たちは二人ともそれぞれ仕事を持つてゐたので、お互ひに邪魔しない爲に、別々の、そんなに惡くない宿屋に連れて行つてくれ給へ、だが、折角のことには、湖水の見える家がいい。――だが、私の案内された宿屋は、とても辛抱が出來ない程、汚くて、がさつで、騷々しかつたので、私はそこで晝飯の時まで寢てから、早速友達の泊つた方の宿屋へ行つて見た。そこは私の宿屋よりはずつと居心地がよささうだ

つたので、友達は當分の滯在する宿をそこに極めると言ふことだつた。私はその宿の番頭と相談して、一里離れた隣の町の何某といふ宿屋がいいだらう、といふことで、その晩からそこに移ることになつて、さて友達と二人で、一寸上諏訪といふ町を歩いて見ようかと言つて、町に出たのであつた。

東京はやつぱり昨日のやうな暑さだらうか？　同じ日本の中でも、こんなに時候が違ふものだらうか？　セルの着物でも少し寒過ぎる位だね、などと言ひながら、私たちは先づ湖水のほとりに出て見た。だが、そこへ行く前に、ポツリポツリと雨の滴が落ちて來たので、私たちは二三丁手前から、悉く四面を山で圍まれた單調な景色の湖水を一瞥しただけで、あわてて宿の方に引返した。どんよりと曇つてゐる空の調子も手傳つてはゐるのだらうが、路傍の柳の枝も近くの山の木の色も、如何にも明日は忽ち色があせて枯れさうな趣きに見えるのである。

私たちが宿に歸り着かないうちに、いつか又雨が止んでしまつたので、今度は先と反對に、町の方へと行つて見た。町も亦うそ寂しい町だつた。ところどころの呉服店に、秋から冬へかけての物の賣出しの旗がたつた一つの町の賑かな景物であつた。そして、もう一つ私が忘れないのは、町の要所々々の角に、墨と赤インキとの肉筆で、『大阪名優中村雁治郎大一座』と認めたビラであつた。これは屹度『鴨次郎』とか、『雁十郎』とかいふ贋物ではないかと思つて、近寄つて調べて見たが、正に本物の雁次郎に違ひない證據には、入場料一等金五圓と書いてあつた。だが、今し方の雨の爲に、

『中』といふ字も『雁』といふ字も、墨が少々洗ひ流されて、慘憺たる恰好をしてゐるのである。

「もう歸らうか。歸つて夕飯でも食つて、君を下諏訪へ送つて行かうか、」と友達が言つて、私たちは、いつまで行つても單調な癖に盡きさうにない一本町を、いい加減のとこで引返して來ると、ふと行手の方から樂隊の音が起つて來た。そして私たちがあの停車場の前の廣場の一二町手前に來かかつた時、その樂隊の一行と行き違つた。太鼓、喇叭、笛等六人の樂隊が、『煙も見えず』の譜を奏して來る後から、十數臺の人力車がつづいて來た。車の先頭に乘つてゐる人物は、私も確に雜誌の口繪で見覺えのある中村雁次郎に違ひないのである、果して振り返ると車の脊中に白い紙の旗に、墨で彼の名前を認めたのが、ひらひらと秋風に搖れてゐた。そして中村梅玉も、中村福助も、中村扇雀も、成る程中村雁次郎の大一座が十數臺の車に乘つてしづしづと練つて行くのである。——

不思議といへば不思議なことには、今、三年後の同じ秋の日のことに、私が魚屋の甚吉と同じ上諏訪町で汽車を下りて、私たちが取敢ず或宿屋に行つた道で私は再び町々の辻に中村雁次郎大一座のビラを見出したことである。明らかにその間に三年の月日が經つてゐるのであるから、これは夢の話ではないのである。甚吉が辯護士の神山勘藏といふ男を訪問してゐる間に、私は心がそわそわして落着かないものだから、宿屋の眞鍮の棒の嵌まつた窓にもたれて、往來を眺めてゐると、向ふの裁判所の角にもそのビラが掛つてゐるのである。それを讀んで見ると、この前の時の中幕『河庄』と大きく